



# セダイパレット

ぎんいろ

---

保坂 歩

老人という呼び方が嫌いだ。

老人という言葉が他人に大して使う人間は、若さ故の驕りと言うか過ちと言うか、老いに対する優越感を持っている気がする。『老い』という言葉には経験豊かという意味もあるらしいけれども、それでも嫌だ。

老いは誰に対しても平等にやってくるというのに、やがて無くなる威を奮ってどうする。

まだそのままの意味の『高齢者』という言葉の方が適切だと思うので、いざというときは僕も妥協して使っているけど、これもなんだか人格性に乏しい。『お年寄り』も同様だ。

ついでに言うと、お爺ちゃんとかお婆ちゃんとか言う呼び方も苦手だ。

自分の祖母や祖父ならまだいいけれど、血の繋がりも何も無い他人の祖母や祖父をちゃんづけするのは、どうにも礼を失しているように感じる。

じゃあどう呼ぶんだよと訊かれれば、僕はこう答える。

名前で、良いだろう。

相手は人間なんだから。友人にだってなれる、どこにでもいる人間なんだから。

僕、藤原忠清<ふじわら ただきよ>も自分の名前には誇りを持っている。

十七歳の高校生にしては古臭いとか武将っぽいとかよくバカにされるが、祖母がつけてくれた由緒ある名を、恥じる必要なんて無い。

胸を張って生きている。

それが、僕が生まれてすぐに病気で亡くなった祖母の形見なのだから。

名前は、年を取ったって変わらない。

鈴<すず>さんだって――ずっと鈴さんだった。

これからだって、ずっと鈴さんなのだ。

最初から、重要なのはそれだけのはずだ。

窓から竹林が見えた。

深緑のすらりとした竹が何本も、真っ直ぐ天に向かって生えている。その景観は水墨画のように木訥で趣があり、風に揺れてさらさらと擦れる笹の音は耳に優しい。

八畳ほどの和室には、程良い木漏れ日が差していた。

西陽の強い鈴さんの部屋は、この竹林のおかげで直射日光から守られている。七十歳を過ぎた鈴さんには、竹林は丁度よい庇護者とも言える。

僕は鈴さんの横で正座して筆を握り、机の上の半紙に向かっていた。

「そう……そこは筆に力を入れてはねるんじゃなくて、ゆっくりと力を抜きながら、筆先を離すんだよ」

鈴さんが半紙を覗き込んできた。白髪になりきらずに銀色になった鈴さんの髪の毛が、僕の首に触れる。深く刻まれた首の皺と、老眼鏡の金色の縁が垣間見えた。

曲がり気味の腰では着物は辛いらしく、鈴さんは割烹着を愛用していた。

「こうかな……？」

僕は言われた通りに墨を含んだ毛筆を運び、そっと半紙から離す。緊張に指が震えそうだったが、何とか抑えられた。

僕の大切な友人、御船鈴<みふね すず>さんは六十歳まで書道教室を一人で切り盛りしていた。今はもう七十九歳。体力的な問題から一線は退いているが、指南を望む生徒にはこうして週末の空いた時間に教えてくれる。

と言っても今どき書道を習おうとする学生なんて僕を含めて町に数人程度で、その内一人は僕の幼なじみの、楯岡朋香<たておか ともか>ぐらいのものだ。

今日は土曜の午前中で、生徒は僕一人。手本は『蘭亭序』と言う、中国の詩を集めた物の序文だそう。宴の最中に書かれたという言い伝えがあり、最後の方になってくると誤字も結構ある。何だかお茶目な書だ。

「そうそう……うん、よく出来たねえ」

まったりと、間延びするような声色で鈴さんが微笑む。

鈴さんの声はつきたての真っ白なおもちのような、温かい柔らかさがある。いつもにこにこ笑って人当たりが良い鈴さんが、僕は昔から大好きだった。

「今日の書は格別にいい出来だねえ、忠清くん。長年教えてきた甲斐があったね」

老眼鏡を通して僕の書をまじまじと見る鈴さんは、本当に嬉しそうだ。

「鈴さんが丁寧だったからだよ」

「そうだといいねえ。こんなお婆ちゃんの指導で、忠清くんが書道の楽しさを分かってくれるなら、悔いは無いねえ」

うんうん頷きながら鈴さんは座布団に座り込み、仏壇に目をやった。

僕は意識して、そちらを見ないようにする。

「鈴さん、こっちはまだまだ書の道を教えてもらおうと思ってるんだから、元気でいてもらわな

いとさ」

「そうだね。忠清くんが会いに来てくれるんだもの、もっと元気でないとね」

答えながらも鈴さんは、仏壇の方から目を離さない。仕方なく僕もそちらをちらりと見やる。

仏壇の中には、位牌の他に一枚の写真があった。

白黒でぼやけた、年代物の写真。軍服を来た、一人の若い精悍な男性が立っている。

その隣には、黒々と長い髪を後ろで纏めた、着物姿の可愛らしい女性が寄り添う。

男性は鈴さんのかつての夫で、女性は若き日の鈴さんだ。

菌類学者だった鈴さんの夫は、大きな病気で帰らぬ人となったそうだ。以来、鈴さんはこの年になるまで再婚もせず、子どもも作らず、独り身を貫いている。

「一人になっても、会いに来てくれる人がいるのは幸せなことだね……老人ホームにも、まだ入らずにすんでるしねえ」

ほんのり寂しげな鈴さんの口ぶりが、亡き夫への想いが潰えていないことを窺わせる。

それだけの想いを抱きながら、数十年を孤独に過ごすと言うのはどんな気持ちなんだろう。僕には推し量ることすら出来ない。

身を焦がすような想いがずっと続くというのなら、僕ならきっと耐えられない。

「僕だったら毎日だって会いに来れるよ、鈴さん」

精一杯明るく声をかけてみて、ようやく鈴さんが仏壇から目を逸らしてくれた。

僕は仏壇が嫌なわけでは無い。遠く別の世界を見ている鈴さんの目を見ていると、憐憫を感じられて辛いだけだ。

「母さんも止めないしさ」

「それは嬉しいね。有り難いねえ。でもね忠清くん、若いんだからお婆ちゃんと遊ぶのだけじゃなくて、もっと若い子同士で遊ぶようにしないといけないよ。朋香ちゃん、最近見てないけど、学校では会うんでしょ？」

「そりゃ、同じクラスだからねあいつは。朋香にもクラスメイトにもしょっちゅう会ってるんだから、たまの休みぐらいは鈴さんの所に来たくなるんだよ」

僕が笑うと、鈴さんは本当に心配そうに眉を顰めた。

「そんなだと、周りに置いて行かれるよ？ 私は嬉しいけどね、忠清くんが老け込んじゃったら、私が朋香ちゃんに叱られちゃうよ」

「気にしすぎだよ。全然大丈夫だからさ」

とは言ったものの実は手遅れと言うか、クラスではジジくさい生徒として僕は有名だ。

特に朋香と、僕の親友の矢神桐春<やがみ きりはる>がしつこい。植物系男子ならぬ老人系男子、などと言われたこともある。

鈴さんだけでなく鈴さんの友人とも付き合いが長い僕は、同世代の友人と比べるとかなり達観しているように見えるらしい。

僕自身は別に気にしていない。流行を追って若者ぶることに慣れないし、追いたいとも思えない。この片田舎で流行を追いかけるのは、むしろ滑稽に思えるし。

そうこうしている内に、時間は昼の十二時に差し掛かろうとしていた。

「鈴さん、もう昼になっちゃうよ。宅老所行くでしょ？ 送っていくよ」

「ああ、もうそんな時間だね。よろしく願いましょうかねえ……」  
鈴さんが差し出した小さな手を取って、僕はそっと立ち上がった。

A市内陸は生憎いつもの曇り空。

全国で最も日照量の少ないA市は、一年を通して曇りが多い。

気温も暑すぎず、道路の照り返しもきつくない。鈴さんを連れて歩くには丁度いい日和だった

。

町の高齢者が集まる宅老所は、鈴さんの住む一軒家から十分ほど歩いた所にある。古くなった広い木造の民家を自治体が改装して、近隣の高齢者の憩いの場として提供したのだ。

週末の土曜日ともなれば、鈴さんの友人がたくさんこの宅老所に集まってきて一日を過ごす。

書道を習った後にここまで鈴さんを送ってくるのが、僕の習慣だ。鈴さんは同世代の友達に比べれば足腰がしっかりしていて、僕が送らなくても特に問題無く辿りつける。

じゃあなんでわざわざ送るんだよと訊かれれば、それはただの趣味だと言えない。

この短い時間を散歩がてら鈴さんと歩いて話すだけで、多くの興味深い話を聞かせてもらえる。町の歴史でもいいし、鈴さん自身の苦労話でもいい。記憶にはほとんど残っていない、僕の亡くなった祖母の話もいい。

僕の四倍以上生きている人だけあって、鈴さんが語る話題の多さは百貨店の品数並だ。たまに話が被るのはご愛嬌ってことで。

「忠清くんのお母さんは、それは落ち着きの無い子でねえ……」

今日の鈴さんは、僕の母親の思い出話を語ってくれた。

今まで何度か聞いた話だけど、その都度微妙に違うディテールが加わってエピソードが変化したりするので、飽きることは無い。朋香なんかは聞き流しているけれど。

「教える時間が長くなると、すぐに癩癢を起こして墨をひっくり返したものなんだよ。筆遣いは上手なのにねえ」

「へー。母さん、普段はそんなに感情的になったりしないんだけどな」

このディテールは初耳だった。母さんが中学まで鈴さんに書道を習っていたのは知っていたけど、そこまで問題児だったことは知らなかった。

「忠清くんがいい子に育ったからだねえ……」

むしろ母さんが鈴さんに、いい子に育てて貰ったんだと思う。

母親の少女時代話に花を咲かせながら、心地よく疲れた僕達は宅老所に到着した。

築年数はかなりのものだけど、立派な一軒家だ。

インターホンを押して、僕はボランティアスタッフに鈴さんを送ってきたことを伝える。

スタッフも僕の声を知っているようで、すぐにドアロックが外れた。

靴を脱ぐ鈴さんの体を支えて玄関に上がり、廊下を進む。わいわいと楽しそうな話し声が、家の奥から聞こえてきた。他のみんなはすでに来ているらしい。

鈴さんの手を引いて、リビングの中に入る。

「こんにちは！ 鈴さん連れてきましたー」

「こんにちはあ、みんな」

僕に続いて、か細い声で鈴さんが挨拶する。

テーブルを囲んで椅子に座っていた鈴さんの友人達が、一斉にこちらを見た。

ちなみにこの宅老所の特徴は、集まる高齢者が女性ばかりという点だ。いくつになっても女性は女の園を作りたがるものらしい。

みんな、年齢を考えると元気で健康な方だと思う。定期的なイベントも自分達から率先して行っているし、メンバーで簡単な畑仕事をしたり、バザーを催したりもしている。

僕も数ヶ月前には、芋掘りに付き合ったりして楽しませてもらった。年を重ねていても、それなりに遊ぶ内容は尽きないのだ。

今どきの言葉で言うと、この人達は結構な `リア充、なんだろう。

「こんにちは、忠清くん、鈴ちゃん！」

そう言って元気そうに手を振ってくるのはこの宅老所のムードメーカー、矢神えつさん、八十歳。お月様のような丸顔で、明るい山吹色のベストを羽織っている。

旦那さんが合気道の道場主で、自身も達人ということもあってか、えつさんは年齢不相応なほどに健康で元気だ。今は現役を引退して道場に立つことは無いそうだが、まだまだ若者には負けない、と言い張っている。

「こんにちは、えっちゃん」

小さく手を振り返す鈴さんを、僕は近くの椅子に座らせる。椅子が足りないようなので、僕は傍らに立っておくことにした。

「変わりないですか、えつさん？」

「なーんも。爺さんもまだまだ元気に道場やってるし、元気そのものだよ！」

えつさんは瞳をころころとよく動して、からっとした大声で笑った。

ちなみにこのえつさん、僕のクラスメイトの桐春の祖母でもある。

「忠清くん、いつまでも立ってないで座りなさいな。若いからって立ちっぱなしじゃ辛いでしょうに」

そう優しく声をかけてくれたのは、川島米子<かわしま よねこ>さん、七十九歳。

ちょっと古めかしいデザインの丸眼鏡に、今も自分一人で着付けているという浅葱色の着物が上品だ。

「いや、僕は別に立ってても大丈夫ですから……」

「ちょっと、椅子もう一つ持ってきてちょうだいな」

僕の声を遮って米子さんが声を上げる。「はい？」とキッチンの方から若い女性スタッフの返事が聞こえた。

「ああ、自分で取りに行きますから大丈夫です」

スタッフに伝わるように僕も声を上げながら、慌てて椅子を探す。

部屋の隅にパイプ椅子が重なっていたので、それを組み立てて座った。座り心地は硬いけど、これで充分だ。

「米ちゃんはよく気がつくから、スタッフさんも気を抜けないねえ」

鈴さんが愉快そうに微笑む。米子さんと鈴さんはメンバーの中でも一番の昔なじみで、学生時代からの親友なのだそうだ。

この町の名前が決まるより前から、二人は一緒にいる。

「年を取ったからって気を使えないようになるなんて、悔しいでしょうよ鈴ちゃん？」

「そうねえ……やれることは自分でしなきゃねえ」

真顔で言う米子さんと、申し訳なさそうな鈴さん。数学教師も勤めていた米子さんは昔から気丈な性格らしく、大人しい鈴さんはいつも世話を焼かれていたらしい。

「そんな肩肘張らずにさ～。任せられる部分は、ぱぱ一っと周りに任せておけばいいのよ～米子さん」

軽妙な口調でそう言い放つのは、高桑純<たかくわ じゅん>さん、八十歳。

白髪を自然に見える程度の茶色に染めていて、この中では一番若く見える。服装も蛍光色のワンピースで、流行りとはかけ離れているけど若作り。バラエティ番組などの若い文化も好きらしい。

「ねえ、忠清くん？」

「え、あはは。まあ、そうですね」

なぜか顔を傾けて科を作る純さんに、僕は苦笑を返す。

昔は恋愛の達人だったのよ、と言うのが純さんの口癖だ。今は恋愛どころか自分の娘が離婚してしまい、親権を奪われてしまった孫と会えないことを、いつも嘆いているけれど。

「そんなんじゃボケが早く進行するわよ、純ちゃん」

未だ真顔の米子さんが、怒ったかのように反論すると。

「いやいや、最近の若い子は気合いが足りないからね。道場もすぐに辞めちゃうし、うちの桐春もさっぱり出てこないし、どうなってるんだか」

えつさんの愚痴が、合いの手のように始まる。

「だけど若い子が周りには楽しいじゃないのー、忠清くんも優しいし」

「優しさに甘えすぎないで、自分の頭も使わないといけないのよ」

「そうだねえ……」

会話が盛り上がってきた。鈴さんはたまに困ったように相づちをうったり、意見を求められて無難に答えながら、にこにこ柔和に微笑んでいる。

――平和だなあ。

そう思いながら僕も眺めていると、テーブルの隅で一言も口をきかずにずっとお茶をすすっていた、黒深菜恵<くろみ なえ>さんが目に入った。

菜恵さんは八十二歳。喪服のような黒いレースの服に身を包んだ、宅老所のメンバーの中でも一風変わった人だ。

腰まで長い髪という怪しい風貌で、前髪が目にかかって表情も読みとりにくい。やたらと迷信じみた話をするけれど、悪い人では無い。若いころから祈祷師という変わった職業を営んでいて、昔からこういう人であるらしい。

その菜恵さんが、急にこちらを振り向いた。髪の毛の間から、じっと僕を睨んでいる。

突き刺すような鋭い目つきだ。

一瞬だけど、僕は気を吞まれてたじろいでしまった。



「なんでわしを見てるんだい、忠清」

口調も剣呑できつい。

「あ、いえ……菜恵さんも変わらないかなー、と」

「ふん、変わらない人間などありません。神さんはわしらがきちんと死んで、忠清がきちんと大人になってくれるのを望んでるんじゃよ」

菜恵さんは無愛想に呟いて、テーブルの上にあった饅頭を頬張り出す。

盛り上がっている米子さん達は、その言葉に気づいていない。

「菜恵ちゃんは相変わらず、不思議で面白い子だねえ……」

鈴さんだけが、変わらずにこにこしながら言うのだった。

月曜日の昼休み、一週間で最も憂鬱な雰囲気にもまれる、高校の教室。

午前中の授業時間いっぱいをかけて休みボケから目を覚ましたクラスメイト達が、食欲と会話欲を爆発させている。特に女子達が騒がしい。

僕は女の子特有の、距離感を掴めていない感じの甲高い声が苦手だ。昼食は落ち着いて、農家のみなさんに感謝しながらいただきたい。今日は菓子パンにしたけど。

窓際の席で校舎の裏にある山林を眺めながら、僕は数少ない友人達と談笑していた。

家も同じマンションの朋香と、小学校からの付き合いの桐春。僕が一人でいてもちょっかいを出してくる、暇な奴らだ。

「ってことでさ、桐春を慰めるためにもカラオケ行こうよ～忠清」

草の匂いがする外からの風に、肩まで伸びた朋香のつややかな茶髪が揺れる。健康的に程良く焼けた肌に、校則違反のネイルアート。ギリギリまで短く詰められたスカートは、クラス内でも目立つ。

北国であるA市でスカートを短くしても冷え性が悪化するだけだと思うが、これも女子高生としてのポリシーなのだそうだ。

「カラオケは苦手だから、パスするよ」

クリームパンを牛乳で流し込みながら僕は断った。

「えー、じゃあどうすんのよ。この町でカラオケ以外にまともな娯楽があるとでも思ってるの？」

カットされた林檎を頬張りながら、朋香は文句をつけてくる。ダイエット中なのでそれしか食べないと聞いている。

「……そんなこと言われてもなあ」

「いや、いって朋香ちゃん、俺は全然平気だから……ふう」

わざとらしいため息をつきながら、ご飯大盛りの弁当を忙しくほおぼる桐春。

桐春は童顔で背も低くひ弱そうな外見なのに、頭の中身は全く逆で素行も粗野という複雑なキャラクターだ。

数日前に付き合っていた隣のクラスの女子にこっぴどく振られたらしく、今日も落ち込みが激しい。激しくても食欲だけは減らない。

「失恋ぐらいで慰めてもらって発想が、僕にはよく分からないんだけど。相手の名前も知らないしさ」

「あー？ ふざけんなよ忠清、しっかり紹介しただろうが。付き合いはじめてのときによ」

「そうだっけ？ 覚えてないや」

本当は顔も名前も覚えているけど、覚えていないことにする。人の恋愛を詮索する趣味なんて無いし持ちたくない。

「失恋したときって、脳は骨を折るぐらいの痛みを感じるらしいよ忠清。甘く見ちゃ駄目なんだからね」

したり顔で朋香がのたまう。

「そ、そうなんだ……痛いのか」そんな知識をどこで手に入れてくるのだろう。

「ババアとばかりつるんでるお前には、失恋の痛みなんか分からねーだろーさ、ふん」

「ババアって言うな。せめてお婆ちゃんと言え」

本当なら名前と呼べと言いたい所だけど、自分の祖父母も含めて堂々と高齢者を厭う桐春には、言って聞かせても徒労に終わる。

「はいはい、ばーちゃんばーちゃん」

言い捨てながら、桐春は弁当に没頭する。その弁当の中の白米の上に乗った大きな梅干しも、桐春の祖母のえつさんが漬けたはずなのに。

「カラオケが駄目なら、どうしよっか？ 本当に娯楽の無い町よね……ん？」

朋香が、窓の外の裏山を眺めて。怪訝そうに、目を細めた。

「ねえー何、あれ？」

「ん……？」

僕は空を見上げた。

何気なく、朋香の視線を追う。周りの生徒達も騒ぎ始めていた。

その先に太陽とは違う、巨大な光源が――迫りくる、真っ赤な光の塊が。

見えた、と思ったその瞬間。

激しい雑音――ラジオのノイズのような、巨大な音が響いた。

同時に僕は強烈な頭痛に襲われた。

火花が脳内で爆ぜ、全身に電流が走る。

たまらず身をよじりながら、僕は何とか窓の外を見る。

あの光の塊が落下してきたのだろうか。

空襲か。ミサイルか。

戦争映画でしか見たことの無いような現実がよりによって、この片田舎のA市に降ってきたというのか。

焦熱の炎に包まれたかのように、山が――視界が、赤く輝いている。

その輝きが強さを増して、ノイズ以外の音が一切聞こえなくなり。

滑落するかの如く。

僕の意識に、緞帳が下りた。

夢の中の大海を、僕は泳いでいた。

沈んでも沈んでも底に着くこともなく、息が切れることも無い。

不思議な海だった。

蒼穹が透き通る水面を見上げながら、僕は自分を中心とした壮大なパノラマが、海中に浮かんで消えていくのを目にした。

それは見たことの無いはずの、しかし日常と分かる風景を切り取ったものだった。

緊張の面持ちでスーツを着ている僕。周りは若人だらけの、広い講堂。

白い垂れ幕が下がっている。大学の入学式らしい。

ぼんやりと顔の見えない女の子と、見覚えの無い道を歩いている僕。

相手は僕の彼女なのだろうか。お互いに視線が泳いでいて、ぎこちない。

病院のベッドに横たわっている鈴さんの傍らに立つ僕。

鈴さんは安穩とした表情で目を閉じている。

僕は寂寥を背中に帯びて、その手を強く握りしめていた。

年齢を重ねて、皺が目立つようになった僕。

仕事帰りなのか、満員電車で揺られて立ったまま居眠りしている。

やがて白髪だけになった僕が、ベッドに横たわっている。

その手を、知らない誰かが握りしめている。僕の表情は安らぎに満ちている。

寄せては返す漣の如く、あるいは泡沫の幻のごとく、それらのパノラマは浮かんで遠くに去っていく。

知らないはずのその光景を垣間見て――これが本当の世界なのだろう、と僕はなぜか確信していた。

その光景は最早、夢の中にしか無い、ということも。

沈みきった水底でパノラマの全てを彼方に見送った僕の意識は、突然に呼び起こされた。

「忠清、忠清っ！」

誰かに体を揺らされている。

涙目の朋香が、リノリウムの床に倒れていた僕の顔を覗き込んでいた。

「良かった、死んでないのね?!」

「朋香……？ 僕、気絶してたのか」

体を起こしてみても、あれほど苦しかった頭痛がまるで嘘のように引いていることに気づく。

場所は変わっていない。教室のままだ。朋香の隣には桐春もいる。

神妙そうに、桐春が口を開く。

「俺もお前も朋香ちゃんも、みんなぶっ倒れてたみたいだぞ。朋香ちゃんはすぐに起きたんだけど、お前、なかなか目を覚まさないからさ……」

言われて教室内を見回すと、何人かの生徒が頭を抱えながら、体を起こし始めている。

個人差はあるようだが、全員一度は気を失って自然に目を覚ましたらしい。

「何があったんだ……？」

尋ねてみるが、二人とも無言でかぶりを振る。

「真っ赤な光が見えて、大きな音が聞こえて……急に何も見えなくなって。覚えてるのはそれだけ」

朋香が声を震わせる。僕の見たと同じだ。

あの光はどうなったんだろう。気になって窓の外をしてみるが、何の変化も無い、静謐に満ちた裏山が広がっている。

外が虹色の闇に包まれていて実はここは未だ別世界——なんて展開になったらどうしようかと思ったけど、それは無かったようだ。

「時間は？ どれくらい経った？」

僕は教室の壁に取り付けられた時計を見た。昼休みは終わっていたが、最後に時計を見てから二十分と経っていない。

念のために携帯電話も開いて、時間を見よう——と思ったら、圏外になっていた。

「お前もか？ 俺のケータイも通じなくてさ……」

「私も。電波が変になっちゃったのかな」

二人とも、不安そうに顔を見合わせている。

家はどうなっているだろう。今日は母さんが家にいるはずだ。

そうだ、一人暮らしの鈴さんは——？

焦慮に駆られて、教室を出ていこうかと僕が悩み出してすぐに、担任が教室に入ってきた。

「みんな、無事か?!」

まだ新任の男性教諭が、汗だくになって生徒達の様子を見渡している。

クラスメイト達はすでに全員目を覚ましていて、自主的に教室に戻ってきていた。異状のある

者はいないようだ。

「い、いいか、落ち着けよお前ら！」

誰より落ち着きの無い担任の話によると、教師達や他のクラスの生徒も含めて、校内の全員が気を失っていたそうだ。

学校全体が停電状態で、電話も通じにくい状況が続いているらしい。

「そういうわけで、緊急事態ということで所在の確認が取れた生徒は、帰宅して良いということだ。出来るだけ落ち着いて、集団で帰るように、以上！」

平常時のホームルームを終わらせるかのように、話は唐突に終わった。

何が起きているのか分からないこのタイミングで、生徒を帰らせる判断はどうかと思うけれど、放っておかれても帰るつもりだったのでむしろ都合がいい。

「朋香、桐春と一緒に家まで送るよ」

「う、うん……」

狐につままれたような顔で、朋香が頷いた。

停電は学校だけではなく、町全体を襲ったようだ。交通機関が麻痺してしまったためか、道行く人々も不安に顔を引きつらせている。皆が同じ方向に物も言わず行進する光景は、まるでこの世の終わりだった。黙示録、だったっけ。

所々で火災も起こっているようで、何度か建物から立ち昇る黒煙を見かけた。停まってしまった信号に惑わされて車道も混雑している。このままでは事故が多発するのでは、という恐怖に苛まれながら僕達は帰る羽目になった。

携帯電話が通じるかどうか何度も試したけど、こちらはまだ無理だ。

不幸中の幸いか、歩きだしてすぐに電力は復活したようで、思ったほどの混乱に巻き込まれること無く僕達は朋香を送り届けることが出来た。地震のような災害では無いので、火災さえ起きていなければ家屋に問題は無い。

朋香が家族と再会出来たのを確認して一安心してから、僕と桐春も自分の家に直行した。

自宅のマンションに帰ってきた僕は、一気に階段を駆け上ってドアを乱暴に開けた。

「母さん、いる?!」

叫ぶが、返ってくるのは静寂。万が一のことを想像してしまい鼓動が速まる。

「母さん、帰ったよ！」

再度叫ぶと、バタバタと忙しい足音が響いてくる。母さんが、青白い顔でリビングから出てきた。

「忠清!? 大丈夫だったの！」

僕と母さんは互いに大きく息を吐いて、胸をなで下ろす。

「何とも無いよ。母さんも、怪我は無いんだね？」

「うん、いきなり窓の外が光って――眠ってたと思ったら、停電になってて。テレビの人も混乱してるし意味が分からないわ」

「母さんも、あの光を見たんだね？」

「ええ。何だったのかしらあれ、UFO？」

要領を得ない母さんの言葉によれば、停電やそれに伴う市民の意識混濁は、A市全体で起こっていたようだった。

僕や屋内にいた者達は頭痛が後を引いたぐらいだったが、車道では矢張り事故が頻発してしまったらしい。さほど交通量の多い時間帯では無かったことが、不幸中の幸いだった。

「お父さんの携帯電話にも、会社にも電話が通じなくて。大丈夫かしらね」

「きっと大丈夫だよ。何かあっても会社の人の方が周りにはいるだろうし」

根拠は無いけれど。心配症の母に、余計な不安要素を与えたくない。

「だといいいけど……ああ、早く電話通じないかしら」

母はその場でそわそわと歩き回る。

「母さん、鈴さんの様子は見に行った？」

「鈴さん？ いえ、まだ――そうね、あちらはお一人だし、心配ね」

「分かった、ちょっと見てくるよ。何も無かったら、すぐ戻ってくるから」

返事を待たずに、僕はマンションを飛び出した。

本音を言うと、ずっとそっちに行きたくて、僕の方がそわそわしていた。

帰るときも抑えていた体力全開の全力疾走で、僕は一分もかからずに鈴さんの家にたどり着いた。

ドアをノックしてみるが、返事が無い。鍵もかかっていない。

不吉な予感と不穏な静けさを感じながら、僕はドアを開ける。

「上がるよ、鈴さん」

靴を脱ぎ散らかして進むが、どこにも人の気配は無い。

「鈴さん、いないの？」

失礼して、鈴さんが寝室に使っている洋間を開ける。いない。台所も覗くが、いない。

矢張り居間だろうか。僕は廊下の奥まで来て、呼吸を整えた。

「鈴さん、開けるよ」

引き戸をそっと開いて入ってみるが、矢張り返事は無く、気配も無い。

ただ、窓が開いていた。青々とした竹林が見える。

「いないの……？」

もしかして宅老所の方に行ったのかもしれない。鍵もかけずに出かけるほど慌てていたのか。事故に巻き込まれていやしないだろうか。

そちらに行ってみようか、と僕が部屋を出ようとする。

さらさらと、擦れる笹の葉。

その儚げな音の合い間に、微かな吐息が聞こえた。

「――鈴さん？」

一歩、部屋に踏み出す。耳を澄まして目を凝らす。

人がいる。机の陰で、誰かが仰向けに倒れていた。

いや――寝ていた。気持ちよさそうに、両手で足を抱えて丸くなって、胎児のように。

小さな体躯、小さな顔。

鈴さん愛用の、真っ白な割烹着。鈴さんと同じ、銀色の美しい髪。

けれど、違う。鈴さんではない。

肌に皺が無い。肌に艶がある。

さらりと肩まで伸びた髪も潤っている。

女の子だ。僕と同年か、ちょっと幼いぐらいの。

「……誰だ？」

そっと近寄って、顔を覗き込んでみた。

ちょっとだらしない半開きの口から、小さく寝息が漏れている。

起きる気配は無い。

――町が大変なこの状況で、人の家で何をしているんだ、この子は。

と怒る気になれないのは、この子がどことなく鈴さんに似ているからだ。服装のせいもあるかもしれないけど、雰囲気だ。

孫と言われれば信用する所だが、鈴さんには子どもがいない。とすれば、親戚の子どもとかならうか？ そんな子見たことあったっけ。

――とりあえず、起こして聞いてみよう。

「くーくー……すー」

邪気の無い寝顔だ。肩を揺すろうと手を伸ばしたまま、その安らかな表情を崩す罪悪感に襲われる。僕は固まりかけながら、鈴さんの行方を聞くためにも心を鬼にした。

「ちょっと君。起きてくれない？」

小さな肩を掴んで、小刻みに揺らす。それだけで華奢な首ががくがくと揺れる。折れるんじゃないか、とあり得ない心配をしてしまう。

「んー……？」

しょぼしょぼと薄目を開けて、女の子が目を覚ました。

眠そうに目を擦りながら、半開きの口のまま、体を起こしてくる。

「君、誰？ どうしてここで寝てるの？」

まだ寝ぼけている女の子は、僕の顔をじっと見ている。

そして、消え入りそうなほど掠れた小さな声で。

「あら、忠清くん。おはよう」

にっこり笑った。

「……何で僕の名前を知ってるんだ？」

「何でって？ 忠清くんは忠清くんだよねえ」

女の子が、小首を傾げる。

ふわふわした口調とゆったりしたその笑顔には、まるで緊張感が無い。

「ぼ、僕は僕だけど……鈴さんに聞いたのか、その名前？ 知ってるんだろ、鈴さんのこと」

「……？ 変なこと言うねえ。私が誰に、忠清くんの名前を教えるの？」

怪訝そうな女の子に、僕は苛立ちを覚える。

「嘸み合わないなあ。誰なんだ君？ 鈴さんの親戚か？」



語調を強めると、女の子は悲しそうに縮こまった。

「どうしたの、忠清くん——何だか怖いよ？ 私、何か怒らせるようなことしちゃったかねえ」

「いいから名乗れよ。自分の名前を言え」

「私は鈴だよ」

「は？」

僕は耳を疑って、声を荒げる。

「ふ——ふざけるなよ。鈴さんはこの家のお婆ちゃんの名前だろ！」

「あらあ、忠清くんにお婆ちゃんって言われた。珍しいねえ」

またしてもにこにこ返されてしまった。僕が鈴さんを名前で呼んでいることも、この子は知っている。

知っていて鈴さんの名前を騙っているのだとしたら、許せない。鈴さんに甘やかされて調子に乗ってしまったのかもしれない。

「その顔のどこが、鈴さんだって言うんだ！」

僕は少々乱暴に、その子の腕を掴んだ。

「そ、そんなこと言われても……痛いよう、忠清くん。どうしっちゃったの？」

無視して部屋の隅まで連れていく。そこには鈴さん愛用の三面鏡がある。鈴さんが大切にしている嫁入り道具の一つで、今も現役だ。

僕は三面鏡の扉を開いて、女の子を真正面に座らせた。

「ほら、鏡を見なよ。その顔のどこが鈴さんだ？」

「顔……？」

女の子が、おそるおそる鏡を向く。

呆けた顔で、まじまじと自分の顔を見ている。まばたきもせず、半開きだった口をあぐり大きく開いて。

「??????」

大きく首を傾げた。鏡の中の女の子も首を傾げる。

言葉を忘れたかのように、口をパクパクさせる。鏡の中の女の子も口をパクパクさせる。

まるで、初めて鏡を見たみたい——いや。あり得ない物を見たような。

「そんな……？ 冗談だよねえ……」

女の子が、鏡に人差し指を向ける。鏡の中の自分と、指をつき合わせる。

手を開き、自分の手の平をまじまじと見つめて、震えながら頭を抱える。

「そんな、何で」

目を覚まそうとするかのように、首を振っている。

「どうした？」

「何で？ どうして？」

「おい、落ち着けて」

僕が肩を抑えようとする、女の子は懊悩し、困惑に引きつった顔で僕の顔を見つめてきた。

「どうして——どうして私、若くなってるの忠清くん!？」

いきなり叫ばれた。不意をつかれて僕は後退った。

「わ、若くなったあ？ 誰が？」

「わ、わ、私だよ、この顔！ 私、忠清くんぐらいの時はこんな顔だったんだもの！」

鏡に向き直り、自分の頬を引っ張る女の子。偽物の顔がくっついてるとでも思ったのだろうか、縦に横にと、綺麗な顔が広がって滑稽だ。

「君さあ、嘘でももうちょっとマシな嘘つきなよ。面白くも無いし、つつこむにも面倒だしさ」

「嘘じゃないよう……あ、ほら、あの写真！」

女の子が、仏壇の方を指差した。そこには写真がある。

若いころの鈴さんと、亡くなった旦那さん。そこに写っている鈴さんは――確かに。

確かに、女の子がほんの少しだけ年を取ったような顔をしている。親子か姉妹と言われれば誰もが信じるだろうけれども。

「信じるわけないだろ。鈴さんが若返った、なんて」

「本当なんだよ。私は、鈴だよ、忠清くん……」

涙ながらに女の子は見つめてくる。まともに見てられない。それぐらい、この子は鈴さんに似ている。

似ていて――思わないようにしていたけれど、この子は――とんでもなく可愛い。

どうしたものか悩んでいると、がたん、と玄関の方から音がした。

「鈴ちゃん、いるっ？」

若々しく芯のありそうな清冽で高い声の持ち主が、廊下を走って居間にやってきた。

「ああ、やっぱり鈴ちゃんも……！」

黒縁の眼鏡をかけた、凛とした顔立ちの女の子だった。年は僕と同じぐらいだろう。釣り上がった狐目が、ちょっと性格がきつそうな印象を受ける。

上下とも青いジャージを着ていた。

知らない女の子――なのにまたしても嫌な予感がするのは、その子もどこかで会ったような気がしたからだ。

「米ちゃん……？ 米ちゃんなのね!？」

鈴さんを自称する銀色の女の子が、頓狂に声を上げる。

「うん。起きたらこうなっちゃってたわ」

米ちゃんと呼ばれた、眼鏡の女の子が頷いた。小銭を落としちゃった、ぐらいの稚気溢れる軽さで。

「米子さん……？ 君が？」

この眼鏡の子が鈴さんの昔なじみの親友、川島米子さんだと言うのか。

「そうよ忠清くん。貴方もびっくりしてるだろうけど、私達はもっと混乱してるんだからね」

極めて米子さんらしい、冷静な口調。

「君ら二人とも、僕を騙そうとしてるんだよね……？」

「何のためにさ？ 停電騒ぎでみんな混乱しててただでさえ大変ってときに、ふざけてお婆ちゃんのフリなんてしないわよ。益体も無い」

米子さんを自称する女の子に、僕は諭される。この子は惑乱しているが、僕より落ち着いて

いる。慌ててはいない。

米子さんは、いつも慌てない。

「私も鈴ちゃんも、お互いに若いころの姿は知ってるのよ。この子は鈴ちゃん。見間違えようがないわ。髪の毛は、昔は黒かったはずだけど——絶対に鈴ちゃんよ」

自称米子さんの言葉に、自称鈴さんも無言で頷く。

それでも僕はまだ信じられない。

そこまで短慮になってたまるか——と自分に言い聞かせていたら、制服のポケットの中で携帯電話の着信音が鳴った。

通知されている相手は桐春だ。と言うことは、電波も回復しているのか。

「もしもし？」

「忠清か?! 良かった、通じた。そっちの家族は大丈夫か？」

さっきまで一緒にいた友人の声。変わらぬ日常の声。

「うん。家族は大丈夫。たださ……」

「聞いてくれ忠清。信じられないことが起きてる」

続発する嫌な予感。非日常に変わる桐春の声音。

もう勘弁してくれ。僕はげんなりしながら天に祈る。

「婆ちゃんが——うちの婆ちゃんが、女の子になってるんだ。ギャグじゃねーぞ、マジだ。しかも超可愛い」

軽妙に、衝撃の事実が告げられた。

「えっさんもか……ここだけじゃないのか」

「何だって？ なあ、どーしたらいいんだこれ？ 爺ちゃんは普通に爺ちゃんなんだぜ。何で婆ちゃんだけ女の子になるんだ？」

「婆ちゃんだけ？」

若返っているのは女性だけなのか。

——って、僕はどうして普通に、その事態を受け入れようとしているんだ。

「忠清、こっち来れないか？ 婆ちゃんもパニくっててさ。お前もよくうちの婆ちゃんとは喋ってるだろ」

「悪い、今こっちも立て込んで。鈴さんと米子さんを名乗る女の子が、今僕の目の前にいるんだ」

「は……？ 鈴さんと米子さんが何だって？」

「後でかけ直すよ」

僕は返事も待たずに電話を切る。

「忠清くん、今の電話は桐春くん？ 何かあったんだね？」

自称鈴さんが、首を傾げて僕の顔を窺う。この子は桐春の名前も知っているのか。

僕は努めて心を鎮める。

「鈴さん、先週はここで書道教えてもらったよね。そのときに、僕がどんな字を書いたか覚えてる？」

「忠清くんの、書？ ええと……『蘭亭序』だったねえ、確か。忠清くん、はねの仕方がずいぶん上手くなって。力の加減も出来るようになったよねえ」

彼女は、僕のつい先日の成長度を知っていた。習熟度も知っている。

僕を騙そうとしているにしても、そんなどうでもいい知識はいらないはずだ。

「本当に――鈴さんなんだね？」

「そうだよ、忠清くん。自分でも信じられないけど、私は鈴だよ……」

深刻そうにいじけたように背を丸めて、女の子は――。

鈴さんは、告げた。

「信じるしか、ないのかな――鈴さん、って呼んでいいんだよね」

「うん、鈴でいいよ」

こくん、とはにかみながら頷く鈴さん。

騙されていたとしてもいいや、と思える笑顔だった。

「相変わらず疑り深いわね、忠清くんは――まあ、それぐらいの方が現実的でいいわね。うちの孫の優弥ったら、テレビの人の言うことでも何でもかんでも信じちゃうんだから」

大きさの合わない黒縁眼鏡を指で抑えながら、女の子――米子さんが、くすりともせず述べる。

鈴さんがそう認めた以上、僕もこの子が米子さん本人だと信じるしかない。正直言って、証明して貰う気も失せていた。

「さて、鈴ちゃんを心配して来ちゃったけど、ここは忠清くんに任せるとして――家族が心配してるでしょうから、私も帰らなきゃね。じゃあね、鈴ちゃん忠清くん。何が起きてるのか分からないけど、また連絡するから！」

勝手に一人でずっと喋っていたかと思うと、米子さんは雄々しく手を振って去ってってしまった。独断専行、マイペースな人となりはさっぱり変わっていない。

ぽつんと残される僕と、銀色の女の子になった、鈴さん。

「えーと……鈴さん」

「はい、忠清くん？」

もの凄く調子が狂う。性格も喋り方も鈴さんそのものなのに、未だかつて体験したことの無い違和を感じる。桐春の複雑なキャラどころでは無い。

見た目と中身が全く違う、ということがこれほどまでに混乱を招くのか。

「何が起きてるか本当に分からないし、一人で置いていくのも何だか心配なんで……とりあえずうちに来ませんか」

「はい、忠清くん」

いつもの習慣だからか。いつも僕がそうしていたからか。

鈴さんは僕に向かって、おずおずと手を差し伸べてきた。

「……………」

しばし逡巡した僕は結局、その手を握って鈴さんを立ち上がらせた。

変わらない手の温もりにも、矢張り奇妙な違和を感じた。

鈴さん達と話している間に、空は濃い橙に染まっていた。

同じ色に染まったマンションの外壁を見上げながら帰宅すると、出迎えてくれた母さんが玄関先で目を丸くした。

鈴さんの様子を見に行っただけの僕が、なぜか可愛い女の子連れで戻ってきたのだからこの反応も当然だ。

「忠清、鈴さんはどうだったの？」

「母さん。信じられないかもしれないけど——この子、鈴さんなんだ」

僕の手を握ったまま僕の背に隠れていた鈴さんが、顔を出してきてちょこん、とお辞儀する。

「……こんなときに、何をバカなこと言ってるの」

真顔で、ドスの効いた声で母さんは告げた。これも当然だ。

「やっぱりみんな、こんなリアクションになるよな……鈴さん、どうしようか？」

「祥子ちゃんは昔から知ってるけど、私の若いころは知らないだろうしねえ。どう納得してもらおうかなあ？」

僕と鈴さんが耳打ちしあっていると、母さんが金切り声を上げた。

「ちょっと、その子なんで私の名前を知ってるの!？」

鈴さんの声が聞こえたらしい。さすが井戸端会議の女王、閻魔も驚く地獄耳。

「忠清、貴方が教えたのね?! こんなときに何ふざけてるの!」

「い、いや、ふざけてるわけじゃないんだよ、母さん」

温厚な母さんが、耳まで真っ赤になっている。僕が本気でからかっているとついこんでいるようだ。

鈴さんが僕の手を離して、そんな母の前に立った。

「祥子ちゃん、癩癩を起こしちゃ駄目だよ？ ほうら、何も怖いことは無いからね」

鈴さんはにこにこ笑いながら、母さんの頭にちょこんと手の平を乗せた。

我が子を慈しむように、母さんの頭を撫でる。

呆気にとられて、されるがままにしている母さん。

怒りに燃える中年女性を華奢な銀髪少女が窘める、という筆舌に尽くしがたいシュールな光景がそこにあった。

「ど、どういうつもりなの、貴方……？」

呆然とはしているが、母さんは鈴さんの手を振り払わない。多分その手の感触に、思い当たる記憶があるのだ。

「中学のときに、ちゃんと私と約束したよねえ？ 頭に来ても墨をひっくり返したりしない、難しい漢字でもじっくり何度も書けば上手になるんだから、って。欧陽詢の楷書だって、何回も何回も練習してたよね。祥子ちゃん、あれから楷書が好きになって何枚も書いてたよねえ？」

赤熱化していた母さんの顔が、みるみる青白くなっていく。

「何でそんな昔のことを……それは私以外じゃ鈴さんしか知らないはずよ。誰にも言っちゃ駄目

って二人で約束したのに」

「うん。あれ以来、祥子ちゃんが癩癩我慢出来るようになって、お母さんにも感謝されたんだよ？ お家でも大変だったみたいだもんねえ。幾つも食器割ってもんねえ」

そこまで母さんの癩癩持ちは非道だったのか。よくここまで更正したものだ。

「す……鈴さんなの、本当に？ 貴方が？」

「そうだよ祥子ちゃん。祥子ちゃんが立派なお母さんになって、私はとっても嬉しかったんだよ」

ぽんぽん、と優しく鈴さんが母さんの頭を叩いた。それは僕も苛々しているときなどによく鈴さんにされた仕草で、これだけでささくれだった気持ちがほだされるのである。

母さんは目を白黒させて狼狽している。起こっていることを感覚では理解出来ても、理性が否定しているらしい。

「今は大ざっぱになり過ぎちゃったのかねえ、祥子ちゃんは。忠清くんも、そういう派手な筆遣いは祥子ちゃんそっくりだよ」

居心地悪そうに赤面した母さんは、もう叫んだりはしなかった。

無理矢理落ちつきを取り戻した母さんと鈴さんを伴って、リビングに入る。慌てて母さんが倒したのであろう急須と零れ出た茶葉がテーブルの上でそのままになっている以外は、室内は整然としている。

父さんはまだ帰ってきていない。停電の影響で電車は停まっている。無事は確認出来ているようなので、今日は会社に泊まるのかもしれない。

ひとまず座って休もうとした所で、テレビから流れてくるニュースに僕は気を取られた。

「そうそう、ついさっきテレビが見れるようになったのよ。丁度貴方達が帰ってきたから、まだ何も見れてないけど」

母さんの言葉を聞いて、僕達はテーブルについて男性アナウンサーの声に耳を傾ける。

「……今日、A市を襲った大停電に関してのニュースです。停電の原因は未だ判明しておらず、停電直前に目撃された不可解な発光現象の正体も、未だ不明です。停電の影響から、市内の交通機関ではダイヤに大幅な乱れが生じています」

気のせいかな、アナウンサーの声が高揚している。

これほど重大な事態ニュース原稿を読み上げるのは初めてなのかもしれない。

「また、市民から多くの不確定情報が寄せられています。A市内全域で、高齢者女性の――」

そこでアナウンサーが険しい顔になった。

ふんざりがつかないと言うか、躊躇いがあるように見える。原稿を見つめて目を泳がせ、本当に報道としてこれを読んでもいいのだろうかという訝りに、言葉を飲み込みかけている。

「――高齢者女性の姿が突如市内から消え、同じ名前を名乗る十代前半から後半と見られる少女達が現れているとのこと。この件に関しては、追って調査を進めるとの各省庁からの発表が……」

食い入るようにニュースを見ていた僕達は、啞然としていた。

――今日だけで何度、常識を揺らがされるのだろう。

「私や米ちゃんだけじゃ、無いんだねえ……」

感心したかのように、鈴さんが呻く。

「桐春の家のえつさんもって言ってたから、まだいるんだらうって気はしてたけど」

まさか全員だなんて、思ってもみなかった。

「純ちゃんも奈恵ちゃんも、私みたいに若くなってるのかな？ 気になるねえ」

「宅老所のメンバーには連絡した方がいいかもね。ニュースを信じるなら、重傷者とかもいないっぽいけど……」

鈴さんと僕は神妙に目配せしあう。状況が不透明すぎて、激変しすぎて、何が起きても不思議では無い。

母さんは大きなため息を吐き、頭を抱えてテーブルに突っ伏した。

「ここに鈴さんがいなかったら、テレビの言うことなんて信じないのに……」

あまり頭が柔らかくない大人である母さんは、心労にすっかり疲弊してしまったようだ。

「大丈夫かい、祥子ちゃん？」

そんな母の頭を、また撫で始める鈴さん。駄目押しになってる気がする。

銀色の髪がさらさら風も無いのに揺れる。

僕と同じぐらいの年齢に若返ったはずなら、あの髪も若々しく、黒髪に戻っているはずではないだろうか？

銀の髪が似合っているし慣れているから、気にならなかったけれど。

朝になるまで各種メディアの報道は続き、近所でもネット上でも情報が錯綜して大混乱だった。

目に見える重傷者はほとんどいないので、皆ただ面白がるか、未知への不安に対して意味の無い憶測に怯えている。その時点で分かっていたことは、停電と若返りの現象が起きたのは僕達の住むA市に限定されている、ということだけ。人類史上類例も前例も無いので、誰も対処のしようがない。

一方鈴さんは、一夜明けても女の子のままだった。

寝ぼけ眼で「おはよう、忠清くん」と微笑む鈴さんの前に、集団催眠や集団白昼夢の可能性も否定された。

朝になってダイヤも復活し父も帰ってくるとのことなので、僕は鈴さんを連れて宅老所のメンバーの様子を見に行こうかと考えていた。

しかし事態は、もうちょっと複雑になった。

集団で高齢者女性が若返る、というあまりに異常な事態に、政府（この地方都市で聞くと滑稽な響きだ）は町を隔離する、と発表したのだ。理由は明かでは無いが、危険なウイルスが出回ったのではないか、BC兵器によるテロではないか、という憶測がなされていたという噂だ。

公正な事実の報道なんて政府に期待しじゃないけど、一夜にして人が若返る病気なんて万能の魔法より真実味が薄い。

自衛隊に町を包囲される、という最近アニメでも見なかった光景を僕は目の当たりにしてしまった。その日の内に、これまた荒唐無稽なガスマスクを被った白い無菌服の人間達がA市にやってきて、検査のためと称して『若返った高齢者女性』を次々と連れていった。まるでこの町が爆心地になったみたいな扱いだっただ。

恐怖を感じた僕は、鈴さんだけは何とか家で匿おうと思ったのだけど、「私も自分の体が変わってことぐらい、分かっているからねえ。なあと、ちょっと調べてもらってすぐ帰ってくるから」

鈴さんはそう言って笑って、自分から家を出て行ってしまった。

鈴さんの様子には緊張感や焦燥感が全く無かったので、僕も母もうっかり止めることも忘れてしまった。実際、鈴さんが取り返しのつかない病気なのだとしたら、僕達では手の施しようが無い。

僕は、忸怩たる思いで見送ることしか出来なかった。

鈴さん達が政府の研究機関とやらで検査を受けている間、ネット上ではこの現象に対する憶測がさらに広がり続けていた。

皮肉なことに、若返った身近な高齢者に出会って初めて、高齢者が同じ社会に属していることを意識した者が少なくないようだった。

世間を見る目が変わってしまった、という者もいる。



日頃鈴さんや宅老所のメンバーと触れ合っていた僕には、それは腹立たしい言われようでもあったけれど。

その内にネットの住人達は、若返った高齢者女性達に、呼び名を与えた。

その名も、『楼女<ろーじょ>』。

ネットスラング、という奴らしい。『楼』という字は遠くを見渡せるように高く作られた建物に使われる言葉で、その他旅館や料亭など、別の意味で高い場所にも使われる。

『老』という言葉はマイナスイメージだと考えた者達が、若返った高齢者達を差別化する意味で生み出したとかで、確かに崇高な感じはするけど、ただネタ扱いしたいだけでも思える。

――と言うか、ただの当て字だし。

若くて可愛いお婆ちゃんを特別扱いしたい、と、それだけのことなんだろう。

そう思いながらも、僕も『楼女』という字面を気に入ってしまったのだけれど。

それから何週間か経って、『楼女』という言葉がネット以外でも浸透してしまったころに、鈴さん達は帰ってきた。

検査の結果、『楼女』達の体にはウイルスや病原体は一切確認出来なかったそうだ。様々な検証の結果、感染爆発などの危険も無いと判断された。

定期的な検査の義務化と、念のためにA市からは出ないことを条件として、『楼女』達は我が家に帰ることを許された。どうやら、大勢の『楼女』達を保護したまま検査を続けるだけの財力はない、とこの国の政府は判断したようだ。大災害というわけでも無いし、募金も集めようが無い。

緩いと言うかなんと言うか、危機感の少なさが、いかにも平和なこの国らしい。

結局一部の身よりの無い『楼女』達が国への協力という形で研究機関に残っただけで、ほとんどの者が帰ってきた。

『楼女』達は基本的に健康そのもので、痴呆が始まっていた者達ですら、その症状が改善されていた。

ただし、それぞれ個人差はあるが――『楼女』達の体には、『老化の名残』があった。

例えば鈴さんの銀髪がそれだ。聴力や脚力が実際の十代の少女に比べて著しく低い、という者達もいた。

こちらも原因は不明だが、ややこしいことに、楼女達は完全に若返っているわけでは無いということらしい。

それでも介護や看病の必要がある者は少ないので、ほとんどの家族はこの事態を歓迎していたようだった。

そうやってあっさりと戻ってきた鈴さんは、

「ただいま、忠清くん」

と、疲れた様子も見せずにマンションまで挨拶に訪れた。

「お帰り鈴さん」

僕も以前と変わらない言葉を返して、そのまま鈴さんを家まで送った。

それ以外は何も変わっていない。

それ以外は何も分からない。

分からないまま、日常はズれた形で再開された。

鈴さんが戻ってきてから、最初の土曜日が訪れた。

若返った所で、鈴さんは家に一人きりだ。なまじ動ける分どう過ごしているんだろうかと気になって、僕は以前よりも鈴さんの元へ足を運ぶようになってしまった。

今日は久しぶりに書道を教えてもらえるということで、僕も楽しみにたっぷり時間を取っていた。

……だと言うのに。余計なオプションが二人ほどついてきた。

朋香と桐春だ。

二人はまだ、若返った鈴さんと顔を合わせていない。

朋香はまだしも、桐春の方は以前の鈴さんともほとんど話したことが無いくせに、軽薄な好奇心でわざわざ出向いてきた。

面白くは無かったが、一応鈴さんに確認したら「いつでも連れておいてね」と言われたので、ご好意に甘えさせてやった。僕もなかなか甘い。

春もほぼ終わり、町は曇天に包まれて肌寒い。朋香が午前中は学校でバドミントン部の朝練があると言うので、集まる時間は午後になってしまった。

湿った空気が張りついてきて気持ちのいい気候では無いが、慣れてしまえばどうってことはない。三人で鈴さんの家へと向かっていると、桐春が軽口を叩いた。

「うちの婆ちゃんも、思いも寄らないほど可愛かったからさ。鈴さんって人とどっちが可愛いかなーってよ」

「そういう言い方はよせよ……」

さすがに不愉快すぎる。まあ、僕も今のえつさんには会ってみたいけど。

「そうよ、そういう言い方は無いでしょ、桐春！ 鈴さんは私や忠清にとって、大切な、家族も同然のお婆ちゃんなんだから」

朋香が睨んで、桐春を窘める。

「いいこと言うじゃないか、朋香。桐春、余計なことを鈴さんの前で言わないでくれよ」

「へーへー」

おどけて背中を丸める桐春。大人しくしておけば少女と見紛うほどに可愛い顔をしているのに、全く勿体ない奴だ。

「でも、私も『楼女』になった知り合いと会うの、実は初めてなんだよね。ちょっと楽しみだな〜」

「……どっちもどっちじゃないか」

高ぶった声を出す朋香に呆れ果てた所で、鈴さん家の前にたどり着いてしまった。

僕は急遽、自分の表情に宿るマイナス要素を追い出して、玄関のドアをノックする。

「鈴さーん、忠清で一す」

大きな声で呼びかけると、程なくして中から、

「はあい、今開けるねえ」

遠い返事が帰ってきた。

朋香が目を丸くして、僕の服の袖を引っ張ってくる。

「うっそ、今の鈴さんの声？ 全然違うじゃん?!」

「そりゃ、喉だって声だって老化するからな……朋香の知ってる鈴さんの声とはちょっと違うよ」

「そうなんだ！ わくわくするねー」

「美人なのかね〜」

イヤらしい顔でにやにやしている桐春。一人で出直したくなってきた。

鈴さんは見せ物じゃないぞと叱りつけてやろうか。けれど叫んだらまた鈴さんが怯えるだろうし——という僕の迷いなど気にもかけずに、ドアは迷うこと無く開いた。

「いらっしやい、みんな」

開いたドアの向こうで、笑みをこぼしている鈴さん。

髪は変わらず光に透ける銀色で、服もいつもの割烹着。母親の料理の手伝いをする、昭和の女の子って感じだ。かつては曲がり始めていた背中も、ぴんと伸びている。

「朋香ちゃん、久しぶりねえ。そちらはええと、えっちゃんのお孫さんの、忠清くん、だったかしらねえ？」

か細い声で頭を傾け、優しく笑いかけてくる鈴さんに対して、朋香と桐春は呆然——とうか、見取れて陶然としていた。

「か……かわいいー！ 鈴さん、超かわいいじゃん！ 髪、染めてないのに綺麗な銀色とか何?! 羨ましいし！ 二重瞼とか気づかなかったよ！ まつ毛ながーい！ 顔ちっちゃーい！

」

「マジだ！ 正当派美少女じゃねーか！ うちの婆ちゃんも可愛いロリババアだったけど、こっちも今でも通用するぜ！ この儂げな感じ、俺の周りの一部の男子には特に受けるぞー！」

「うるせえバカども!!」

僕は平手で二人の頭をはたいた。さすがにここはキレさせていただいた。

なのに二人はお構いなしで、互いの顔を見合わせる。

「アリだよね」

「アリだな」

無礼極まり無い。鈴さんも、笑顔が硬直してしまっているじゃないか。

「ごめんね鈴さん、こんな奴ら連れて来ちゃって」

僕が深々頭を下げると、さらに鈴さんが当惑してしまった。

「う、うん……ええと、私、誉めてもらっちゃったのかな、忠清くん？ 朋香ちゃんが言うてること、私にはよく分からないんだけど……」

「それは——うーん」

怪訝に見ると二人は、「その通り」とでも言うかのように何度も頷きながら、僕と鈴さんの顔を交互に見ていた。調子に乗らせたくないけど、否定するのも面倒くさい。

「……そうみたい。鈴さんが可愛いつてさ、二人とも」

「そうなの？ 恥ずかしいなあ。可愛いなんて、そんなことないよう？」

もじもじと指をいじりながら、鈴さんは赤くなった顔で、伏し目がちに呻いた。

——同類だとは思われたくない。

——無いけど、その姿で仕草は反則です鈴さん。決定打です。

硬直してしまった僕は、朋香と桐春が背後でひそひそと相談していることに気づけなかった。

「忠清っ!! 鈴さんっ！」

朋香が、これまでにない大声を出した。

僕も鈴さんもビクッと振り返る。

「書道なんてやってる場合じゃないわ！」

なぜか拳を握りしめて、真顔で叫ぶ朋香。力が入りすぎて眉間に皺がよっている。その横で桐春も、力強く頷いた。どちらにもついていけない。

「はあ……？」

「私、何か変なこと言ったかねえ……？」

僕と鈴さんは顔を見合わせて、首を傾げる。

「若い奴らには、若い奴らの楽しみ方ってもんがあるんだよ！ 今の鈴さんはもう婆ちゃんじゃねえ。可愛い『楼女』なんだ！」

「その通りよ！ 世界は正しく可愛くあるべきよ！」

どこから湧いて出たのかこの論客達は。叱りつけるどころか蹂躪されそうな勢いだ。

「何を熱くなってるんだ、二人とも……？」

「さあ、町へ向かうわよっ！」

「っしゃあ！」

聞いてないし、問答無用だった。この後僕と鈴さんは、理由も分からないまま朋香達に引きずられて、拉致されてしまった。

「お国から迎えに来た人もここまで強引じゃなかったねえ」と後に鈴さんは語っている。

相当怖かったらしい。僕も怖かった。

大きなデパートが軒並み潰れ始めて廃れる一方のA駅前の商店街に、僕と鈴さんは連れてこられた。

そこそこ潤っているショッピングモールもA市内にはあるけれど、駅前から出発するバスに二十分は揺られなければたどり着けないので今日は保留。

洒落にならないほどシャッターが下りている店が多いが、これでもA駅周辺の商店街の規模は県内最大級である。泣けてくるがこれが過疎化の現実だ。

朋香達は、僕もよく利用するファッションセンターの前で足を止めた。

この店は衣料品チェーン店としてはかなり大きくかつ安いので、貧乏高校生である僕は重宝していた。全身のコーディネートをここで揃えることも多いけど意外とバレない。

僕が服装に無頓着だから、と言うのもある。

「ああ、ここは入ったことが無いねえ……」

鈴さんは僕の後ろで、不思議そうに店舗を見上げていた。

朋香は、いつもの習慣にならって僕の手をしっかりと握る鈴さんの横顔を眺めながら、不愉快そうに僕に耳打ちしてくる。

「……忠清さあ、鈴さんだってもう若いんだし、手を握って歩くのはどうなの？」

『もう大人なんだし』という言い回しはよく聞くけど、『もう若いんだし』は初耳だ。

「別にいいだろ、若くたって中身は鈴さんだし。どこかに送るときはいつも、僕がこーして手を引いてたんだから」

「ふーん……まあ、鈴さんだからいいんだけどね」

「何がいいの？」

「……何でも無い」

理不尽に機嫌を損ねかけた朋香を怪訝に思っていると、桐春が背中をつついてきた。

「おい、ぼそぼそ喋ってないで入るぞ。ある程度はおごってやる覚悟で来たんだからよー」

「何を？」

何だか疑問形だらけの僕である。翻弄されている。

「決まってるだろ。鈴さんを可愛くコーディネートしてやるんだよ。外見年齢、相応にな」

「ああ……そういうことだったのか」

目には目にを、歯には歯を。若返った『楼女』には若い服装を、ということか。

僕には無かった発想だけど、それじゃまるで鈴さんが着せかえ人形じゃないか。

抗議しようかと思ったが。

「何だか楽しそうだねえ」

鈴さんがはにかんだので、僕は流されることにした。

店に入ってから、鈴さんの手を引く係は僕から朋香にバトンタッチされた。

朋香は適当にそこらのハンガーや服を手にとって「これも！」「それも！」と僕や桐春に預けてくる。

「いっぱいあってさっぱり分からないねえ」

と言われるがまま、されるがままの鈴さん。

レディースのコーナーなんて、考えてみたら幼稚園に通っていたときに、母さんに付き合わされて以来だ。人目が気になることこの上無いが、周りからは微笑ましいおばちゃん達の笑顔ぐらいいしか感じない。女友達の買い物に付き合わされた男ども、ぐらいいしか見えていないようだった。

大量の服を運び込み、広めの試着室を占領して、鈴さんのドレスアップショーが開催された。いやただの早着替えだけだ。

鈴さんが洋服に慣れていないこともあって、朋香と一緒に中に入って手伝っているらしい。

「まずはこれにしようかー」

「朋香ちゃんに任せるよ」

会話が漏れ聞こえてくる。まさかこの二人の年齢差が、六十歳以上もあるとは誰も思わないだろう。

僕と桐春が、缶コーヒ一片手にしばらく待っていると。

「じゃーん！」

店内に響き渡るほどでかい朋香のコールで、カーテンが開いた。

瞬間、缶コーヒーを吹き出しかけた。

「何だか足がスースーするねえ……」

苦笑を浮かべて現れた鈴さんは、ピンクのキャミソールと膝上ギリギリのミニスカート姿だった。

肩も胸元も腕も足も、全て大胆に露出している。柔そうな薄桃色の肌が丸見えだ。

「ふむう、これは」

桐春はなぜか横山光輝の描く軍師のような顔で、鈴さんの足を凝視している。何でそんなに真剣な顔なんだ。孔明の罷か。

「と、朋香！ いきなりこれは刺激が強すぎるだろ！」

鈴さんの体に視線を向けないようにしながら、僕は訴える。

「えー、セクシーでいいじゃん。ねえ鈴さん？」

「そ、そうなのかい？ 腕が冷たいけどねえ」

鈴さんは肌寒そうに自分の体を抱きしめ、前かがみになり、足を擦りあわせる。

意に反して目はちらちら見てしまうこの背徳感。胸が痛い。

そして悟ったような顔で凝視する桐春。もう駄目だこいつ。

「やっぱり駄目、却下！ 鈴さんが体冷やしたらどうするんだよ！」

「若くなったんだから、血行だって良くなってるでしょー。まあいっか、まだまだあるし。次の合わせてみよ鈴さん」

「はい、朋香ちゃん」

従順な鈴さんの手を引いて、朋香は再びカーテンを閉める。

こんな調子で着替えが続くのか……。

「ふっ、楽しみにになって来やがったぜー」

見たことも無いニヒルな顔で笑う桐春である。

「はい、次ー！」

再度のカーテンコール。

幼児の如くよちよち歩き辛そうに出てくる鈴さんに、僕は絶句する。

「今度のはごつごつしてるねえ……」

ウェスタン・シャツ、ウェスタン・ブーツ、ウェスタン・ジャケット、デニムのスカート。極めつけはカウボーイハット。

文句のつけようが無い、ウェスタンスタイルだった。

「野性の魅力がコンセプトよ。鈴さん色白だから、ギャップを狙ってみました！」

「いや、ギャップとか狙わなくていいから……」

上半身はまだしも、太腿は矢張り露出している。

ハットからはみ出す触角のような銀髪は、確かに新鮮ではあるけれど――さて、鈴さん自身の感想はどうだろう。

「この格好で、書道は出来るのかねえ？」

もの凄く木訥な感想が出た。確かに、デニムスカートは正座に向かない。

「ウェスタンか……これもまた悪くない」

矢張り凝視している桐春は、まばたき一つしない。

「お前、ひょっとして露出度優先だろ？」

「そんなことは無いぜ」

星が飛び出しそうなウインクをされた。

――ひょっとしてこいつ、リビドーを隠せば隠すほど爽やかになるのか。

長年付き合っただけで初めて知る友の性質。一切知りたくなかった。

「悪くは無いが、鈴さんはまだまだポテンシャルを秘めているぞ忠清」

「何がポテンシャルだバカ」

「うふふ、二人とも私のコーディネート術に魅せられてるよーね！」

したり顔の朋香の横で、ぼんやりと立つ鈴さん。遊ばれていることに気づいていない。

僕のツッコミも追いつかぬまま、鈴さんのドレスアップは三着目に突入した。

「さて、こちらはいかがでしょうかー？」

「店員かよお前は」

僕がぼやこうと声をかけた、そこには。

自然な、どこにでもいそうな――実際には、いるはずの無い女の子がいた。

ゆったりめの白い服は、チュニックワンピースと言うらしい。裾がフリルで出来ていてちょっと少女趣味な気はしたけど、銀色の髪と合わせられると違和感が無い。

「おお……」

僕も桐春も見取れつつ、納得と感嘆のため息を吐いた。

「……どうかねえ？」

頬を紅潮させながら、鈴さんが上目遣いに訊いてくる。

「足が冷えるの苦手だって言うから、レギンスも履いてもらったわ。ちょっと地味な気がするけど」

「いや……いいんじゃないか？ 無駄な露出も無いし――似合ってると思う」

「本当かい？ ……良かった」

僕が誉めると、鈴さんは嬉しそうにいつもの笑顔になった。気に入ってるらしい。

「うむ……セクシーさには欠けるが、これはこれでそそる。アリだな」

深く頷く桐春。暴力は嫌いだが、そろそろ制裁の意味でぶん殴るべきだろうか。

そもそもこいつは来た意味あるのか？

「朋香ちゃん、私もこの格好は動きやすくていいねえ」

「そう？ じゃ、これ買っていきましょ！ なんだかんだでカジュアルにソフトな感じが、鈴さんには似合うね！」

「分かってるなら、最初からそうしてくれ」

呆れた態度をとってはみたが、朋香には感謝していた。ファッションで鈴さんを喜ばせるのは僕には到底無理だ。



鈴さんにとっても、同年代の女の子の友人が出来るのは良いことだろう――って、同年代じゃなかった。

「あ……そうだ。一つ、試してみたいことがあったんだ！」

試着室から出かけていた朋香は、再び鈴さんを引っ張ってカーテンを閉めた。

まだ他にコーディネート案があるのだろうか？

もう十分な気がするけど、仕方がないので待ってみることにした。

数分後。

「ご、ごめん忠清。やりすぎた……」

なぜか朋香が謝罪しながら、カーテンを開けてきた。

申し訳なさそうな朋香の横にいる鈴さんを見て、僕も桐春も愕然とした。

鈴さんは、セーラー服を着ていた。短いスカートに、極めつけはニーソックス。

似合ってはいる。似合いすぎている。故にマニアックすぎる。

あまりにも無垢な、銀色の女子高生。

「何で私、これを着てるのかねえ……………」

さすがの鈴さんも、自分が纏っている物が私服として着るものでは無いことぐらい分かる。

「何でセーラー服があるんだよ！　つつか何でセーラー服なんだよ！」

僕は狼狽えて、朋香を責め立てる。

「あ、あはは……午前中部活に行くときに着ていって、そのままカバンに入れっぱなしだったから、つい」

朋香の笑い声は、気まずそうに濁っていた。

「写真一枚お願いします」

ごく自然に写メを取ろうとする桐春である。

鈴さんが呑気にピースをしかけたので、僕はケータイごと奪い取った。

朋香に命じて鈴さんを着替えさせながら、僕は真剣に思案する。

セーラー服は――学生服は、それを着た人間の若さを試す記号でもある。

故にセーラー服は誤魔化しが効かない。

髪の色に違和感はあるけど、鈴さんが僕達と同じ若さを持っていることを僕ははっきりと理解した。なりきっている女子高生などとは違って、鈴さんは本当に若い。

老女ではなく少女でも無く、鈴さんはうら若き『楼女』なのだ――。

とか言ってみたがやっぱり真面目に語れば語るほどアホらしくなった。

ぎらぎらと焦げつきそうな日射し。いやらしい梅雨が開けて、町はすっかり初夏の様相だ。行き会う近隣の住民も、じんわり滲む汗に耐えている。せめて湿度が低ければ過ごしやすいのだけど、今日も空気は過度に湿っている。

気候が変われど世間の『楼女』達への好奇の眼差しは消えるわけでもなく、ネット上では未だ根も葉もない噂や憶測が飛び交っていた。

噂の一つによると、『楼女』達のみによって結成されたガールズバンドがいるのだとか。近々デビュー曲を動画配信するそうなので、そのときはチェックしてみようと思う。

鈴さんは朋香が選んでくれたカジュアルファッションが気に入ったようで、似たような服装で過ごすことが多くなっていった。若々しい姿の鈴さんもいいんだけど、割烹着姿の鈴さんに慣れていた僕は今一つ、どういう気持ちで見ていいのか分からない。悪くはないんだけど。

そんな日々が続いたある日、僕は鈴さんの相談を受けて、宅老所のメンバーの様子を見に行くことになった。

あの『光が落ちてきた日』以来、僕は鈴さんと米子さん以外の宅老所メンバーと会っていない。若返って体調も周囲の反応も一変してしまったせいで、皆宅老所に集まる時間を取れないようなのだ。

音沙汰無しと言うのも心配になるし、鈴さんもみんながどう過ごしているか気になるようだ。

と言うわけで今週の土曜午後は、桐春の祖母——えつさんに会いに行くことになった。

鈴さんは、この前朋香にプレゼントされたチュニックワンピースを着ていた。

「鈴さん、ほんとにその服好きみたいだね」

僕に手を引かれることすら忘れて、鈴さんは自分の着ている服を見つめながら遊歩道を歩く。ずいぶん機嫌がいい。足下がおぼつかなくて危なっかしい。

「一緒に買ったものだからねえ」

こちらを見ずに、ぼそりと鈴さんが述べる。

「僕が選んだわけじゃないけど……」

「忠清くん、気に入ってくれてたでしょ？ えっちゃん達、びっくりするかなあ……」

なるほど鈴さんは、新しく若いファッションに身を包んだ自分を宅老所の仲間に見てもらいたいんだろう。口には出さないけど自慢したいのだ。

女の子だな、と僕は思いながら歩いた。

えつさんの家は、合気道の道場を営んでいる。

と言っても直接生徒に教えているのは桐春の祖父とその門下生である師範代で、桐春の父は普通の会社員として働いているらしい。今どき格闘家じゃ将来が不安だという、桐春の父の現実的判断を僕は責められない。

えつさん自身はかつては夫である桐春の祖父と一緒に合気道を教えていたが、腰を痛めて引退してからは内助の功として道場を支えてきていた。

えつさん夫婦は、町でも有名なおしどり夫婦なのだ。

けれども門下生の減少（と言うかA市の人口の減少）は止めようが無く、矢神流道場はこの代で潰れるのでは無いか――と、言われていた、はずなのだが。

僕と鈴さんが道場の前に差し掛かったとき、中から聞こえてきたのは。

「ほら、次――！！」

雄々しい女の子の、気合いの叫び声だった。

「まさか……今のって？」

僕が鈴さんの顔を伺うと、鈴さんは苦笑いを浮かべて、

「多分ねえ」

と呻く。

怯みつつも、僕は鈴さんと一緒に道場の中に足を踏み入れる。前もって電話したとき、えつさんには「道場の方に来て」と言われている。

充満する、据えた汗の匂い。

敷き詰められた畳の上に並ぶ、道着を着た中学から高校ぐらいの少年達。

野獣の群れと形容するのがふさわしい、悶々とした表情の少年達の円陣の真ん中に、鈴さんより小柄で一見小学生にも見間違いそうな、道着姿の女の子が立っていた。

「そら、どしたお前ら――！！」

おかつぱに近いショートカットが、気合いで炎のように猛り、逆立つ。

「わ。えっちゃんだ」

緊張感の無い声で、鈴さんが囁く。あの小さな。小さすぎる子が、えつさんか。

「い、行きまーす！」

えつさんとは対照的な覇気の無い叫び声を上げて、一人の少年が向かっていく。

延ばしたその手がえつさんの体に届くその刹那、すでに少年は宙を舞い、次の瞬間にはべたんと畳に尻餅をついていた。

放心した少年は、自分に何が起きたのか分かっていない。

「あはは、どうだ！ まだまだお前らガキに負ける程衰えてはいないだろー！ どんどん来い！

叩き伏せてやるねじ伏せてやるぶん投げてやる！」

外見とミスマッチな、強烈な啖呵を吐くえつさん。

挑発を聞いた少年達が、我先にとえつさんに掴みかかっていく。

傍目から見れば、小学生女子によってたかって襲いかかって返り討ちにあい悔しがる変態少年達である。見る人が見れば噴飯物だ。

それら全ての相手を最小限の動作でいなしながら、次々と床に沈めていくえつさん。

神業だった。

気づいたときには、えつさんの周りには立っている者は誰もいなかった。

僕と鈴さんは、慄然とその光景を見ているしかない。

しじまに満ちた道場の中心で、えつさんはたった一滴、流れてきた汗を袖で拭って。

「鈴ちゃん、忠清、よーく来たねー！」

元気いっぱい、太陽のような笑顔で叫んだ。

起きあがった少年達に受け身の練習を命じて、えつさんは道場の縁側に腰掛けて談笑を始めた

。僕達も差し出された座布団に座って、えつさんを近くに見る。

桐春がロリババアなどと形容するのも少しだけ分かる気がした。肌もつやつや、目も大きくて、美少女と言うのは語弊があるけど、てかりのある焼き林檎のように全身から愛嬌が溢れんばかりだ。

付け加えるのが躊躇われるけど、極度の貧乳だった。

鈴さんと並べられると、僕が最年長の保護者に見える。

「えっちゃん、強いんだねえ。えっちゃんと会ったのは宅老所が初めてだったけど、あんなにかっこいいんだねえ」

出されたお茶をすすりながら、鈴さんは微笑む。

「あっはっは。いやあ、まさかまた全力で暴れられるなんて思ってもいなかったよ！」

からからと気持ちよく笑うえつさん。

「えつさんて、昔もこんなに強かったんですか？」

僕が訊くと、えつさんは「いや」と首を振った。

「若いころはそりゃ、若いころなりの元気と強さはあったけどね。腰悪くして道場に立てなくなるまでは、あたしも練習は欠かさなかったからさ！ 頭ん中に、技も身のこなし方も、全部入ってるんだよ」

「へえ。忘れないもんなんですね。その上、体も若いんですから強いわけだ」

「全盛期以上だよ！ 生徒が増えすぎて、ちょっと呆れてるけどね」

えつさんは嘲るように、はん、と練習中の少年達を笑う。

鈴さんが不思議そうに小首を傾げる。

「どうして呆れるの？ たくさんお弟子さんがいたら、えっちゃんも、旦那様も助かるし嬉しいよねえ？」

「いや。あいつら、あたしが若返った途端に入ってきた入門生達なんだよ。見たろ、あのへっぴり腰。この体で毎日道場に出るようになったら、桐春があたしのことを周りのバカどもに触れ回ったみたいでさ」

「あー……そういえば、学校でもえつさんの話してたし——うちのロリ婆ちゃん超可愛くて鬼のように強い、とか」

よく覚えている。クラスメイト達も『楼女』への関心が強かったし、それこそマンガに出てくるような強さの可愛い女の子、とあれば興味も引かれるだろう。

「ろりってなあに、忠清くん？」

「す、鈴さんは知らなくていいことです！」

無邪気に訊かれて焦る僕。危うい。広いこの世の中、知らなくていい知識もある。

「それでね、道場見学に来る奴が増えちゃってね。そんなにあたしを可愛いと思うなら、入門して来い、ぶっ倒してやるから、って言ったんだよ」

「そんなこと言われて、わざわざ入門する奴なんているんですか？」

「その変わりあたしに勝ったら、何をしてもいいよって言っといた。尻でも胸でもどーにでも

しなって」

素っ気なく言われて、僕も鈴さんも硬直した。

「そ、それは……まずいですよさすがに！」

「う、うん……えっちゃん……それは駄目だよ」

鈴さんは顔を真っ赤にして俯く。僕の何倍も人生経験があっても、この手の話題には弱いらしい。

「あたしは胸も尻も、自分で泣きたくなるくらいぺったんこから、どうでもいいんだけどさ。そしたら、この始末だよ」

えつさんは練習中の少年達を指差す。彼らは汗だくになって、ひたすら受け身を続けていた。

「まさか……全員そうなんですか？ みんなえつさん目当て？」

その行動力、他に使い道が無いのか。

「普通に入ってくれた弟子もいるはずなんだけどね～。体は若くなくても、忘れっぽいのは相変わらずでねー。新しい子の名前がさっぱり頭に入ってこないんだよ。ま、勝手に目当てにでも何でもすればいいよ」

「で、でもえっちゃん、やっぱり駄目だよ。旦那さんだっているでしょうに……」

赤面したまま、真顔で窘める鈴さん。

「そう、じーさんも知ってるよ。だからじーさんも張り切っちゃって。前までは寝込み気味だったのに、全員性根から鍛えてやるってさ。アハハ。今日も午前中までは道場に来てたんだけどね。あんまり頑張るから帰らせちゃったよ。あっちは体も年だからね」

肩を揺らしてえつさんは笑う。愉快そうだ。嬉しそうだ。

『楼女』を受け入れて。

「充実してるんですね」

頷くえつさんを見て、僕まで嬉しくなりかけた。

だが隣の鈴さんは、笑顔ではあるが寂しそうに目を細めていた。

「まだまだ、えっちゃんところは仲良しなんだねえ」

掠れた声が切なげだが、鈴さんの哀切の表情にえつさんは気づかない。

「もーちろん。長年夫婦二人で、この道場を守ってきたんだからね！ なのに桐春の奴は、あんなに軟弱に育ちまって。昔は真面目に道場に来てたのに高校入ってからはさっぱりだよ。情けない。女のケツばかり追いかけててさあ……」

語気も鼻息も荒くして、えつさんは逸るように愚痴る。

「桐春は、相変わらずみたいですね。また新しい彼女が出来たみたいだし。僕も昨日知ったばかりですけど」

それも朋香から又聞きだ。相手の顔も知らない。

誰と付き合おうと知ったことではないけれど、中学のころから彼女が出来ればすぐに僕に自慢してきた桐春が、何も言わないままなのが引っかかっていた。

「彼女？ そういえばまだ何も言ってこないけど、そうだったの。全く、出来たなら出来たですぐ紹介しろっての。前はすぐに家に連れてきたのに！」

「へえ。えっちゃんにも言わないなんて、桐春くん、よっぽど大切にしたい相手が出来たのかも

しれないねえ。あの子は純粹みたいだから、相手を好きになるほど慎重なのかもしれないよ？」

「そんなにいいもんかねー、あのエロガキが。アハハハ」

おばさんっぼく手を叩きながら、言外に楽しそうなえつさん。

こうして話していると、桐春の童顔に不釣り合いな気の強さは、しっかりえつさんから受け継がれたものだと感じる。桐春は間違いなくえつさん似だ。

夫と長年連れ添って、子どももいて、情けないだろうけど孫もいて。それはとても、幸福な人生に違いない。

そんなえつさんの話を寂しげに、けれどしとやかに、鈴さんは聞いていた。

翌日の日曜。休日を潰し、僕はまた鈴さんに付き合っただけで宅老所のメンバーの一人の家に赴くことになった。

今日会うことになっているのは、米子さん。

彼女とは、異変が起きたあの日に一度顔を合わせている。あの日の米子さんは、眼鏡をかけた知的な美人だった。鈴さんと連絡は取り合っているようだが、ほとんど会ってはいないらしい。

僕と鈴さんは大きな神社の敷地内にある、鎮守の森の中を歩く。米子さんの家はこの神社の裏手にあり、森を通ればすぐだ。鈴さんの家からも近い。

日射しは変わらず強い。曇りと霧で有名なA市にしては珍しい日和が続いている。木々に留まる虫達も騒がしくなってきた。

A市は田舎だけあって蝉がでかいし、激しく鳴く。自分の一生の中で輝ける時期を知っていて、魂を絞り尽くして空を舞う。

だらだら生きてきた僕には、その潔さは羨ましくもある。

道中、鈴さんは先日の寂しげな表情は一切見せてこなかった。服装は昨日と同じだ。

神社の敷地を出て日陰を辿るようにしながら、僕達は米子さんの家に着いた。

大きな洋風の一軒家だ。米子さんは数年前に旦那さんを亡くして、息子夫婦と同居している。

チャイムを鳴らすと、ドアを開けて出迎えてくれたのは、小学生低学年ぐらいの男の子だった

。

「わー、鈴お婆ちゃんも美人になってる！」

「あら、ありがとう優弥くん」

鈴さんが、優しく男の子の頭を撫でる。男の子は子犬のように鈴さんに抱きついて、甘え出した。

「あらあら？」

鈴さんは、穏やかな顔で抱きしめ返している。

優弥というこの男の子は、米子さんのひ孫だ。米子さんが息子さんを授かったのが遅かったこともあって、お孫さんも幼い。それもあって米子さんは、優弥を溺愛している。

鈴さんも僕も何度か顔を会わせていて、鈴さんには特に懐いているようだ。

「お婆ちゃんは元気か、優弥？」

「うん、おばあちゃんすっごい美人な女の人になったよ！」

優弥は鈴さんの胸に顔をうずめたまま叫ぶ。エロガキめ。と言うか米子さんの外見なんてこちらは訊いてないし、そもそも知ってる。

「米ちゃんに会いたいんだけど、お部屋にいるかねえ？」

鈴さんが撫でながら訊く。

「うん！ 鈴お婆ちゃんが来たら、部屋に入ってもらってって言ってた！」

「そう、じゃあ上がらせてもらうね」

「僕も遊びに行っていく？」

調子に乗る優弥の襟首を掴んだ僕は、鈴さんから引っぺがしてやった。強い抗議の眼差しが向けられるが気にしない。気にしてやらない。

「こら優弥、鈴さんと米子さんにゆっくりお話させてあげろ」

「ちえ、忠清兄ちゃんだっ一緒に行くんだろ？ 爺ちゃんみたいな名前だからって、ずるいよ」

生意気に口をとがらせる優弥。人の気にしてることをはっきり言いやがった。

「そう、兄ちゃんは爺ちゃんだからいいんだ。だから宿題かゲームでもやってな。後でマンガ貸してやるから」

まだ文句を言う優弥を押し退けて僕は家の中へと進む。我ながら大人げないかも。思うけど気にしない。気にしてやらない。

さてと、一階の奥が米子さんの部屋だ。

「米子さん、入りますー」

ノックをしてドアを開ける。八畳ほどある広めの和室だ。

米子さんは、勉強机に向かっていて。黒髪を後ろでポニーテール状に纏め、あの日と同じ青いジャージに下はスカートという鈴さん以上にラフな姿で、ノートを開いている。

さらにこの前の黒縁眼鏡とは違う、銀縁の眼鏡をかけていた。眼鏡を二つ持っているのだろうか？ そんなオシャレをする人だったっけ。

部屋に入っても、こちらをちらりとも見ない。どうやら僕達に全く気づいていないようだった。

鈴さんが米子さんの真横に歩み寄って、キスするんじゃないかってぐらいに顔を近づける。

「米ちゃん、鈴だよ」

「こんにちは、米子さん」

「お？」

ようやく米子さんが顔を上げた。

「鈴ちゃん、いつ来てたの？ それに忠清くんも。いらっしやいな」

米子さんは慌てることなく眼鏡を外して机に置き、うーんと伸びをする。

勝手知ったる鈴さんが、部屋の隅から座布団を三枚持ってきてせっせと並べる。どちらが部屋の主か分からない。

「あー疲れた。二人とも気楽にね。私もだらだらするから」

礼も言わず真っ先に腰を下ろす米子さん。凶々しいように見えるけど、米子さんと鈴さんは昔からこのように気の置けない仲らしい。僕と鈴さんも気にせず座る。

「お勉強でもしてたんですか？ 楽そうな格好ですね」

「ふふ、まあね。着物はお勉強には向かないからね」

にやり、と口角を上げる米子さん。とんがった目つきと眼鏡には、含み笑いが実に良く似合う。

「米ちゃん、昔から集中してると周りの声が聞こえなくなるからねえ」

「鈴ちゃんは勉強するとすぐ寝ちゃってたものね」

「そ、それはずっと昔の話だよ？」



慌てて弁明する鈴さん。

「へえ。母さんの癩癩は叱ってたのに、鈴さんは寝てたんですか？」

僕も少々調子に乗ってしまう。

「忠清くんまで……子どものころの話だよ……」

体を丸めて赤くなる鈴さんに、

「そうだったっけ？」

にやにや嗜虐的な米子さん。

「二人とも、そんなに虐めないで……それにしても米ちゃん、何のお勉強してるの？」

「うん。秘密にしておきたかったんだけど、鈴ちゃん達には言ってもいいわね。私、数学の勉強してるの」

「数学？ 米子さん、数学が専門じゃなかったでしたっけ？」

米さんは、中学校で数学を教えていたはずだ。

「私が数学教えてたのは、何十年も前だよ。もう頭の中はさびついちゃってるからね。世の中も進んでるし、勉強し直さないといけないよ。ずっと子ども達に書道を教えてた鈴ちゃんとは違うの」

鈴さんに向かってはにかむ米子さん。鈴さんが苦い顔で首を振る。

「私の書道なんて、今は忠清くんぐらいしか習いに来ないよ、米ちゃん。何か理由があってお勉強しなおしてるのかい？」

「うん。まずは孫の優弥に、ちゃんと数学教えてあげたくてね」

米さんは、遠い目で呻いた。

「優弥くんかあ……米ちゃん、優弥くんのこと本当に大切にしてるもんねえ」

鈴さんがほんわか微笑むと、へっへっへ、と恥ずかしそうに米さんは笑う。

「もう一度、自分の数学がどれくらいのもんなのか試してみたいんだ。それでまだ頑張れるって思えたら、子ども向けに塾でも開こうかと思ってるの。楽しいよ、勉強出来る時間があるって」

「米子さん、旦那さんの介護で大変でしたものね」

僕がぼつりと呟くと、米さんは、血の気の引いた真顔でこちらを見た。

途端に重苦し空気が部屋に溢れ、ハッと僕は息を呑む。

迂闊だった。鈴さんも、神妙そうに笑顔を歪めた。

「そうね……確かに、大変だった。けど、何とか乗り越えられたんだよ、私も」

抑揚の無い声で、米さんが囁く。

「……ごめんなさい、言わなくていいことを」

「あーいいのよ忠清くん、いいの。あの人は家族に囲まれて、幸せに逝けたに違いないと思ってるから」

米さんの年上の旦那さんは、六十代後半という若さで痴呆が劇症化し、寝たきりの状態になった。以来米子さんも、米さんの息子さん夫婦も、凄烈な介護の日々を強いられたはずだ。

数年経って旦那さんが亡くなるまで、僕も氣勢の削がれた米さんの顔を何度か見ている。

「あのころは辛くて、日々を過ごすのも必死だったけどね。でも、あの人が死んでから、今まで

、恨む気持ちなんて全然無いのよ。若いころからの楽しかった思い出が、たくさんあるから。このまま私もさっさと、あっちに行っちゃいたかったんだけどね」

「米ちゃん……」

心配そうに、顔を曇らせる鈴さん。

「大丈夫だって、鈴ちゃん！ 何でか分からないけど、私ら、こんな体になっちゃったでしょ？

『楼女』って言われてるんだったかね。若くなって、ただのお婆ちゃんじゃなくなって、頭も体も動くようになったんだから。やりたいことやらなきゃ！ じゃないと損だからね！」

ガッツポーズを決める米子さん。ポニーテールが踊るように揺れる。

米子さんの目に悲壮さは無く、むしろキラキラ煌めいていた。大きな夢を目指す、未来への希望が溢れた若者そのものだ。

「米ちゃんは、偉いなあ——私、今から何か夢を目指すだなんてこと、考えもしなかったよ」

「鈴さんには、鈴さんの生き方がありますよ」

僕の下手くそなフォローに鈴さんは、

「そうだねえ……」

と空返事を返す。

「鈴ちゃん、私は優弥に、うちのお婆ちゃんは現役でぴんぴんした先生なんだぞって自慢させてあげたいのよ。今からでも成長して、孫が喜ぶ良い生き方をしてあげたい。鈴ちゃんもそうしなさいな」

「いい、生き方かあ……」

もう、諦めてた気がするんだけどねえ。

鈴さんの声は外の蝉の声にかき消された。

世界各国が、『楼女』の若返りのメカニズムに目をつけて調査隊を送り込んでくる。

日本政府も定期的な検診を繰り返しながら、志願した被験者の研究に余念が無い。

この若返りが高齢者男性にも応用出来るようになって、やがて全世界の高齢者にも適用出来るようになれば、人類の悲願である永遠の若さが手に入る。

それが種として正しいことなのかどうか、僕などには到底判断出来ないことである。

――なんて、世界の行く末にも興味を引かれないわけではないけれど、実際に『楼女』と触れ合っている僕には『彼女達が若返った自分達と、どう向き合って生きていくのか』ということの方が身近でクリティカルな問題だ。

鈴さん以外にはまだたった二人だけど、出会った『楼女』達の生活の変貌は、僕自身の世界観を一変させたように思う。

さて、すっかり恒例行事となってしまった宅老所メンバー訪問だ。

今日も鈴さん宅で書道の練習を終えた僕達は、二人で町を歩く。

朋香や桐春は、最近は付き合ってくれなくなった。楼女も今や珍しくないし、遠出してまで会おうとは思わないらしい。飽きっぽい友人を持ってしまったものだ。

今日向かうのは、宅老所メンバーの中でも一番の変わり者、黒深菜恵さんの家だ。何しろ、職業が特殊で『祈祷師』である。『占い師』でもある。

鈴さんや他のメンバーにもあまり近寄らず、ただ宅老所でお茶を飲みお菓子を食べて、時間を潰して帰っていく不思議な人。鈴さんはたまに話すそうで、「菜恵ちゃんは意外といい子」なのだそうだ。

「菜恵ちゃんだけは、家にも行ったことが無いからねえ……どう過ごしてるか気になるねえ」

「元気だといいね。菜恵さんって占い師だし、こうなることも占いで分かってたりしなかったのかな？」

「菜恵ちゃんのことだから、全部分かっているかもねえ。今日私達が来ることも、ひょっとして知っているかもしれないよ」

冗談を言い合いながら、僕達は歩く。気楽な散歩だ。

かつては限られた狭い範囲内でしか鈴さんと一緒に歩くことは出来なかったけど、今の鈴さんとならどこへでも行けそうな気がする。

鈴さんの服装は矢張り、あの日買ったコーディネート。

飽きないのだろうか。自分の服装をちらりちらりと見ながら歩く癖だけは直した方がいいと思うけれど、特に口を突っ込むことはしない。

住宅街を過ぎて、見えてくるのは田園ばかりになってきた。A市は中心地からちょっとでもずれるとこんな感じだ。青々とした草と湿って泥臭い風、信じられないほど多いカエルの合唱。やけにでかい虫。単純には美しいとは言い難い、けれども心は落ちつく野趣溢れる光景。

その田園道の先にあったのはボロ屋と呼んでも差し支えない程、傾いている民家だった。最

初からそうデザインされたかのように、地面に逆らって建っている。周りにはほとんど人家が無い。

「菜恵ちゃんの家、だねえ？」

鈴さんが、僕に確認するように呟いた。

「た、多分……」

胡乱に答える。

他に家が無いので疑いようは無いのだけれど、それぐらいにその家は浮き世離れしていた。

近づいてみたら『黒深』という表札があったので、間違いない。どこを探してもチャイムボタンが無いので、仕方なく玄関のガラス戸に手をかけた。すんなりと開く。

警戒心の薄さが田舎らしいと言えらしいけど、今どきは田舎でも鍵ぐらいかけておく。

不用心なのか、それとも余裕でもあるのか。

僕が家の奥に向かって呼びかけようとする。

「いらっしゃい、忠清。それに鈴もだね」

「!？」

いきなり声がしたので、僕も鈴さんも心臓が飛び出そうになった。

灯りの無い長い廊下の奥から、ことり、ことりと小さな足音と、ぼんやり黒い輪郭がこちらに近づいてきていた。

腰まで長い黒髪。細長い背丈。横たわる三日月に似た切れ長の瞳。喪服のような黒いレースの服は、以前と変わらない。生気が無い。

失礼な言いようだが。黒衣の死神に見えた。

「久しぶりじゃな。わしが誰だか分かるね？」

分かりやすい老人言葉の――若返った、菜恵さん。

「な、菜恵さん、びっくりさせないで下さいよ！」

しどろもどろに訴える。額から冷や汗が吹き出てきた。氷柱を突っ込まれたかのように背筋が冷たい。

鈴さんも同じように、こくこくと頷いている。

「はん、ここはわしの家だよ。どこにいようとわしの勝手だし、どこで話しかけようとわしの自由だ」

威圧的な態度で、腰に手を当てて見下してくる。菜恵さんらしい。

「で、でもすぐに『いらっしゃい、って言いましたよね？ 何で分かったんですか、僕らが来ること？』

今回菜恵さんには、前もって電話連絡をしていないのだ。

僕達は書道の練習が終わってすぐここに来た。ここに来ることを、菜恵さんが知っていたはずは無い。

そう告げると。

「そうだったかい？ ま、なんとなくそんな気がしたのさ――とにかく上がりな。話がしたいんだろ、わしと」

どうでもいいことのように述べて、菜恵さんは廊下の奥へと消えていってしまった。

「菜恵ちゃんはやっぱり変わった子だねえ」

鈴さんが、ぽかんと感心するように呟く。

「いや、変わった人ってレベルじゃないよ、鈴さん……」

冷や汗がまだ、止まらない。

消えた菜恵さんを追いかけて入った部屋は、菜恵さんには申し訳ないけど、とてつもなく不気味だった。

狭い和室。古くささくれた畳。閉めきられた障子からは陽が入らず、暗い。

そのくせ、妙に涼しくて寒いぐらいだ。どこかから冷たい風が吹き込んでくるようである。

部屋の中心には大きな祭壇があった。神棚のような宮形を大上段にして、大がかりに段になっている。左右には榊の葉が飾られている。

奇妙なのは、お供えものが青野菜ばかりということだ。そのせいで部屋全体が青臭い。他のお供えは御神酒ぐらいしか無い。

恐らくこの部屋で祈祷や占いが行われるのだろう。

菜恵さんは、祭壇の前で正座しながら黙祷していた。

話しかけ辛いなあ、と思っていたら、

「勝手に座りな」

と目を瞑ったまま言われる。

僕が当惑していると、鈴さんはすでに菜恵さんの後ろにちょこんと座っていた。

「座ろう、忠清くん？」

全く怖じ気づいていない。伊達じゃない人生経験を積んでいるからか、それともこの部屋の異様に天然で何も感じていないのか。さすが、菜恵さんと普通に話せるだけはある。

菜恵さんは、祭壇に向かって手を合わせながら、ブツブツと呟き始めた。

仏教のお経か何かなのかと思ったけれど、耳に覚えが無い。神社の祝詞なんかとも違う旋律だった。ここに祀られているのはどんな神様なのだろうか。

色々質問するのも気が引けるし、邪魔をするのも怖かったので、僕達は厳粛に待つことにした。

しばらくして、菜恵さんの呟きが終わり、部屋に沈黙が訪れた。

「心配して来てくれたんだらうけど、わしは変わらないよ」

背を向けたまま、菜恵さんが唐突に告げる。

まともに面と向かっては会話してくれないのだろうか？ 話しかけるタイミングを図り辛い。

「え、えーと……普段過ごしてて、困ったことは無いんですか？ 楽しいことでもいいですけどね」

問いかけながら、恵さんの背中を見つめる。

レースから背骨が透けて、分かたれた黒髪の間から白い項がちらつく。

「わしは、見た目だけの誤魔化しを楽しんだりはしないよ。こんなのは神さんの狂った気紛れだね。気紛れに付き合っちゃいけないよ」

「こんなのって――みんなの若返りのことですか？」

神様に向かって `狂った気紛れ、なんて言葉を使っていいのだろうか。敬虔な信仰があるのなら、言うてはいけないことのような気がした。

「みんな、色々違う生き方を考えてたけど、菜恵ちゃんは変わらないのかねえ？ そうするべきなのかねえ……」

占いの結果を訊くように、神妙な顔の鈴さん。

菜恵さんがゆっくりと体を横に向けて足を崩し、こちらを横目に見た。

胸元がはだけている。廊下で見たときには気づかなかった、豊満な白い胸が飛び出しそうになっていた。冷ややかに、妖艶だった。

僕はどぎまぎして視線を逸らす。

「運命の数は変わってないだよ、鈴」

菜恵さんの声音は、沈鬱さを孕んで低く重い。

「ほんのお試してみたいなものなんだよ。今起こってることは。流されるべきじゃない。浮かれるべきじゃない。楽しむべきじゃない」

僕は責められている気さえしてきた。

「……うーん。菜恵ちゃんの言うことはいつも難しくて、私にはさっぱり分からないけど」

鈴さんはちょっと困った顔で笑う。

「それでも菜恵ちゃんは、嘘をつかないからねえ。覚えておくよ」

「鈴ぐらいさ。わしの友人で、そう思ってくれてるのは」

菜恵さんもとっこりと微笑んだ。大きく開けられた口から八重歯が見える。屈託の無い、零れるような幼い笑顔だった。

こんな顔で笑う人だったなんて知らなかった。意外だ。

「さて、忠清」

「は、はい？」

次の瞬間にはきつい目で、沈んだ真顔に戻る菜恵さん。僕にはどうあっても、心を開いてくれないらしい。

「お前は何人もの、若返った者達に会ってきたね？」

「ええ、直接話しただけなら、えつさんや米子さんにも」

「うむ。他にもおかしいことがあつただろう。誰の体にもあつたはずのことさ」

「え……？」

鈴さんやえつさんや米子さんの、体に――？

何か、特別な点があつただろうか。

皆若く、綺麗で、可愛くて、活動的で。問題など無かったように思う。

「鈴の髪の色、気にならなかったわけではないだろう？ 他の者も……」

菜恵さんに言われて、ハッと僕は鈴さんの顔を見た。

びくりと鈴さんが、僕の目を見返す。

流麗な銀色の髪。神秘的で儚げで、美しい鈴さんの髪。

けれどそれは、『楼女』になる前の鈴さんの特徴でもあって。

「若返ってない部分がある――そういえば、国の発表でも言われてましたね。気になるほどのこ

とじゃないと思ってましたが」

「うん……お国の人に集められたみんなもそうだったけど、まだよく分かってないみたいだったねえ」

そう。鈴さんは、白髪になり損ねた銀色の髪が。

えつさんは、確か物覚えの悪さが治らない、と言っていた。

米子さんは――？

「鈴さん、米子さんは何も変わらなかったんですか？」

「米ちゃんは、目が駄目だったんだよ。老眼、進んでたからねえ」

「老眼……」

それですか。

鈴さんの家で会ったときと、この前会ったときで、米子さんは違う眼鏡をかけていた。オシヤレでかけ替えているのかと思ったけど、あれは米子さんが近視用と老視用の眼鏡を、使い分けていただけだったのか。

「わしは、鼻が前からおかしくってね。食べ物の味がよく分からない。見た目だけ若返ろうと、どこかはババアのままってことさ。そんな不自然な体を、大手を振って喜ぶべきだと思うかい、忠清？」

菜恵さんは自分を卑下するような笑みを浮かべて、僕を見る。

答えようが無かった。鈴さんも黙っている。

「今まで深く考えてこなかった……どうして、若返りきれてない部分があるんだろう。それも、みんな違う部分が」

まるで、消えない傷痕のように。深く心に刻まれた痛みのように。

「わしは、それを『みしるし』と呼んでいる。自分の運命を忘れちゃいけないぞ、って言う神さんの忠告さ。意地悪とも言うけどね。だからね。忠清、鈴」

またしても、菜恵さんは哀しそうな辛そうな顔で、僕と鈴さんを見比べて。

「バカな考えは――苦しくなるからね」

囁いた。

意味は分からない。返事をしなければいけない気がするのに、言葉が出てこない。

答えあぐねていると、鈴さんが突然話題を変えた。

「菜恵ちゃん、旦那様の具合はどう？」

「あいつかい？ あいつは元気だよ。今も茶の間でのんびりテレビでも見てるじゃろ。流されるべきじゃない――とは言ったけど、あれはわしのこの綺麗な顔と体を見ても、何も変わらないのさ。それはそれで、失礼な話だろ？」

「本当だねえ。綺麗なのにねえ、菜恵ちゃん」

二人は笑いあっていた。

僕はどうしても、その交流に入っていけなかった。

菜恵さんの家からの帰り道、鈴さんの買い物に付き合っスーパーに寄ることになった。

以前はヘルパーを呼ぶことも多かったけど、今は鈴さんも体力を気にせず買い物を楽しむことができる。

時刻はもう少しで昼の三時。

「今日はねえ、たまごのタイムセールがあるんだよ」

満面の笑みで店に入っていく鈴さんが、買い物カゴを持ってすでに混みあっていた列の後ろに付く。この列にいる女性の何人かが『楼女』なのかも、と考えながら僕もカートを押して一緒に並ぶ。

「久しぶりに、オムライスでも作ろうかねえ」

鈴さんは思い出すように呟く。

小学生のころ、書道の練習が終わった後に、鈴さんが作ってくれたオムライスを食べたことがある。レストランのようなびっくりする美味しさは無かったけど、ケチャップしかかかっていない、素朴でほっとする味だった。

「たまには一緒に晩ご飯作るのもいいかもしれませんね。鈴さんの家でも、僕の家でもいいし」

「そうだねえ。忠清くんのお母さんと一緒でもいいね」

母さんと若返った鈴さんが、並んで料理をしている光景を想像する。

何という幸福な団欒——平和そのものだ。

「へへへ……」

「うん？ どうしたんだい忠清くん？」

僕はいつの間にかへらへら笑っていた。鈴さんだけでなく、行列の客もちらちら怪訝そうにこちらを見ている。

「あ、あはは……なんでもないです、ごめんなさい」

謎の愛想笑いで誤魔化す僕。

桐春の性格が移ってしまったか。今までこんな妄想をしたことは無ったのに、自分が怖くなってきた。

買い物を終えてスーパーから出ると、日射しはまた強くなってきていた。直射日光に肌があぶられるようだ。

鶏肉や豆腐も買ったし、悪くなる前に帰った方が良さそうだ。

「一度鈴さんの家によってから、僕の家に来ますか？」

「うん、そうだねえ。オムライス、昔みたいに美味しく出来るといいんだけどねえ」

心配しながら笑う鈴さんが、買い物袋を持って歩き出す。買い物袋は二つあって、いつものように僕は両方持とうとした。だけど鈴さんは、

「これぐらい持てるよ」

と、袋の一つを両手で強引に持った。

食料品だけなのでそんなに重くはないが、小柄な鈴さんが持つと大荷物に見える。手も塞がっ



ているので、いざという時に手を引いてあげられない。

そういえば最近僕は、鈴さんの手を引いていない。

最後に手を引いて歩いたのは、いつのことだったろう？

『楼女』になって、体も若返った鈴さんには、それは必要の無いお節介なのかもしれない。

最初に若返った鈴さんを家に連れていったときは、ごく自然に手を差し出してきた。

今は違う。鈴さんも、己の体に慣れたんだらう。

寂しくないと言えば、嘘になる。

そんな僕達の前を、仲睦まじく指を絡ませ合ったカップルが通りかかった。

「……若いなあ」

僕はつい老熟した言葉を吐いて、そのカップルの顔をちらりと見た。

女性の方は若い。僕と同じぐらいで、鈴さんら『楼女』達とも大差無い年齢だろう。

それでいて、華美だ。

ローライズジーンズがくっきりとヒップラインを浮かび上がらせ、胸の膨らみがタイトなカットソーの上からも分かる。ボブに近い短い髪を金色に染めて、首にはネックレス、耳には派手な銀色のピアス、メイクもばっちり決まっている。

若さを全面に出したフェロモン全開の女の子だった。

一方、相手の男性は――。

「――桐春？ 桐春か？」

女の子と手を繋いでいたのは、桐春だった。

僕と鈴さんに気づいて、桐春が「あ」と小さく声を上げる。

硬直する表情。引きつった笑み。

会いたくなかった、と言わんばかりの倦厭そうな顔。

「あら、桐春くん。お友達かい？」

呑気に話しかける鈴さんに対して、驚いているのは桐春だけでは無かった。

女の子の方も、僕や鈴さんを見て笑顔を歪ませている。そして、気まずそうに。

「鈴ちゃん」

と囁いた。若さに似合わない皺が、眉間に寄っている。

「うん？ もしかして――貴方」

顔を伏せようとする女の子を、まじまじと見つめる鈴さん。

「鈴さん、この子と知り合いなの？」

「……純ちゃんよねえ？」

鈴さんが、嬉しそうに告げる。

鈴さんをちゃんづけで呼ぶのは、宅老所のメンバーだけだ。僕の知り合いでもあり、『楼女』に決まっている。それにしても――それにしてもだ。まさかこの人が。

「本当に純さんなんですか！」

「――うふん。実は純でした！」

開き直った純さんは、顔を上げて、色っぽくウインクしてきた。

「ほう～」

なぜか感嘆する鈴さんである。

「ず、ずいぶん若々しい格好ですね。朋香もそこまでセクシーじゃありませんよ」  
と言うか、問題はそこでは無いのだけど。

「純ちゃん、桐春くんと仲が良かったんだっただかねえ？」  
鈴さんがあっさり代わりに尋ねてくれた。

桐春は、ずっと所在無げに視線を泳がせている。

「どうしようっか桐春くん、バレちゃったー」

「ああ、まあその内バレるとは思ってたけど……」

ぼそぼそと相談している純さんと桐春さん。

純さん、しゃべり方が大幅に変わっている気がする。

「もーいいわ、桐春くんから言っちゃって」

「マジっすかー……はあ、しょうがないか」

心底面倒そうにため息を吐いて、桐春は俺に向き直る。

「よう、忠清。俺だ。桐春だ」

「知ってる」

「うん、そうか。そうだよな——実は俺ら、付き合ってるんだ」

「へえ………は？」

言葉を頭で咀嚼するのに、時間がかかった。

鈴さんも横で言葉を失っていた。

「つ、付き合うって……じゃあ、お前の新しい彼女って——純さんなの？ 純さん、桐春と付き合ってるの？」

桐春と純さんは、照れ臭そうに顔を見合わせて、声を揃えて「うん」と返事した。

冗談には見えない照れ方だった。本気なのか。

「純ちゃんが、若い子と……それは……まあ、へえ……そ、そうなのかい……」

鈴さんも動揺を隠しきれない。僕も同じだ。

今まで『楼女』になった人達と会ってきて、一番の衝撃だったかもしれない。

「お前、お年寄り苦手だって言ってたじゃないか。なのに、いきなり純さんを彼女にするって、どういう心境の変化なんだ？」

「心境は変わってねーよ。俺が苦手なのは、見た目が年取ってる奴だけだよ。ちゃんと女の子っぽくて可愛くて、話も合うんだったら、中身が年寄りだろうがガキだろうが関係無いだろ？」

得意げに語る桐春。きっぱりと、迷いの無い口ぶりだった。

「お前、そんな単純なことみたいに……純さんはいいんですか？ こいつの彼女なんて、大変ですよ」

「うふ。私も全然問題無いわよー。だってさ、せっかく若返ったんだから、本気で楽しまなきゃつままないでしょ？ そのために、若い子の本読んで、若い子と話して、服も見繕ったんだから。年金、貯まってたんだもん」

わざとらしく、腰を揺らして科を作る純さん。

菜恵さんだけは例外だったが、えつさんも米子さんも、鈴さんでさえも、若返った体を受け入れて楽しんではいた。

けど、それぞれの若さへの取り組み方は、今までの人生の延長線、拡張した円の中にあった。

純さんはまたひと味違う。桐春という若い恋人を得て、生活や生き方そのものを一変させようとしている。ここまでシンプルに若さを受け入れて、本気で若さを謳歌しようとする気迫と気概は純さんにしか無かった。

「純ちゃん、思い切ったのねえ……」

ぽかんとしている鈴さん。

その耳に、純さんが唇を寄せて囁き出した。

「鈴ちゃんもさあ、恋しなきゃ勿体ないよ？好きな男が出来たら、遠慮なんてしちゃ駄目よ。私も鈴ちゃんも、連れ合いはとっくの昔に死んじゃってるんだからさあ」

内緒話が、こちらにしっかりと漏れてしまっている。

「……………」

鈴さんは答えない。

ほんのり顔を赤くして困ったように笑っているが、慌てているわけでもなかった。

その様を見て、つまらなそうに純さんが唇を離す。

「うふん。鈴ちゃんは昔から純情だもんね。まあ、最初の旦那様に操を立てて、子どもも作らなかつたんだものねー。それは偉いと思うけど、私は無理。私は孫とも今は会えてないし、今をもっと楽しみたいの」

べったりと粘り着くような笑顔。宅老所でいつも会っていた、純さんが見せたことの無い顔だ。これも若さか。

菜恵さんといい、純さんといい、人はここまで複雑に表情を隠しているものか。

「……………」

鈴さんは、俯いたまま何も言わない。口の端が引きつっているように見えた。

異様な空気を、桐春も察したようだった。

「もう行こうぜ。せっかくの日曜なんだからよ」

純さんの手を引いて、さっさと去ろうとしてる。

「うふ、そうね。じゃあね、鈴ちゃん、忠清くん」

純さんも、無言の鈴さんを気にもかけず去っていかうとする。

「待て、桐春」

一つだけ気になることがあって、僕は桐春を止める。

「何だよー忠清……恋愛ぐらい、俺の好きにさせろよ。俺は彼女がいねーと、耐えられない生き物なんだって」

「別に止めないよ。お前や『楼女』の人がどう生きようと勝手だし。ただ、一応訊かせてくれないかな」

「何をだよ。純さんの前でエロ質問は止めろよ」

「……しないっつの、お前じゃあるまいし。お前、純さんと付き合ってみて、違和感は無いか？

目が悪いとか、物覚えが悪いとか」

僕の言葉に、真っ先に顔を青くしたのは純さんの方だった。笑顔が崩れ、僕を睥睨してくる。「余計なことは言うな」と気圧してきている。

「はあ？ 別に無いけど……ああ、純さんたまに胸が痛くなるみたいで、早く走ったりすると怒られるけど」

「それか……」

それが――純さんの『みしるし』。

『楼女』であることを忘れないための傷痕か。

「で、それが何だって……」

桐春が窺った純さんの眉間には、老齡を刻みつけたかのような、苦々しい皺がある。

「純さん……？ どうしたんだよ」

「え？ うん、そーね。ほら、もう行きましょ、桐春くん」

「お、おう？」

純さんは狼狽しながら、先ほどとは逆に桐春の手をしっかりと握って、さっさとどこかに行こうとする。

どうやら純さんは、自分の体に残る老いの痕跡である『みしるし』を桐春に隠しているようだ。

――怖いのだろう。誰だって、自分の欠点を新しい恋人に晒すのは躊躇う。

『楼女』であろうと、若者であろうと。

「桐春。ちゃんと気をつけてやれよ！」

僕の叫び声を訊いた桐春は、首を傾げながら振り向き、そのまま去っていった。

「帰ろう、鈴さん。オムライス作ろう」

「……うん、忠清くん」

鈴さんは、顔を上げてぎこちなく言う。

そのぎこちなさを、僕はもっと深く考えてやるべきだったんだろう。

「若くなったら、人って感性まで変わっちゃうんだね！」

初夏らしく、暑苦しい陽気さにはしゃぐ朋香。

「そんなにすごい、その『ぽたらか』って」

『ぽたらか』とは、かねてより評判の『楼女』のみによって結成されたガールズバンドの名前だそう。正式には『pota rocker』だっけ。僕はネットで配信されたデビュー曲を聴き逃してしまい、未だにちゃんと聴けていない。

「演奏はまだただけど、なんか、パワーってゆうか魂があるのよねー」

朋香が薄っぺらく、批評家ぶる。

今のところは知る人ぞ知るバンド、ということでメジャーになりかけの状態らしい。

「きっと売れるよ、彼女達は。私が言うんだから、間違いないっ」

「ふ、ふうん……」

朋香の先見性には僕も一目置いているので、あり得なくも無い。

僕と朋香、それに鈴さんは、市民体育館近くの屋根のあるバス停で、他のメンバーを待ちながら談笑していた。A市市民体育館で今日、例の『ぽたらか』のデビューライブが行われるのだ。

興味の薄かった僕を誘ったのは朋香だ。『楼女』のみennaと日常的に接している僕なら、こういったバンドも好きになると思われたのかもしれない。

せっかくなので、僕は鈴さんを誘ってみることにした。どうも菜恵さんの家から帰ってきてから、鈴さんの元気が無い気がしていた。頑張っている『楼女』の演奏を聴けば、気晴らしになるかもしれない。

すると鈴さんは「他の宅老所の友達も連れていきたい」と言い出した。

確かに宅老所があまり使われなくなったし、こんな機会でも無ければ全員が揃うのは難しい。気の置けない仲間がたくさん集まれば、鈴さんも安心だろう。

僕は喜んで承諾した。

朋香は「忠清だけ誘ったのになんでそんなに大所帯になってんのよ……」と、あからさまに不機嫌になっていたけれど。

今日も雲一つ無い晴天。バス亭近くに植えられている木々も青々とした葉を拡げて、喜びを享受している。気持ちはいいけれど、待つ身に長時間は堪えた。

鈴さん達が若返っていなければ、こんな所で待ち合わせするのは命取りにもなりかねない。

「いい日和だねえ」

ベンチに座って、鈴さんは屋根越しに空を見上げる。

日に透けた銀色の髪の毛、季節を間違えて降ってきた雪のような白い肌。風景からくっきりと浮いている。

「おっ、来たよー！」

朋香の声と市内からやってきたバスの音が、僕の思考を切断する。

砂埃を巻き上げて、バスは目の前で停車した。

出口から飛び出してきたのは、えつさん、米子さん。そして桐春と純さんだった。

「おー、待たせたねー忠清！ 鈴ちゃん！ それと、えーつとえーつと……朋香ちゃん！」

と、大きく手を振りながらバスを降りてくるえつさん。

小さすぎる体でぽよんぽよんと跳ねて、暑さを気力に変えて活性化している。服装はオーバーオール。動き安さ重視なのだろうけど、より一層小学生に見える。

物忘れが出てしまったのか、朋香の名前を一瞬忘れていた様子だ。

「こんにちはみんな、暑いね。鈴ちゃん、水分ちゃんと取ってるかい？ 塩分の取りすぎには注意だよ」

と、真っ先に鈴さんを心配する米子さん。

黒縁眼鏡に、今日は白いブラウスにスカートという格好で、髪型はポニーテールだ。清潔で知的な委員長って感じーいや、女教師だったっけ。

外見十代で中身は八十前の女教師。複雑だ。

「おっはよ〜。今日は誘ってくれてありがとね！」

「よー忠清」

と、最早付き合っていることを隠す気が無い純さんと桐春。

ミニスカキャミソール姿のセクシー純さんは桐春の体にぴったり寄り添って、その腕に両腕で絡み付いている。女郎蜘蛛のようだ、とってしまった。

一応補足しておくけど、蜘蛛は嫌いじゃない。……うん。無用な補足だった。

「菜恵ちゃんは、やっぱり来てないねえ……」

残念そうに、鈴さんが呟く。

「うん、私からも誘ってみただけど。あの子はこういうの苦手だしね」

米子さんも困ったように答える。

今日来ていないのは、菜恵さんだけだった。そもそもあの人は『楼女』の出現を歓迎していなかった。こういったイベントは好ましくないんだろう。

「こうして揃うと、みんなお婆ちゃんだったなんて信じられないね……」

呻いた朋香は今更ながら、瞠目して一同を見比べていた。

えつさんが嬉しそうに、そんな朋香の顔を見上げる。

「アハハ、朋香ちゃん、もし変な男に寄りつかれたらあたしに言いなよ。当分立ち上がれなくなるぐらい、こてんぱんにぶちのめしてやるから！」

「はいはいえつさん。そんな物騒なことしなくても私は大丈夫だよー」

窘める朋香は、妹にじゃれつかれる姉のようである。

「朋香ちゃんには忠清くんの面倒も見てもらってるし、いざとなったらちゃんと私達が守ってあげるからね」

胸に手を当て、毅然と笑う米子さん。

「面倒なんて見てもらってないですよ、米子さん。朋香なんて一人で家事も出来ないんですよ？」

げんなりして僕は抗弁するが。

「そうなんです、忠清って頼りないんですよー。男らしくないし、怒ることもあんまりないし、鈍いし、何よりジジ臭いし」

「何調子に乗ってるんだよ朋香……」

「家事ならいつでも教えてあげるからねえ、朋香ちゃん」

鈴さんまでもが、朋香サイドに拠って立つ。

「わー、ありがとう鈴さん！ 鈴さんにお料理習いたーい！」

「うん、いつでもいいからね」

「男の捕まえ方も教えてあげるわよー」

いつの間にか会話に入っている純さんである。

「純ちゃんには桐春まで捕まえられちゃったからね！ アハハ」

えつさん、そこは笑うべきだろうか。

どこにも、僕が介入する余地は無さそうだった。

「はは、駄目だな忠清。女の言うことは聞いておけ。年齢に関係無く、つるんでる女を敵に回すと怖いぜ」

死んだ魚のような目で、桐春が肩を叩いてきた。

「お前が言うと言得力あるよ……」

実の祖母の友人を彼女にする男だけある。

「よーし！ そろそろ時間だし会場に向かおっか、みんな！」

大所帯を嫌がっていたはずの朋香は、すっかりみんなの親友になっていた。

ライブ会場であるホールは、すでに来場客の熱気に溢れている。人気ラーメン店の行列に並ぶことすら躊躇する横着者の僕は、この人混みに耐える音楽ファンに尊敬の念すら覚える。

朋香が取っていた席は、最前列だった。にわかファンなのかと思ったら結構入れ込んでいる。ほとんどの客は、見たところ十代から二十代の若い男女だ。あくまで、見たところだけでは。近くにはきょろきょろと周囲を見回す挙動不審な女性が何人かいる。一人で来て不安になった学生にも見えるし、慣れない文化に戸惑う『楼女』かもしれない。

あの子もそうだろうか、こちらは本物の高校生だろうか、と憶測をしかけたけどバカらしくなってすぐに止めた。以前は町を歩く度に出会った女の子の実年齢を気にしていたけど、詮索はキリが無さ過ぎるということに最近やっと気づいた。

「忠清くん、誰か捜しているのかい？」

右隣に座っていた鈴さんが気遣わしげに僕の顔を見ていた。僕が最も挙動不審だったようだ。

「いや、会場の平均年齢どれくらいかなーって」

冗談めかして言うと、くすくすと鈴さんが笑った。

「案外、朋香ちゃん以外はみんな、私と同じくらいだったりするのかもねえ」

「鈴さん、洒落になってないから、それ……」

聞き耳を立てていた朋香が、顔を引きつらせていた。

「さすがに全員ってことはねーだろ～」

桐春が遠くから突っ込みを入れてきた。

「そりゃー俺らが思ってるより、割合は多いかもしれないけどな」

「そうね。私達から見ても、誰が若くて誰がお婆ちゃんなのかなんて、判断しきれないものね」

米子さんが冷静な分析をして。

「どーでもいいんじゃない？ 要は気持ちの若さでしょ～？」

純さんが乱暴に笑い放つ。その通りかもしれないが、純さんほどの気持ちの若さは鈴さん達には到底真似出来まい。僕も無理だけど。

皆、苦笑いだった。

しばらくして、会場の照明が落ちた。

「お、始まるんじゃない？」

薄暗闇の向こう、興奮したえつさんの声。

ステージ上から、強烈なバックライトが客席に向けて当てられる。目が眩むのと同時に、会場中から歓声が上がった。

逆光の中心に、四つの輪郭が見えた。バックライトが切り替えられ、スポットライトに変わる。

四人の少女が立っていた。

ギターを持った少女は、ゴスロリ的なドレス姿だった。垂れがちで大きい瞳が、子犬のようで



愛らしい。

ベースを持った少女は、濃紺の着物姿だった。二尾に結わえられた特徴的なツインテール（だっけ）のせいか、女子中学生が無理をして着飾っているように見えるが、表情は大人びている。

ドラムスティックを握る少女はジャージ姿。米子さんの普段着とは色違いの赤が映えて、長い髪も赤く染めていた。

前に出ている眼鏡の少女は、ヴォーカルだろう。健康的でスレンダーな体にTシャツにジーンズと、カジュアルだ。

おっと、訂正。彼女達は『少女』では無く、『楼女』だということを忘れてはいけなかった。演奏はすでに始まっている。

重低音のベースとドラムが、腹の底に伝わってきた。

ジャージ楼女のドラムスティックさばきは少々単調だが、女性のものとは思えないほど力強い。大気に直接叩きつけているような振動だ。

着物のベース楼女も、軽やか、かつ滑らかに弦を爪弾く。弾きながら客席をちらちら見て、色っぽく微笑んでいる。純さんとは違う種類の艶やかさだ。

ギターのリフが重なっていく。ギター楼女はクールなのか照れ屋なのか、俯きすぎて表情が全然見えない。初っぱなから顔が見えないのもどうかと思うけど、手元は忙しく素早く動き回る。テクニックについては僕は詳しくは無いが、僕が何年ギターを学んだ所で、あの演奏は無理だろう。

それらを纏めあげるように、ヴォーカル楼女が喉を奮わせる。とんでもない声量だった。第一声が会場全体に響き渡る。特徴的で、耳に残るビブラート。

しばらく聴いてみて、その発声が宅老所でよくかかっていた民謡の響きに似ていることに気づいた。

「すごいなー、この歌声……」

一曲目が終わりかけて、僕は誰にでもなく呻いた。

「でしょ?! パワフルだよな! ヴォーカルのふーちゃん、民謡の先生もやってるんだって!」

ハイテンションな朋香。矢張り民謡だったか。しかもプロだった。

「あの人、ふーちゃんっていうの?」

「……呆れた。忠清、メンバーの名前も知らなかったの?」

軽蔑の眼差し。時代遅れで悪かったな。

「ヴォーカルの子が足立房江さん、ふーって呼ばれてるそうだよ」

教えてくれたのは、意外にも米子さんだった。

「ベースが座間七重さん、通称ナナさん。ドラムが日高綾子さん、通称アヤ。ギターが戸田幸さん、通称こー」

すらすらと、全員の紹介をしてくれる。

「米子さん、ひょっとして詳しいんですか?」

「そりゃあね。`私達、の中で、多分一番世の中に出てる人達だもの。気になるに決まってるでしょう?」

自分のことでも無いのに、米子さんの口調は誇らしげだ。

「頑張ってる子がいると、私達もまだいけるって気になるからね！ あのアヤって子、私より年上だけど、きっと強くなるよ！」

ロックと闘争心の親和性が高かったのだろうか、目も充血し息も荒く、血湧き肉躍るといった感じのえつさんである。ドラマーは強くなる必要は無いと思うが。

「あの子、若い子にモテそーねえ……」

純さんがライバル視しているのは、着物姿のベーシスト、ななさんだ。

「純さんの方が綺麗だって！」

「あらーありがと、桐春く〜ん」

おべっかを使う桐春に、甘い声を出しながらべたべたする純さん。一生やっててくれ。

一方鈴さんは頬を紅潮させて、膝の上で小さく手を叩き、リズムを刻んでいた。

ロックが好きだったとは思えないのだけど、演奏が琴線に触れたようだ。少々タイミングがずれて、慣れないリズムに乗りきれていない様が微笑ましい。

周囲から、再び歓声が響いた。

ヴォーカルのふーさん——敬称をつけると思いっきり違和感がある——が、マイクを持って客に語りかけ始めていた。

「みなさーん、こんにちは！ こんな所まで、よーくこんなお婆ちゃん達の歌を聴きに来てくれたねー！」

どっと笑い声が巻き起こる。

ふーさんは全く嘘は言っていないのだが、あの健康的なTシャツの女の子の口から飛び出す『お婆ちゃん』という言葉は、ユーモアにしか聞こえない。

「私達が、こうしてステージに立ってみなさんの前で演奏出来るなんて、夢にも思っていませんでした！ 古臭い、若返った私達にこんな音楽を薦めてくれたのは、バンド活動をしている孫達でした！」

ふーさんが、客席を手で示す。ライトが当てられたそこに、恥ずかしそうにしている女の子達がいた。

ぺこぺこと頭を下げている彼女達が、ふーさん達の孫らしい。一人はドラムのアヤさんとお揃いのジャージ姿だ。アヤさんの方が、孫のお古を着ているのだろう。

言われなければ、どっちが孫なのか分からない。

「さっき聴いてもらったのは、私達が孫から教えてもらった音楽。でも私達は、古臭くて伝統的な音楽も大好きなんです。それが、私達の歩いてきた人生で、音楽だから。『楼女』と言われている私達の作った、古くて新しい音楽を、聴いてくださいねー！」

大歓声が上がった。朋香も、米子さんも、えつさんも、純さんも、桐春も。

年齢性別、若者楼女問わず僕の友人達が、嬌声を上げる。

鈴さんも声こそ上げないが、力いっぱい拍手していた。

僕はと言うと。

——青臭いな、と正直思った。

けれどこの青臭い言葉が、あの『楼女』の人達から出ていると思うと感慨のようなものが湧い

てくる。これが若さか、って奴だ。青臭い高齢者。変な響き。

「では次の曲、聴いてくださーい！」

ふーさんのコールで、照明が暗転した。

しばし静まる観客の声の中で、再びバックライトに影が浮かび上がる。

そこには、違和感があった。

ベースのななさんの前には、大正琴が乗った台が。

ギターのこーさんは、傍らに津軽三味線を置いて。

ドラムのアヤさんのドラムセットを見れば、バスドラの近くに和太鼓がある。

ロックバンドらしからぬ、混沌としたステージだった。

「あーこれこれ、本命！」

朋香のテンションがさらに上がる。

伴奏のドラムのリズムに、和太鼓の音が混入する。

ギター、ベースがその渦の中に乱れ入っていく。

ヴォーカルの抑揚の振幅も大きくなり、メロディにも独特な音階が現れる。

時折、ベースを置いて琴を演奏したり、ギターの変わりに三味線のソロが入る。

複雑怪奇なセッションだ。

和洋折衷のバンド編成は、多分今までも数限りなくあったんだろうと思う。

しかしこれは、このような若い外見のバンドが出す音にしては渋すぎて――。

――内面の年齢を考えると、乱暴すぎる。

半端であって熟達していて。未熟かと思えば爛熟していて。精緻にして奇矯だった。

大仰な言い方をすれば、『楼女』が生み出した、多分、初めての新しい文化。

知らず、僕は彼女達の音楽に魅入られたまま、長い時間を過ごした。

アンコール曲も含む、全四曲の演奏が終わった。

未だ熱狂が冷めない客からは、拍手と歓声が鳴りやまない。

「かわいかったねー！」

「俺はドラムのアヤって人が好みだな」

感激に浸っている朋香に、どこまでも即物的な桐春。

えつさんが、大振りに豪快な拍手をしていた。

「音楽はよく分からないと思ってたけど、楽しいもんだねー！ 若くなってなきゃ、とてもじゃないけどこんな所に来られなかったけどね！」

米子さんがしっとりとした汗を拭いながら、その言葉に頷く。

「そうね。以前のままの私達じゃ、頭が着いていけなかったでしょうね」

「へー。体が若返るだけじゃ無いのね～」

桐春にくっついてきた純さんも、真剣な顔で感心する。

同じ演奏でも、僕や朋香と『楼女』のみんなでは微妙に感じ方が違うようだ。『楼女』になったみんなは身体感覚が十代まで若返ったことで、音楽を楽しむ感覚や内面にも影響が出ているのだろうか。

それとも、若返って違う文化に触れたことで、みんなの感性にも変化が出ているのだろうか。

まあ、ちょっと違うけど同じ感動を共有出来るのは、いいことだと思う。

『ぼたらか』のメンバー達は互いに満足そうに目配せしあって、客席にいる自分の孫達に大きく手を振った。孫達も、泣きながら手を振り返す。

――こんな家族交流もまあ、アリか。僕は一人で納得する。

そういえば鈴さんの声を聞いていない。今日の鈴さんはいつも以上に寡黙だ。

「鈴さん、大丈夫？」

横を見てみると鈴さんは、まだ陶然としたままだった。僕の呼びかけにも応じない。

ゆらゆらと銀の髪の毛が、目にかかるのも気にせずに。

「すごい歌だねえ……あの人と昔、夏祭りで踊ったのを思い出すねえ……」

ぼつりと、浸るように。鈴さんは呟いた。

僕は言葉を失う。狼狽に指先が震えた。

――そうか。そういうこともアリか。

気持ちが。

世界が。

十代まで遡っているなら、焦がれる気持ちだって。

遠い昔に、死に別れた最愛の人への気持ちだって。

思い出に浸る感情だって、若返ることもきっとある。

思い出は強い。

七十年間想われたものなら、特に。

それは素晴らしいことのはずなのに。

なぜ、僕は耐えられないんだろう。

――僕はそれに、勝とうとでも思っていたんだろうか。

帰路に着く客の列で、会場の入り口付近は恐ろしく混雑している。火照りきった熱が抜けていかない。

朋香や米子さん達は、今日の演奏について熱く語りながら前を歩いている。

僕はただ氷のように冷め切って、淡々と列を歩いていた。

「忠清くん、大丈夫？」

後ろから鈴さんが心配そうに声をかけてくる。ついさっき、僕がかけたのと同じ言葉で。

僕は振り返ることが出来ない。自分がとても情けない顔をしているように思えた。

「体でも壊しちゃったのかい？ 何だか苦しそうだよ？」

「大丈夫だってば！」

振り返りもせず、僕は無情な声で吐き捨ててしまった。

「た……忠清くん？」

鈴さんの声が震え、息を飲んだのが分かった。

「気にしないでいいから」

言葉に感情が籠もらない。僕は惨めで無意味な怨嗟に苛まれている。

鈴さんからの返事も無い。

「おい、あれ『ぽたらか』のメンバーじゃないか!？」

突然、列の後ろの方で男性が叫んだ。周囲の客が後ろを振り向きながら、にわかに騒ぎ始まる。「どこ？」「マジで？」という声がそこかしこから聞こえる。

朋香達も反射的に振り向いた。僕だけが頑なに前を向いていて、あまりに不自然だった。

居心地が悪い。鈴さんだって、気になって後ろを向いているだろうからきっと大丈夫だ。

僕は誤魔化しがてら、意を決して振り返ったのだが――。

――鈴さんは。じっと、僕を見ていた。

もの凄く心もとない顔で、周りの様子も気に掛けずに、漫然と、もごもご口を動かして。

非道く混乱している。焦って、困っている。

――僕のせいかな。

「ほら、やっぱりあそこにいるって!!」

がなる男性の姿が目に入った。興奮した様子で、入り口を指差している。同時に、別の客が入り口を指差した。

視線が逆流する。

本当にそこにメンバーがいたのかどうかは定かではないが、頭に血が上った客達は我先にと、堰を切ったかの如くに動き出した。

列の進むスピードが、一気に早まる。

人、人、人。熱を帯びた人の波が押し寄せてくる。

危険を感じた朋香達は、流れに逆らわず入り口へ向かったようだ。

鈴さんは、それにすら気づかない。

後ろから迫ってきた人達にぶつかられ、押され、はね飛ばされる。鈴さんはついに、人の波に飲み込まれてしまった。

「鈴さん！」

僕は発作的に、波に突っ込んで、手を伸ばした。

人を掻き分けて、体を押し込める。僕の指先に、小さな指先が触れる。その奥へ、さらに手を伸ばす。向こうも懸命に手を伸ばしてきて、僕の手の上に触れる。

記憶にある温もり。思い出の温かさ。僕は全力でその温度を引っ張る。

ひょっこりと銀髪が、跳ねるイルカの如く波の間から姿を現した。

「あわ、あわわわ……？」

パニックになった鈴さんは、必死に僕の腕にしがみついていた。

「鈴さん、絶対離さないで！」

「う、うん！」

荒い呼吸と鼓動が、腕から直に伝わってきた。

空が見えた。深海から突然海面に出たかのように、高く青く澄んで晴れ渡っている。

会場を出て、僕達は駐車場まで来ていた。背後を大勢の人間が扇状に散っていく。

結局、メンバーを見つけたと言うのは錯覚かデマだったのだろう。誰かが見つけたような気配は無いし、表の入り口にメンバーがいるのも不自然だ。

朋香達の姿は、ここからは見えなかった。人混みを避けて、別の方角に行ってしまったらしい。みんな、あの人の流れで怪我をしていないといいけど。

それにしても――右腕が重い。

「あの、鈴さん、もう大丈夫だから」

鈴さんは僕の腕に腕を絡みつけて、痛いぐらいにしっかりしがみついていた。

「鈴さーん。もう安心ですよー」

「……忠清くん」

「はい？」

ぶるぶる震えて。

「……………忠清くん」

「ここにいますよ」

「こ、こ、ここ、怖いよう」

ガチガチと歯を鳴らしている。パニック状態から、ショック状態に移行してしまったようだ。

「怖いよう……」

僕の腕にすがりついてくる。怯える少女そのものだ。

「す、鈴さん。え、えーと……」

困った。動けない。僕は懊悩した末に、鈴さんの頭の上に手を乗せた。

「……よしよし」

出来るだけ力を入れずに、その髪を撫でる。汗で湿っているせいか銀色は灰色にくすんでいて、手の平に髪が張りついてきた。

「ん……」

目を細めて鈴さんは、身を任せてきた。

親子二代で小さいころは鈴さんに頭を撫でられたものだったが、まさか自分が鈴さんの頭を撫でる日が来るとは思わなかった。悪い気分では無いけれど、大それたことをしている気分だ。

しばらく撫で続けていたら、鈴さんの体の震えも小さくなってきた。

「ほ、ほら。もう大丈夫でしょ？」

「……うん」

ゆっくりとしがみついた腕を離しながら、鈴さんは僕の顔を見上げる。

「ありがとう」

健気に潤んだ瞳が、銀色のカーテンの向こうで僕を見つめる。

——うん。矢張り。

「……可愛いなあ」

「え？」

鈴さんが、首を傾げた。

——やばい。心の声をそのまま口に出してしまった。

「あ、え、そ……その、鈴さんのその髪の毛とか、目がですね！」

何も誤魔化せていないどころか、律儀に本音を付け足してしまった。自分の顔が火照って紅潮していくのが分かる。汗を大量にかいているのできっと元から赤い。

そして、鈴さんも赤い。きっと、走りすぎたからだ。

しどろもどろの僕を見て、鈴さんの顔の緊張がほぐれていく。

やがて鈴さんはにっこり笑って。

「ありがとう、忠清くん」

小さく、そう言った。

色々と心が整理出来ていないけれど。これでいいや、と僕は思った。

あの黙示録的な日から数えて、何度目の土曜日になるだろうか。

僕は鈴さんの家に向かっていた。先週はライブで潰れてしまったけれど、書道教室は出来るだけ欠かさないようにしている。

気持ちのいい晴れが続いてたはずなのに、今日は朝から生憎の雨。

まあ、陽が出ていないのには慣れているから気にしない。僅かな距離、傘を差しながら濡れる町並みを観察するのも一興だ。

通りかかった家の庭からはみ出した紫陽花が、たっぷり水を含んでも垂れている。成長しすぎたミミズが道路の上で跳ねる。長靴を履いて大きな傘を持った小さな男の子が、水たまりをばしゃばしゃ音を立てて、破壊しながら進む。僕の近くの水たまりにいるアメンボは、きっとその音に怯えている。変わらない運命に沿われて生きている。

なかなか風流で風情があった。

これぐらい穏やかな気持ちで、落ち着いて鈴さんとも向かい合いたいものだ。

玄関先で僕を出迎えてくれた鈴さんは、何だか落ち着きが無かった。

「お、おはよう忠清くん。奥の部屋、準備出来てるからね」

僕の目を見てくれないし、よそよそしい。

今日は僕としか会う予定が無いはずなのに、朋香達と一緒に買った一式の服を着込んでいた。すっかり一張羅と化している。

「じめじめしてるし、その服暑いんじゃないの、鈴さん？」

靴を脱ぎながら、僕は訊いてみた。

「そ、そうだねえ。うん……暑いし、変だねえ」

鈴さんは恥ずかしそうに頭を掻いた後、少しだけ寂しそうな顔をする。

「どうかしたの？」

「な、何でも無いからね」

無理矢理に笑顔を作って、鈴さんは早足で廊下を進んで部屋に入っていった。

奇妙に思いながらも、僕も鈴さんの後を追う。

部屋に入って座布団に座り、半紙と筆を用意しながら、窓の外の竹林を眺める。

竹が雨を弾く音が耳に心地よい。ただし、雨に濡れた笹は疲弊したかの如くにぶらりと垂れている。さらさらという独特の音が聞こえないのは少し物足りない。

やがて鈴さんも僕の近くに座った――のだけど。

「それじゃ、始めようかねえ？」

微妙に距離を置いて座られていた。人が二人ほど、間に座れるほどの空間がある。

この狭い部屋では、遠すぎる距離だ。

「……鈴さん、その場所から、僕の筆遣い見えます？」

「えっ。あ、ああ……そうだね、全然見えないね」



弛緩したような笑顔で、鈴さんは正座のポーズのままずりずりと足を動かして、僕の隣に近づいてきた。そのまま、今度は僕にお尻を向けて座る。

「さ、さあ。始めていいからね」

「……………」

どうしたものか。

ずっともじもじされていると、僕にまで緊張が伝染してくる。

「鈴さん、僕、なんかしっちゃったかな」

「な、何のことだい？」

「いや、なんかさっきから変だから、鈴さん」

「……変かい？ 私、気持ち悪い？」

そう言いながら、鈴さんはずっとお尻を向けたままだ。

「気持ち悪いわけないでしょう」

「……本当かい？ 髪の毛の色とか、変じゃない？」

「今更何を言うんですか。とっても似合ってますよ」

ぴくん、と鈴さんの背中が伸びた。名前を呼ばれた猫のようだった。

「えへへ、そうかねえ」

今度は誉められた猫のようだった。嬉しそうだ。

前回不覚にも、堂々と「可愛い」と言ってしまった僕も、思い出して歯がゆくなってくる。

もう一度その言葉を言えば、もっと喜んでくれるのかもしれない。

そう思って口を開いてみたけれど、言えなかった。

それを簡単に言ってしまったら、気軽に伝えてしまったら、何かが壊れそうな、そんな気がしていた。

結局その日の鈴さんはずっとそんな調子で、書道の指南どころじゃなくなってしまった。

月曜日の放課後。

梅雨の時期もとっくに過ぎているのに、連日続く雨に辟易する。晴天続きのときも文句を言っていた気がするけど。

授業も終わって、後は帰る以外にやることは無い。

ここは山の奥の学校だけあって、校門から家までの距離が異様に長い。そもそも校舎を出て校門を出るまでが長い。外が雨だと思えば浮かべるだけで、帰るのも面倒になってしまう。

「忠清、ちょっと話があるんだけど」

空模様を見ながらもたもたしていた僕は、朋香に声をかけられた。

「改まって何だよ？ 桐春は帰ったのか？」

「もうとっくに帰ったよ。純さんと会うんじゃないかな」

朋香の態度も、鈴さんとは別の意味でよそよそしい。棘があるようにも見える。

「そっか。仲が良くてうらやましーことだな。で、何の話？」

「……ここじゃなんだから、外の踊り場まで行かない？」

「……いいけど」

「じゃ、いこ。すぐ終わらせるから」

朋香が言っているのは、屋外で各階を繋ぐ非常用階段のことだ。非常用と言っても、常時誰でも使うことが出来る。休み時間になるとリフレッシュしに来る生徒が意外という。

僕もたまに、ここで一人でぼーっと昼食を取ることがあった。

屋根もあるので、余程横殴りの雨でも無ければしのげるだろう。

朋香と一緒に廊下に出る。生徒はまだまばらにだが、校内に残っていた。非常用階段に向かおうとする生徒はいないようだ。

言われるがまま真っ直ぐ踊り場に出て、僕は朋香と二人きりになった。

最近は鈴さん達『楼女』と過ごすことが多かったせいか、同世代と二人きりになるのは珍しい気がする。

「――この前、鈴さんに抱きつかれたでしょ」

「は？」

いきなりだった。

「『ぼたらか』のライブのとき。終わった後、私達はぐれたでしょ？」

「あー……」

将棋倒しになった客から、鈴さんを助けだしたときのことが。あの後すぐに朋香達とは合流出来て、事なきを得た。

「あのときは色々あったからなー」

しみじみ僕が言うと、朋香が気色ばんだ顔をした。

「やっぱり――本当は見てたの、私。遠かったから、他のみんなは気づかなかったみたいだけど……ぴったり忠清の腕にしがみついている鈴さんと、忠清が愛しそうに鈴さんの頭を撫でてる所」

「え……ああ、いや、それは――」

それは、鈴さんが恐怖でショック状態になっていただけだ。確かにあのときの鈴さんの表情は可愛らしく感じられたけど。

その前に、ちょっとショックな言葉を聞いてしまった分、余計に。

「別に、朋香が気にするほどのことじゃないよ」

「ふうん、私は蚊帳の外ってわけ？」

朋香の声が低くなる。感情を押し殺している。

何を怒ってるんだらうか。

「鈴さんだから――鈴さんだったから。私も、気にしてなかったんだけど、さ……」

沈鬱な表情で、言葉を途切れさせる。

「忠清は気づいてないかも、しれないけどさ……」

何を言おうとしているんだらう。何に苦悩しているんだらう。

「鈴さんは、忠清のこと、好きだよ」

雨の音に、曖昧に誤魔化されること無く。

文節ごとに、きっちりと僕の耳はそれを捉えた。

「好き、って……？」

朋香は、どういう意味で言っているんだろう。

「僕が鈴さんに実の孫のように育てられたから、それが……」

「そんなんじゃくて！」

朋香は悲痛そうに叫ぶ。

「そんなんじゃくて——女の子として。鈴さんはきっと、忠清のことを好きになってるんだと思う」

ただの女の子。小さくて弱い。それは確かに僕も、何度か鈴さんに感じてしまった感覚だが。

「冗談——ではないよね」

「だったらいいよね」

ふて腐れるように朋香は笑む。

この短時間で、朋香の黒い部分を、矢継ぎ早に見せられている気分だった。

「変な話だけどね。鈴さんだって女の子だもん。あんなに分かりやすいと、私だって気づくよ。

鈴さん、忠清のことばかり見てるし」

「それは、元々俺が鈴さんの世話とかよくしてたから……」

「そういう目じゃないもん、あれは」

朋香が僕の言葉を遮る。

「昨日さ。私、鈴さんに誘われて、買い物に付き合わされたんだ」

「と、朋香が？ 珍しいな」

いつもなら、買い物を手伝うのは僕の役目なのに、何で朋香に？

「新しい服が欲しいんだって。私や忠清から見て可愛いと思える服がいい、ってお願いされた。忠清、鈴さんに何か言った？ 今の服に飽きたとか何とか」

「いや……部屋の中は蒸すし、その服じゃ暑いだろうからやめた方が、って言った覚えはあるけど」

「……それだね。ひどいなあ」

朋香は、大きく嘆息した。呆れているようだ。

「鈴さん、いつもあの服着てたでしょ。忠清と外に出るときは」

「うん。宅老所の知り合いに、自慢したいんだろうと思ってたんだけど」

——違うのか？ 友人に見せたいんじゃないのか。

「違うよ。鈴さん、忠清がいつ言ってくれた服を、忠清に見てて欲しかったんだよ。分かんないよ、それぐらい」

「僕に、見せたいから……？」

愕然とした。

——忠清くんと選んだものだから。

いつだったか、鈴さんはそう言っていたか。思い出してみれば、えつさんや米子さんと会ったときも、鈴さんが自分の服装について自慢したりすることは一度も無かった。

鈴さんは、相手のことは良く見ていたのに。

ただ、僕に見せておきたいと言うだけで。

「鈴さん、自分じゃまだ服とかセンスに自信無いんだよ。だから、私が選んであげた服なら忠清も好きなんだろうって、そう思ってずっとあの服着てたの。そんな人に向かって『止めた方がいい』は無いよね」

「う……」

悪気は無い。そんなつもりじゃない。無いけど、鈴さんにとってそれは――。

――それは？　どんな気持ちだ？

「新しく、忠清に気に入ってもらえる服を探したかったんだと思うよ。仕方なく付き合っただけだけどさ……いつか自分で選びたいねえ、朋香ちゃん来ると安心だねえって、にこにこ笑ってるんだもん」

笑ってるんだもん。朋香は、なぜか二回呟いた。

「……」

「忠清だって分かってると思うけど。『楼女』とかって世間は騒いでるし、『ぼたらか』みたいなバンドも出てきたけど……鈴さん達は、本当は女の子じゃない。中身はお婆ちゃん達なんだよ。見た目は若くても、お婆ちゃんなんだよ」

議論をするような口ぶりで、朋香は目が血走っている。

「そんなこと、僕は……」

僕はそう思わない――なんて言い切れるのだろうか。

鈴さんの本心も、本人に聞いてみないと分からない。僕は本当の所、相手をどう見ているんだろう。

あの日の、鈴さんの言葉を。思い出に浸る、鈴さんの陶然とした顔を。

――あのとき僕は、なぜ辛かったんだろう。

「私だって見て欲しいよ」

「朋香……？」

「私の方が、忠清に近いよ。私の方が、忠清のこと、ずっとずっと――鈴さんよりも前から」

呟きながら、朋香は泣いていた。

「……………」

また何も言えない。こんなんばっかだ。

「……いいよ、もう。忠清なんか、お婆ちゃん達とずっと一緒に生きてればいいよ」

ぼろぼろと涙を流しながら、朋香は歩きだす。

「おい、朋香?!」

何度呼び止めても、朋香は戻ってこなかった。

雨がやんでいた。

気持ちはちっとも晴れ渡っていないのに。

濡れながら、混乱した頭を冷やしながら帰ろうと思ったのに。

矢張り、僕は間が悪い。

翌日からは、学校も土曜を待つことも憂鬱になってしまった。

教室に入っても、朋香とは会話が無い。桐春まで学校を休んでいた。

僕には、この二人以外に心置きなく話せるクラスメイトはいない。

一人だけの昼休み、もそもそと食事しながら、ただ一日の終わりを待望するだけの無為な時間

。

静穏な場所が好きとは言え、こんな状況に追いやられるとさすがに友達が少ない虚しさを実感する。同級生を大切にするように、という鈴さんの言葉を思い知った。

朋香は女友達と平気な顔で弁当を食べている。少女だろうと『楼女』だろうと、女子のコミュニケーション能力は目を見張るものがある。

――静かな時間が続くと、無駄な思慮に脳のカロリーを使ってしまう。

僕は誰と話すべきなのだろうか。

朋香か。鈴さんか。

迷いなく純さんと交際を始めた、桐春か。

若さと恋愛を全力で享受しようとした、純さんか。

それとも、他の鈴さんの友人の誰か――米子さんや、えつさんか。

何を話せばいいのかも分からないが、話してどうするのかも決めていない。

入学する高校すら、その場しのぎのなあなあで決めてきた僕だ。大きな決断を先送りにする、日本人気質な自分の不甲斐なさが呪わしい。

――考えれば考えるほど袋小路にハマっていく。

売店で売っていた税込み百円の特大カフェオレで、菓子パン最後の一口を一気に流し込む。

午後の授業開始まで、後五分ほど。予鈴のチャイムがもう少しで鳴るかな、と思っていたら、それより先に僕のポケットの仲の携帯電話が震えた。

メールのようだ。急ぎの用なら授業が始まる前にチェックして返信しておこう。

取り出して開いてみると、送り主は桐春だった。

件名は無い。

本文だけがシンプルに、残酷に僕の目に飛び込んできた。

『昨日純さんが死んだ。明日告別式の予定』

読解に、非道く時間がかかった。変換ミスかと思った。

言葉の羅列を、情報を脳が受け取らない。

悪戯にしてはふざけすぎているし、報告にしても空疎に思えた。

叙情たっぷりに送られても困る内容だけど――と僕は頭の中のどこかが冷静で、そのせいでむしろ自分の心情が激しく解離しているのが分かった。

猛烈に息苦しくなった。

きっと意味など無い焦慮に駆られて、僕は机から立ち上がる。

朋香も携帯電話片手に、悲壮な顔でこちらを見ていた。

無言のままタクシーに揺られて、僕と朋香は純さんの家に到着した。学校は早退させてもらった。

ここに来たのは、僕も今日が初めてだ。鈴さんとの買い物帰りに会ったこともあり、純さんの家にはあえて訪問していなかったのだ。

純さんの自宅はアパートだった。壁も鉄筋もぼろぼろで、相当に経年劣化しているのが分かる。ささくれて見窄らしいその印象は、若返った純さんの瑞々しいイメージとはかけ離れていた。二階の角部屋が純さんの部屋だ。

玄関でベルを鳴らすと、見知らぬ女性に出迎えられた。中途半端にパーマがかかった髪が肩まで伸びた、恰幅のいい女性だった。四十代後半ぐらいに見えるが大分疲れた様子なので、実際はもっと若いかもしれない。

どこか、若返る前の純さんに似ていた。

「今日はお忙しい所を、母のために――」

深々と頭を下げられて、僕は畏まってしまう。

話にだけ聞いていた、純さんの娘さんのようだった。

「……ご愁傷様です」

自分で発してみると、妙に現実味が無い言葉だった。映画やドラマでしか聞いたことが無い、ただの儀礼としての硬い挨拶。

朋香も僕の真似をして「ご愁傷様です」と抑揚無く告げて、所在無げに頭を何度も下げている。

靴はいくつも並んでいなかった。まだ報せが行き届いていないのだろう。

家の中は狭い。入ってすぐの場所が、乱雑に散らかったキッチン。その奥に、八畳ほどの和室が二部屋並んでいるだけ。純さんと娘さんだけの、質素な生活だ。親権を奪われたお孫さんは、今は遠くに住んでいるのだったか。片方の部屋に目をやる。

布団に寝かされた、純さんの姿が見えた。

顔にかかった白い布の隙間から覗く若々しい肌と、染められた艶のある髪。

その前で、うづくまるように桐春が正座していた。

びくりとも動かない。部屋には、他に誰もいない。

生きているものが何も無いように見える。モノトーンの世界の息をしない住人。

寝かされた人形。座っているのも人形。ここは人形の家だ。

異物である僕達が触れたらその脆い世界観を壊してしまうような気がして、中に進むのが躊躇われる。

けれど立ち尽くしているわけにもいかない。

横で絶句している朋香の手を引いて、僕は部屋に入った。桐春の隣に座って、純さんの遺体を見つめる。亡くなった知人をこの目で見るとは、小学校低学年のとき、実の祖母の葬儀以来だった。

あのときは鈴さんも弔問に訪れたはずだ。こんなに若い人の遺体を前にするのは、初めてだ。――若い人、では無いか。

「桐春くん……」

消え入りそうな声で、朋香が桐春に語りかけていた。

「おう」

俯いた桐春が、少しだけ顔を上げた。目の下が真っ黒だ。寝ていないのか、泣きはらしたのか。あるいはその両方か。

「お前、ずっと一緒にいたのか？」

僕の声は甲高かった。憐憫と動揺に、声量のコントロールを奪われている。

「ああ。亡くなった瞬間から、ずっと。離れたらどっかに行っちゃうんじゃないか、って怖くてさ」

話しながら、桐春は純さんから目を離さない。

「純さん……何で亡くなったんだ？ お前に訊くのも、変な話だけど……」

「急性心不全。俺の部屋で、居眠りしてたときにな。救急車呼んで、病院着いたときには、もう駄目だった」

朋香が、早くも目頭を抑えて嗚咽を漏らす。

ライブ会場での朋香と純さんは、結構気が合っていた。若返った純さんと朋香は、世界の受け入れ方に共感出来るものがあつたのかもしれない。

「忠清。俺、結構ショックなんだよ。彼女は取っ替え引っ替えしてきたけどさ。今までで一番、純さんが放っておけねータイプだった。何十歳も年上なのに、変な話だけどさーずっと側にいてやんなきゃなーってタイプは、初めてだったんだよ」

ふとこちらを見た桐春が、茫漠と僕の視線を捉える。

「俺の考え、変だと思うか？」

「まともだよ」

即答する。

「そうか。安心した。お前ならそう言ってくれると思ってた。さすが忠清だな」

「いやー僕も普通だよ」

漠然と。分かりきった計算式の回答を、確認するだけのようやりとり。

朋香は何も言わなかった。

「……顔、見てやってくれよ。いいよね？」

気づくと、純さんの娘さんも部屋に入ってきていた。

無言で頷き、全て桐春に任せている。面識は前からあつたんだろう。恋人の娘が自分の母親と同じぐらいの年齢、と言うのも不思議な話だ。

桐春は純さんの顔にかけられた布を、丁寧な仕草で取った。

瞼を閉じた純さんのほっそりとした顔。青くなってきた薄い唇。

綺麗だった。目が離せなくなった。

枕元に、湯呑み茶碗と綿棒がある。僕と朋香はおもむろに綿棒を手にとって、湯呑み茶碗の水に浸す。それを順番に純さんの唇に当てて、潤してやった。

末期の水。本来は死に立ち会った親族が行うことだが、桐春も純さんの娘さんも、僕達がそう

することを許した。

「純さん。忠清と朋香ちゃん、来てくれたぜ」

愛しそうに、桐春が囁く。

それを聞いた朋香が、耐えられずぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「純さん、会いに来たよ……また、ライブ一緒に行きたかった。今度泊まりに来てくれるって言うてくれたよね。朋香ちゃんは友達だって言うてくれたよね」

呻き、朋香は何度もしゃくりあげる。

解離した僕はそれをどこか遠くの情景のように感じながら、朋香の手を強く握ってやった。朋香も握り返してくる。多分、僕の方が助けを求めていたんだと思う。

ゆらゆらたゆたう僕の意識を呼び戻したのは、来客を知らせるベルの音だった。

純さんの娘さんが、迎えに出ていく。

空気が流れが変わり、僕は機械的に振り返る。

玄関に立っていたのは、鈴さんだった。桐春が連絡したのだろう。

僕達の姿を認めて、ぺこりと一礼しながら部屋に入ってくる。僕と朋香の後ろに腰を下ろした鈴さんは、泣きさざめいている朋香の頭に手を置き、優しく撫でた。

「鈴さん……」

すがるように呻く朋香。

寂しそうに、けれども狼狽すること無く、鈴さんは微笑む。

いつもはおっとりとしている鈴さんが、その場で一番気丈に振る舞っているように見えた。

朋香を撫でながら、鈴さんは純さんの穏やかな顔を見つめる。哀惜に満ちた瞳で、まばたきもせずに。

「純ちゃんも、逝ってしまったんだねえ……」

呟いて、静かに深く息を吐く。

しばらく瞳を閉じたかと思うと、鈴さんは泰然とした表情で桐春に向き直った。

「桐春くん。気を確かに持つんだよ。純ちゃんの娘さんもこれから大変になるから、貴方も手伝ってあげないとね」

「……勿論っすよ」

桐春の固い表情が、幾分か和らぐ。

「偉いね、桐春くん」

鈴さんは心強そうに、にっこり笑う。慣れた様子だった。

僕は思い出す。この人はかつて最も愛したはずの相手をこうやって見送ったのだ。まだまだ女としても先が長い、本当の意味で若かった頃に。それからもきっと、何人もの相手を見送り続けているのだ。

例えば、僕も覚えていない祖母を。

それに慣れることは、幸せなことなんだろうか？ 僕は、たった一人でもこんなに苦しい。

「忠清くん、朋香ちゃん。貴方達も悲しいだろうけど、お友達を見守って、助けてあげるんだよ。私もこれから手伝うからね」

優しくも厳しい目だった。強固に僕の心が、現実には繋ぎ止められる。



「はい、鈴さん。純さんは僕にとっても、朋香にとっても友達ですから」

僕が答えると、朋香も泣きながら頷く。

鈴さんがまたにっこり笑う。

「良かったねえ。純ちゃんきっと、幸せに思うね」

鈴さんが、純さんの顔を覗き込んで語りかける。

その笑顔が一瞬だけ翳るのを、僕ははっきりと見てしまった。

そして、とても小さい声で。

「……これが、『みしるし』なんだねえ」

鈴さんは辛そうに呟いた。

僕の大切な友人の一人はこうして、眠りについてしまったのだった。

純さんの葬儀から数日が過ぎた。暗澹として茫漠に時は流れる。

桐春は何とか学校に出てきている。以前と変わらない様子を装ってはいるが、どこかで笑顔になりきれしていない空虚さが感じられた。

どたばたしていたせいで鈴さんの家にも行けず、朋香も相変わらず。何重もの苦い変化と縛りが、僕の生活を息苦しいものにしていく。

それでも僕の周囲で変化が留まってくれていたのなら、まだ良かった。

その訃報は、ある日の夕方のニュースで流れた。

『デビュー直後の人気ロックバンドのドラムスが心筋梗塞で死亡』

無常なテロップ。テレビ画面に映される、アヤさんの剛毅な笑顔。

『楼女』としての、若々しい肌。赤く染まった長い髪。

「アヤこと日高綾子さんは、今年四月に起きたA市の発光事件によって若返った女性達の一人でした。日高さんはお孫さんの薦めで自分のような女性達を誘いロックバンドを結成し、人気を集めていました――」

力強くドラムと和太鼓を並べて叩いている動画が、ナレーションと同時に映し出される。ネットで先行配信されたときのものらしい。

次に、出棺の映像が映し出された。こちらは今日の映像のようだ。セーラー服の女の子が、止めどない涙を流しながら、茫然とアヤさんの写真を持っている。以前会場で見た、アヤさんの孫だろう。

一緒に見ていた母が、

「最近、こういう人多いわね」

と不穏なことを呟いた。僕は首を傾げる。

「どういうこと？ 葬式が続いてるってこと？」

「そうねえ。忠清が行った宅老所の純さんもそうだけど、若返った人達、結構亡くなってるみたいよ」

「……本当なの、それ」

初耳だった。僕の周囲の死者は、今のところ純さんだけだ。

「近所の奥さん達と話していると、噂は聞こえてくるわよ。事故とか殺人でも無ければ、一般人が死んだニュースなんてやらないから、知らなかったのかもね。みんな理由はバラバラみたいだしね」

矢張り若くなるだけじゃなかったのかしらね――。

母は、どこか嫉妬するような口調で囁いた。

アヤさんの訃報が引き金となったのだろう。

母親の言う通り、死亡した『楼女』の数が報道より多いことが判明し、現実でもネット上でも騒がれ出した。

あの日以来の『楼女』への憶測・中傷が爆発しかけたところに、政府は公式な会見を開いた。

死亡した楼女達を見た医師達による見解は、『老衰』。

突発的な疾病によるものではなく、年齢相応のものである、と言うのが政府の発表だったのである。

確かに、純さんもアヤさんも、共に心臓が弱かった。老化の名残としてそれらの症状があったために、若返りと関係無く突然死が訪れたと考えられた。

だが。死亡者は必ずしも、老化の名残と直接の死因が関連しているわけではなかった。

司法解剖も多く行われたが、それら亡くなった『楼女』達はまるでいきなり元の年齢に戻ったかの如く、代謝や回復、免疫機能といった能力が衰えていたようだ。

一一見た目は若いままなのに。命だけが終わりを告げられる。

動揺と混乱が、A市内に一気に広まっていた。

若返りに、意味など無かったのだ、と誰かが口にした。

本当にそうなんだろうか？

何が起ころうと、土曜日は変わらずやってくる。

約束もしていないけれど、僕は鈴さんの家に向かうことにした。こんなときだからこそ、いつも通りに過ごしておきたい。

平常心は大切だ。ただし天気は不安定だ。

まだ雨は降っていないが、空模様が怪しい。大降りになったかと思うと晴れ渡る、異常気象が人々の不安に拍車をかける。

自分の体の状態に不安を感じた『楼女』の中には、自ら政府機関に出向した者も少なくないそうだ。町医者で対応出来るレベルの問題では無いし、そうせざるを得ないのかもしれない。国家にも大した期待は出来ないだろうけれど。

宅老所のメンバーは、皆自宅にいた。終の住処を決められる人間は幸福だと思う。

純さんは、最後に桐春を得られただけ幸せだった。そう信じたい。

妙に長く感じる道程を経て、鈴さんの家にたどり着いた。

前もって笑顔を作ってドアノブを握ったが、開かない。鍵がかかっている。この時間に施錠されているのは珍しい。

チャイムを鳴らしてしばらく待ってみるが、反応は無い。何度押しても同じだった。

「鈴さーん？」

大声で呼んでみる。

凄烈に襲い来る嫌な予感。血の気が引いていくのが自覚出来る。

僕は家の裏に回ってみることにした。

竹林を突っ切って、鈴さんの部屋の窓を調べる。すんなりと開いた。

無理をすればここから入れる。不審者として通報される覚悟で、僕は窓枠に足をかけて中に侵入することにした。

思い切って飛び込み、畳に着地する。靴を掃いたままだったので、くっきり足跡が残ってしまった。

「ごめん鈴さん、土足で上がっちゃったよ」

反射的に謝罪するが、許しを請うべき家の主の気配は無い。

静謐に、背後の竹林がさらさらと揺れる。子どものころから聞き慣れた、落ちつく笹の葉の音。

「鈴さん、いないの？ いたら返事してよ」

懇願する。返事は無い。

廊下、トイレ、押し入れ、寝室。一つ一つ回ってみたけど、鈴さんはいない。どの部屋も整理されている。ガスの元栓が閉められている。

この部屋には戻る気配が無い。

この部屋には戻る意思が無い。

それでも最後にもう一度だけ居間を見ようと戻ってきて、僕は机の下に何かが置かれているのを見つけた。

僕達と一緒に選んだ――鈴さんが僕に見せたがっていた一式の服が、畳まれて、綺麗に。

「何でだよ……」

――なんで。鈴さんが、いなくなるんだ。

僕は町中を必死に探し回った。一緒に行ったスーパー、宅老所、近所に一つしか無いなぜか二十四時間営業じゃないコンビニ、今どき百円税込みでラーメンを出す店、ライブをやったA市民会館も。

結局、鈴さんは見つからなかった。痕跡すら僕には見つけられなかった。

とぼとぼと家に帰ってきた僕は手当たり次第に知人に電話したけれど、米子さんも、えつさんも、朋香も、桐春も、誰も鈴さんの居場所を知らなかった。鈴さんから連絡を受けた人もいない。

手紙もメッセージも残さずに。忽然と鈴さんは消えたのだ。

リビングに座ったまま、僕はどうするべきか悩み続けていた。

「ごめんね、忠清」

心配して家まで来てくれた朋香が、げっそりとした顔で述べる。

「何で朋香が謝るんだよ？」

「私、純さんが死んだ後、鈴さんに言っちゃったんだ――ずっと前から、私は忠清が好きだったって」

「……………」

――何も、気づけなかった。鈴さんもそんな様子は見せなかった。

純さんと桐春は死別してなお、気持ちが繋がっていた。その様を僕と一緒に見ていた朋香にも、考える所があったのだろう。

――あんな恋愛を見せつけられれば、僕だって気持ちが焦る。

他人事のように考える自分に、嫌悪感が沸いた。

「鈴さん、にこにこ笑って、そうだったのかい、って――私のせいで鈴さん、居場所無くしちゃったのかも……」

「関係無いよ。みんな混乱してるけど、鈴さんがいなくなるなんて誰も思ってもいなかったんだから」

「……そうかな」

本音では、関係が無いとは言い切れない。

純さんが死んで、ファンだったアヤさんが死んで、鈴さんがいなくなって。ここでそうだと言ってしまったら、朋香の脆弱な心は持たないだろう。

これ以上誰かが心を砕かなくていい。最近のこの町は希望と絶望とが連続で、代わる代わるやって来すぎる。それも軽い形で。

今は、鈴さんを見つけることの方が大事だ。

米子さん達も探してくれると言ってくれたが、連絡は無い。警察にも電話してみたが、黙って

任せておく気にはなれなかった。

かといって、手がかりは何一つ無いと言うのが現状だ。独り身の鈴さんを知る友人は限られているし、親類の連絡先も僕は知らない。

——あの人だ。こんなに孤独だったなんて。子どものころからずっと、僕は何を見てきたのか。

「本当に、こんな状況じゃ何も予想出来ないね……」

朋香は憔悴しきっている。

うん、と頷いた僕の心に、何かが引っかかった。

予想——予想出来ない状況。未来の情報。

「そうか——冴えてるよ朋香！」

「へ？ 何が？」

怪訝そうに、朋香が僕の顔を窺う。

「一人だけ、頼れるかもしれない人がいる！」

懊悩した末、僕が思い出したのはある人物だった。本当に一縷の、最後の希望だ。

現状を予見していたあの人ぐらいしか、僕には残されていなかった。

——運命の数は変えられない。

僕の脳内でリフレインする。

若返りながら若返りを嫌悪していた、あの予言者の言葉が。

「ふん、やっと来たか忠清」

開口一番、祈祷師の奈恵さんは言い放った。

玄関先で腕組みしながら、仁王立ちで僕を見下ろしている。黒レースに身を包んだその静かなる威容は相変わらずの死神っぷり。迫力と眼力が凄まじい。

いつもはたじろいで物怖じしてしまう僕だが、今回ばかりはそうは行かない。

「奈恵さん、お久しぶりです。今日は折り入ってお願いがあるんですが……」

「上がって、奥の部屋で待ってな」

奈恵さんが、僕の言葉を遮った。

「わしにも準備があるからね。まあ大したもんじゃないが」

「準備、ですか……？」

「訊きたいんだろう、鈴のこと」

無愛想に、流し目で奈恵さんは告げる。

——この人は、何もかもお見通しなのか。

「……よろしくお願いします」

僕が頭を下げると、菜恵さんは小さく頷いて近くの部屋に入っていった。開いた襖から、ちらりと箆笥と布団の端が見えた。寢室のようだ。

家の中にいるはずの、奈恵さんの旦那さんには未だお目にかかれていない。なぜ姿を見せてくれないのだろう。

いや、奈恵さんが見せてくれないのか。

どうでもいいことを考えるのは止めにして、僕は言われた通りにあの奥の部屋へ入った。

奇怪な祭壇。クーラーも無いのにひんやりとしている、暗い和室。

藁にもすがる思いでここにやってきたが、自分が神頼みに走るとは僕も予想外だ。

黙っていると、底冷えがしてくるような気がしてきた。季節外れにも程がある。僕はぼんやりと祭壇を眺めた。おもむろに、顔を近づけてみる。

神棚——宮形の扉が少し開いていた。

中に絵馬のような物が見える。あれは何の絵だろう。人の顔を持つ牛のような。

まるで、ギリシャ神話に出てくる怪物のようで——。

「待たせたね」

「！」

襖ががらりと開き、菜恵さんが入ってきた。

僕は慌てて座布団に座り、姿勢を正して菜恵さんを見上げた——と同時に、面食らってしまった。

「な……奈恵さん、その格好は?!」

新雪のように真っ白な小袖、灼熱の炎のように真っ赤な緋袴。

菜恵さんは、巫女装束に身を包んでいた。

「あー。忠清に見せるのは始めてだったか。祈祷や占いをやるときはいつもこの格好さ。幾分久しぶりだけどね」

「なんと言うか、め、目の毒と言うか……」

奈恵さんの着こなしは、大胆と言うか雑でだらしない。普段着のように胸元がはだけていて、豊満な胸がはみ出ている。どうやら白衣の下には何も着けていないようだ。

――ひょっとして、緋袴の下も履いてないのか？

うっかり僕は、ごくりと息を飲んでしまった。

「……なんだ、忠清」

「い、いえ、何でもありません。巫女装束は綺麗だなあと一般男性の平均的な意見を申し上げただけです」

「そうか。ちなみに下着は、上下とも着けてないぞ」

「……………そうですか」

見事に見透かされていた。

僕がどうでもいい自責の念に苛まれて頭を垂れている間に、奈恵さんは祭壇に向かって正座した。

一段と部屋の気温が下がる。

ブツブツと、またしても聞き取れない言葉を奈恵さんは呟き出した。

鈴さんが呟けば呟くほど緊張感が奈恵さんの体から放射状に放たれて、部屋に充満していく気がした。

奈恵さんの背筋が、凜々しく張る。背中ラインがくっきりと見えて、細い項が薄暗闇に晒される。

僕はまた邪念を見抜かれるような気がして、見ないようにした。

「さて、と。鈴の話だったね。行方が分からないんだろう？」

ほんの少し首を曲げて、こちらに視線を向けてくる奈恵さん。表情は読めない。

「今日僕が行ったときには、もう家にいなかったのだから……何日も前から、家にはいなかったんだと思います」

「ふん。『みしるし』を忘れちゃいけない、と言っておいたのにね――『運命の数』からは逃れられないと、そう忠告したはずだよ」

忌まわしように奈恵さんが呻く。

「『運命の数』って、『寿命』のことだったんですね。見た目が若いのに寿命だけがそのまま襲ってくるなんて、予想もしてませんでした」

「だから、誤魔化しだと言っただろう。外見が変わろうと、変わらないものは変わらない。みしるしがある限り、その者は『運命の数』に縛られておる。楽しんではいけない。喜んではいけない。やってくるものからは逃げられない」

「そんなの、残酷すぎますよ……」

それでは、何のための若返りなのか。

何のために、新たな人生を『楼女』達は選択したのか。

「残酷なのさ、神さんの気紛れは。生贄だけを求めて、秩序の可能性を見ているだけ。数多に重



なる那由多の世界で繰り返された、最良の結果だけを一つの世界にお纏めする。ここは地の獄の一つに過ぎない。それが阿傍の神のなさりようさ」

菜恵さんの言葉は抽象的すぎて、僕には理解出来ない。けれど僕が聞いたことの無いその神様は、決して温情ある存在では無いようだ。

「その試しからは、わしだって逃げられん。だから以前と変わらず生活しておる。何も求めちゃおらんわい」

「そうするしか無いって言うんですか。それが幸せだって言うんですか」

「少なくとも、苦しまずにはすむじやろう。あがいた所で意味など無い。わしは早くからそれを知っておったが、誰にも言わなんだ。わしは――」

――わしは皆を止められなかった。

奈恵さんは、煩悶するような声で囁いた。

僕はこの人の祈祷や予言の力を、信じきっていたわけではない。だからその辛さを想像したことは無かった。『楼女』達がどんな運命を背負っているかを、自分だけが知っていたとしたら。僕だって、告げられなかつたらう。

真実を突きつけることなんて、出来なかつたらう。

鈴さんも、えつさんも、米子さんも、純さんも、若返ったことで失った喜びや新たな幸福を得ていた。それを奪う勇氣は、僕には無い。

「優しいんですね、奈恵さんも」

「はん――弱いだけさわしは。真実を告げるのが仕事なのに、告げることを厭うてしまった。もう遅いがな。運命の数の正体に気づいてしまった者達の顔がそこら中に溢れておる。哀れで見られん.....わしにほんのちょっとの未来を教えてくれる神さんは、教えてくれる以上のことはしてくれんからね.....」

唱えるように、奈恵さんは呻く。

「鈴さんは、自分がどうなるか気づいてしまったから――だから、いなくなってしまったんでしょうか？」

「じゃろうな.....鈴はな。今までずっと一人で生きてきた。共に生きようと誓った者を失って、その上でずっと一人でな」

奈恵さんが、横目で僕を睨む。

「その気持ちが分かるか、忠清？」

数十年分の孤独の重さ。未熟者の僕なんかには、分かるわけが無かったけれど。

「これから一緒に、分かってあげようとする事は出来ます。陳腐な言い方ですけど」

「それがどれだけ、短い時間になろうともか？ それに意味があると言えるか」

「時間なんて最初からどうでもいいんです。だって――相手は鈴さんですから」

理由にならない理由を、僕は告げる。

軽く笑って、奈恵さんは「いいだろう」と深く頷いた。

「鈴は今、本来行くべきだった場所におる。『本人にとってのあるべき場所』にな。そこは――」

——そこは。

奈恵さんが告げた具体的な場所は、僕の予想には全く無かった所だった。

鈴さんが『楼女』になっていなかったら、簡単に発想出来たはずの場所。

家でもなく、宅老所でもなく。

「そこしか無かったのか、鈴さん……」

その場所が悪いのではない。鈴さんは、まだ行かなくて良かったはずなのだ。若返った今なら、なおさらに。

「迎えにいかなくちゃ。ありがとうございます、奈恵さん」

正座のまま、僕は奈恵さんの背中に頭を下げる。

「礼はいい。じゃが、覚えておけよ忠清。この報せも、神さんの気紛れに過ぎないということ。鈴の心を、簡単に動かせると思ってはならん。お前にとっての切り札を持っていけ」

「切り札？ そんな都合の良い物無いですよ」

「お前、ずっと黙って鈴を見て、過ごしていたわけじゃあるまい？」

ニヤリ、と奈恵さんの亀裂のような笑みが見えた。

「ひょっとして、あれが……？」

一応、ある。鈴さんのために用意してあったものが。

あれが、僕の想いの現れだと言えるのなら、だけど。

「さあ、もう行け忠清。何があろうとお前が変わらないのなら、受け入れてやっておくれ。あれは、わしの友人なんじゃ」

奈恵さんは、祈るように。

「今からでも、鈴が幸せになって何が悪いかね……」

あるいは呪うように呻く。

「分かりました。行ってきます、奈恵さん」

意を決し、僕は立ち上がる。

そのまま部屋を出ようとした僕は、つい振り返って奈恵さんを見下ろしてしまった。

「奈恵さん。もう一つだけ訊いておきたいことがあるんですけど」

「ん？」

奈恵さんが、不思議そうに顔を上げてきた。

「今の奈恵さん、相当可愛いです。奈恵さんがそのまま生活してても、旦那さんは毎日が楽しくなってますよ。絶対に。僕なら自慢しますもん」

「な……………何を言うか」

僕を見上げる奈恵さんの顔が、みるみる朱に染まっていった。

「ひょっとして菜恵さん、恥ずかしいんじゃないですか？ 自分の可愛さを自慢する旦那さんが、しゃしゃり出てくるのが」

この質問は、奈恵さんと言えど予想外だったようだ。

「ばっ、バカもの！ 早く出ていけ!!」

腕を振り回しながら菜恵さんが叫ぶ。

凶星だったか。

祈祷と占いの才能があっても、僕の言葉は予想出来なかったのか。  
僕は慌てて部屋を出ながら、和んだ。

朝からバスにゆらゆら揺られること一時間。A市唯一の動物園を過ぎ、蛇行するヤマカガシのような山道を通って、僕はバス停に降り立った。

山のど真ん中、深緑に包まれたバス停からの景観は、片田舎のA市に住む僕から見ても、美しい。

――だからこそ、住みたいとは思えない。

田舎暮らしに憧れるのは自由だけど、人が少なく自然が多いことにはそれなりの理由があるということを忘れてはいけないと思う。

とてつもなく自然が美しいA市は、就職率が低く離職率が高い、故に人がとてつもなく死ぬ町でもある。ポジティブになりたくても、目の前にある統計から必死に目を背けて生きる苦しみを、都会の人間は知って欲しい。まったく。

――どうも緊張のあまり、心がささくれているようだ。

田圃と農家ばかりの長閑な田舎道を、僕は淡々と踏みしめながら歩いた。背負ったセカンドバッグが重い。

木陰に入って、うだるような日射しから身を守りながら進む。

やがて、風景からはちょっと浮いている大きな建物が見えてきた。煉瓦造りのマンションのようだが、違う。

『軽費老人ホーム 大森苑』。

アーチのような入り口の門に、そう記されている。

軽費老人ホームとはケアハウスなどとも呼ばれる、主に介護レベルが低い高齢者の食事や生活の面倒を見る施設だ。

――そう。鈴さんが向かった場所は、この老人ホームだった。

菜恵さんが占いの中で、口にした場所もここだ。

ぶっちゃけると、警察も昨日の夜、あっさりこの場所を捜し当てていた。鈴さんは、法律上は高齢者であることには変わりはない。市町村に入居を申し込み、審査さえ通れば老人ホームに入ることは出来る。

しかし若返る前の鈴さんは、老人ホームに入る事無く、一人で僕の家族と助けあいながら生活出来ることを喜んでいて。若返って『楼女』になってからは、健康に左右されず生活出来ていた。

まさか今更、老人ホームに入ることを望むなんて。誰が考えるだろう。

――誰が考えつくものか。

菜恵さんの言葉を聞いていなければ、覚悟を持ってここに来ることは出来なかつただろう。

門をくぐり、施設の玄関を通る。

中はとても綺麗だった。病院のようなイメージを持っていたけど、それよりずっと静かで落ち着きがある。常時の介護が必要な高齢者が入居する『特別養護老人ホーム』ならば、また雰囲気

が違うのかもしれない。

入ってすぐの場所がホールで、丸テーブルや座り心地の良さそうなソファが並んでいる。

そこに座っている全ての高齢者が、男性だ。皆、ゆったりとソファに座り込んで安穩とテレビを見ている。

彼らと一緒に、暇たそうな目を擦りながらテレビを見ている若い女性職員がいたので、僕は声をかけてみた。

「意外と人が少ないんですね、このホーム」

不意をつかれたらしく、彼女は慌てて立ち上がった。

「あ、ああ、はい。どちら様ですか？」

「入居者の家族です」

僕は平然と嘘をつく。あながち嘘でもないし。

「そうでしたかあ。例の若返りが起きて、女性の入居者さんがたくさん自分から出てってしまったもので……元々女性の方が多かった分、暇になってしまったんですよ」

彼女は苦笑する。福祉施設や老人ホームは、激務のせいもあって人手が足りないとよく聞く。暇になること自体、特殊な状況なんだろう。

「じゃあ、今入居してるのは全員男性ですか？」

「いえ、出戻りも多いと言うか——結局、戻ってくる女性もいるんですよ。何人かはまだ入居されてますよ」

「出戻り？ 若返ったのに、老人ホームに帰ってくるんですか？」

僕が訊くと、彼女は周りを気にしながら口をすぼめた。

「ええ。大きい声では言えませんがね。最近、若返った女性が老衰の症状で亡くなっているでしょう？」

「……『ぼたらか』のドラマの子も亡くなりましたもんね」

他人事のように僕が呟くと、彼女は頷いた。

「それで『自分もいつそうなるのか、分からないから』って人が何人か。ここに入ってくる方は、ご家族に迷惑をかけたくない、という人が多いですから……」

最後を、静かに迎えるために。

せっかく若返って家族の元に帰った『楼女』達の、それが決断だとすれば。

「寂しいお話ですね……」

「元々帰る場所が無かった、って言う女性もやってきます。見た目は若くても、年齢上は高齢者ですから、私達も受け入れますけど……」

彼女も話しながら、暗い表情になっていた。

めまぐるしく変化する状況に右往左往して心を痛めているのは、彼女達職員や他の高齢者福祉に従事する者も同じなのだ。

このまま話を訊いてあげようかとも思ったけど、僕の目的は残念ながら違う。

「あの、このホームに鈴さんて人が入居されてますよね？」

僕が尋ねると、突然彼女の表情が明るくなった。

「ああ、鈴さん！ おられますよー！ あの子——じゃなかった、あの方には、みんなお世話

になってるんですよ」

「鈴さんが？ 何かされたんですか？」

「はい。優しい方ですね。率先してホームのお仕事を手伝ってくれるんですよ。ああ、じゃあひょっとして貴方、鈴さんのご家族の方ですか！ .....あら？ でも鈴さん、家族はいないって言ってたような」

彼女が混乱しながら捲きたてるので、僕は笑って。

「家族です」

断言した。

女性職員に許しを得て、僕はホームの中を歩き回った。ホールやロビーにいなければ、鈴さんは部屋から出ない高齢者の相手をしているとのことだ。

広いホームを探索すると、稀に若い女性を見かける。職員かと思ったが特別仕事をしているわけでもないし、緊張感も無い。一度出て行って戻ってきたという女性達だろう。

安らかな顔で、達観したような笑顔で窓を眺める『楼女』達。

これが彼女達にとっての覚悟、彼女達の幸せなのだ。

若返ろうと、緩やかに、静かに、自分を見つめて過ごす。菜恵さんがそうしようと決めたように。

その在り方を僕は否定なんてしないし、尊敬もする。

――けど、鈴さんは違う。

まだ違っていたはずだ。僕はそれを信じて、鈴さんを探した。

一部屋一部屋、入居者の部屋をこっそり訪問する。昼寝をしている男性、俳句に興じている男性、本を読んでいる男性。みんなプライベートな時間を楽しんでいるようで、宅老所と雰囲気は変わらない。少し安心した。

ある部屋を通りかかったときに、さらりと風の匂いが流れてくるのを感じた。

そっと僕は中を見やる。ベッドの上に食事用のテーブルを置き、一人の高齢者男性が半紙と書道の道具を並べていた。男性は難しい顔で筆を持ち、紙に向かい合っている。

男性の傍ら。窓から吹き込むそよ風に銀色の髪をたなびかせて、薄桃色の唇でにこにこ笑顔浮かべながら――。

鈴さんが寄り添うように、一緒に半紙を見ていた。

同世代の入居者に、書道を教えているようだ。

「そこの払いは一度手を止めて.....そうそう、上手だねえ。指が震えるのは仕方ないから、形になってればいいんだからね、栄六さん」

「おお、そうかそうか。鈴ちゃんは若いのに賢いのう」

栄六さん、と呼ばれた男性が破顔する。

「もう、私は栄六さんより年上だよ」

苦笑いする鈴さんは――満ち足りているようにも見えた。

僕の中の覚悟がギリギリ軋むが、戻るわけにはいかない。

やおら決然と、僕は部屋の中に足を踏み入れた。

「失礼します」

男性――栄六さんが、すぐにこちらに気づく。七十歳は越えていると思うが、反応が早くてしっかりしている。

鈴さんも僕を見た。

驚いてはいるが、慌ててはいなかった。僕の顔を見て、ちょっとだけ目と口を大きく開いて、すぐに寂しげに、目を細めた。

そして視線を落とした。

僕は栄六さんのベッドを挟んで、鈴さんと向き合う。

「どなたさんかね？」

不審そうに、栄六さんが見上げてくる。

「鈴さんの、家族です。藤原忠清って言います」

「おお、鈴ちゃんの！ そりゃあ大歓迎だなあ。鈴ちゃんはいいい子だぞ。わしみたいな爺さんの相手も嫌な顔一つせずにしてくれる」

気のいい人のようだ。笑顔に清潔なハリがある。

「栄六さん……私は、栄六さんより年上なんだよう」

僕の顔を見ずに、鈴さんが悲痛な声で訴える。

若く見ないでくれ、見た目で判断しないでくれ、と請うかのように。

「いいじゃないか、若くて可愛いんだから何でも。可愛いは正義じゃ。忠清くん、鈴ちゃんの書道の腕前はすごいぞ。わしも昔やっと思ったが、この年でまた習うことになるなんて思ってもおらんかったわい。楽しくてたまらん」

水気のある声で栄六さんは笑う。

「知ってます。僕も習ってたんで、ずっと」

「おう、そうじゃったか！ その若さで珍しい。楽しいだろう」

「ええ、とっても。書道は本当に奥が深いです。紙と筆さえあれば何でも表現出来ますもんね」

力強く、僕も笑いながら頷く。

笑いあう二人の年齢差のある男達の前で、鈴さんは沈黙している。

「それで？ 忠清くんは鈴ちゃんに会いに来たんだろう？ わしは席を外れるとするかい？

いや、ここはわしの部屋じゃが」

「……会いに来たって言うか、一緒に帰りに」

「帰る？」

栄六さんは怪訝そうに呟く。

鈴さんが、びくりと体を震わせた。

「鈴さん。僕と帰ろう」

困惑した栄六さんが、鈴さんの顔を覗き込む。



俯いたまま、鈴さんは首を横に振った。

「無理だよ……………忠清くん。私は思い知ったんだよ」

静かに鈴さんが答えた。

「何をですか。何が無理なんですか」

「菜恵ちゃんが言った通りなの。私は見せかけだった。私と忠清くんは——世間が違う。見ている物が違う。住む世界が違う。年齢が違う。何より——」

死ぬ時が違いすぎるよ。鈴さんは呻いた。

「……かもしれません。でも。違うことが、そんなにいけませんか」

「いけないに決まってるよ。だって、私、もうすぐ死ぬんだもの」

鈴さんの言葉には力が籠もっていた。

「すぐだなんて、そんなのまだ分からないじゃないですか」

「すぐだよ。忠清くんと比べたら、すぐ目の前。……おばあちゃんなんだよう私は。忠清くんは分かってるはずだよ」

張りつめる会話、空気。隔てられた時間。

僕達に挟まれてしまった栄六さんは、居心地が悪いのか腕を組んで黙り込んでしまっている。

「鈴さんは……」

溢れてきた唾を、僕はごくりと飲み込んで。

「鈴さんは、僕のことを想ってくれたんじゃないんですか」

「それが間違いだったんだよう。楽しんじゃいけない。喜んじゃいけない。浮かれちゃ駄目なんだよ、忠清くん。そうじゃないと、迷わせちゃうよ。不自然な気持ちで若い人を想っちゃいけないんだよ——苦しくなるだけだもの。私じゃなくて、忠清くんが。そんな益体も無いこと、しちゃいけないよ」

「桐春達を見たからですか」

僕は、問いつめるように訊く。

「純さんを失った桐春を見ていたから。そうなんですか」

鈴さんが強い悲哀に顔を歪ませる。

「純ちゃんは幸せだったと思うよ。でも、あの子は——桐春くんは、好きになった途端に相手に逝かれてしまったんだよ？」

「桐春は、本気で純さんと付き合っていましたよ。僕から見てもあいつは、幸せそうに見えた。あれが、全部間違いだって言うんですか？」

だとしたら桐春の恋愛は、何だったと言うんだ。

「……私はねえ、忠清くん。君くらい若いときに、一番大切だった人を失ったの。それが辛くて辛くて、それでもずっと一人で生きてきたんだよ。長かった。とつても長かったんだ。誰かに、似たような思いはさせたくないんだよ。もしも……」

「もしも？」

「もしも、忠清くんが、私のこと好きになってくれたらって——そうになったら嬉しいって私も思ってた。でも、そうになったら、いずれ非道く辛い思いをさせてしまう。それだけは嫌なんだよう……」

「静かに、ただ側にいるだけっていう選択肢は無かったんですか。そういう付き合い方も、選んでくれなかったんですか？」

ただ、近所の子どもである僕に、書道を教える先生として。

もし、鈴さんがその方がいいと言うのなら、僕は従う。生徒としてだけ、側にいて生きることに耐えよう。

「それも駄目だよ……私はお婆ちゃんのくせに、駄目なのに、気持ちを変えられないんだよ。側にいるのは辛いんだ。分かって。分かっておくれ」

これは――もしかして、告白なのか。

こんな悲痛に満ちた告白があるのか。こんなものを見せるのが神の気紛れなのか。

「僕だって同じです。気持ちは変えようがありません」

神を呪うより先に、僕は鈴さんに答えなければいけない。

「それは、私が見せかけだけ若いから……」

「違います。僕は鈴さんが若返る前から、ずっと同じ想いでした」

鈴さんは啞然とした。

「嘘だよ、忠清くん……」

「あのころの気持ちが恋愛とか、そーゆう気持ちだったかどうかは分かりませんが、でも、周りの誰よりずっと鈴さんと一緒にいたい、と思ってたのは確かです。鈴さんが若返ってから、それが強くなったのも確かです。と言うか、はっきり自覚しました。強くはなりましたが、変わったわけじゃありません」

「違う、違うよ忠清くん……」

「僕は鈴さんが好きです」

この言葉を告げるために僕はここに来た。

いつもにこにこ笑って人当たりが良い鈴さんが、僕は昔から大好きだった。

なのに今の鈴さんは感情を殺して目を伏せている。

「……………ごめんねえ。それでも、私は帰れない」

「どうしても、ですか」

こくり、と鈴さんは頷く。

「もう、帰っておくれ、忠清くん」

いつもあんなにおどおどしていた鈴さんが、涙一つ浮かべない。

それだけ覚悟が深く、それだけ強い想いでいてくれた。ならば、だからこそ。

僕は引き下がるわけにいかない。

「そういえば鈴さん、僕、お土産持って来てるんですが……」

僕はセカンドバッグを抱えて、ジッパーを開けようとした。

だが鈴さんは、俯いたまま首を横に振る。もうこちらの目も見えてくれない。何が何でも僕を拒絶する気だ。

気を遣った栄六さんが、割って入ってくれた。

「まあまあ鈴ちゃん、お土産ぐらい受け取ってあげてもいいんじゃないかね？」

「……………」

無言だ。さらさら、さらさらと、風だけが通り過ぎる。

気まずそうに、栄六さんが僕に目配せしてきた。

「やれやれじゃなあ。どうするのかね、忠清くん……？」

「栄六さんも、書道が好きなんですよね」

「うむ。下手の横好きじゃがね」

「じゃあこれ、見てもらえますか？」

「うん……？」

セカンドバッグの中から、僕はそれを取り出した。ここに来るまで、濡れないように、破れないように、大切に持ってきたものだ。

栄六さんはすぐにそれが何か気づいたようだ。抱きとめるように受け取ってくれる。

「これは――書じゃな。君が書いたのか？」

それは、半紙の束だった。

「はい。つまらない、下手の横好きの書ですけど」

「本当にわしが見てもいいのかね……？」

ちらりと栄六さんが様子を窺うが、鈴さんは依然として無反応だ。垂れた銀髪が瞳の色さえ隠している。

「よろしく申し上げます、栄六さん」

僕は深くお辞儀をする。この書を見てもらうとは、そういうことだ。

「うむ、分かった。拝見させてもらおう」

栄六さんは、慎重に僕の書を広げ始めた。

広げて。広げ続けた。なかなか広げ終わらないほどに、僕の書は多い。

老眼鏡をかけた栄六さんは、厳しい目で見始め、見定めてくれている。鷹のように鋭い年を感じさせぬ眼光。好きというだけあって、書に関しては審美眼のある人のようだ。

長い時間をかけて焦らずに、栄六さんは僕の書を見ている。

その間ずっと、鈴さんは顔を上げなかった。

やがて栄六さんは大きなため息をついた。

「これは――本当に君が書いたのかい？」

「はい。拙くてすみません」

「いや。何が拙いものか。これは……大変だったろう。実に生き生きとした行書じゃ」

ホーム住まいとは思えない、強壯な笑顔で栄六さんが微笑んでくれた。

「ありがとうございます。でも、まだまだです」

まだまだなのだ。まだまだ。まだまだなのだ。

僕はまだまだまだまだまだまだ、書き続ける覚悟で、これを持ってきた。

栄六さんは半紙の束を一枚一枚見て、嘆息するようにため息を吐く。

「しかし忠清くん、鈴ちゃん、こりゃ――わしには無理だなあ」

顔を上げようとしない鈴さんに、栄六さんは半紙の束をつきつけた。

「見てやりなさい」

鈴さんは強ばって動かないが。

「見てやりなさい、鈴ちゃん。わしは読めはするが、これは分からん。鈴ちゃんにしか分からん書なのだろう。これはそういうものだ」

栄六さんが食い下がらなかった。

鈴さんは、躊躇しながらそっと、半紙に視線を滑らせて一一目を剥いて、手に取った。

もの凄い早さで、目を通していく。

「忠清くん、これは一一あの子達の歌の」

写経の如くに延々と記された、数十枚にも渡る半紙。

それは、『ぽたらか』が発表した全ての曲の歌詞を、僕が書写したものだ。

僕と鈴さんが一緒に好きになった、あの混沌とした歌。

一一この状況が訪れなければ、生まれなかった歌。

生まれてしまった希望の歌。

「どうして、これを書に？」

鈴さんが、少しだけ顔を上げた。まだ僕の顔は見てくれないが。

「鈴さんと僕が、一緒に好きになった曲だから。残しておきたかったんです」

「それだけで、こんなにたくさん書いたのかい？　こんなに丁寧に一一こんなに、上手になって……」

誉められて当然だ、と僕は自信家を気取る。今までのどんな書より、全身全霊を込めていたのだから。

「それしかまだ曲が出てないから。実は、毎日ちょっとずつ書いてたんだ。鈴さんに見て欲しくて。いい曲ならこうして書にも出来る。僕が、鈴さんに教わった書道で、一緒に好きになった物をこの世に残せる」

「でも……あの子達はもう曲を……」

「出ます、新しい曲」

「え？」

再び沈みかけた鈴さんが、ぽかんと口を開ける。

「ドラムのアヤさんのお孫さんが加入するそうです。全員『楼女』ってわけにはいかなかったけど、それも面白いかなって思う。若返る前からあの人達は、ずっと音楽で繋がってた。そういう受け継がれ方があったっていい。若い人も『楼女』も、一緒に生きるしか無い世界になったんだから」

「お孫さんが一一そうなのかい」

鈴さんはそれだけ呟いて、再び黙り込んでしまった。

「鈴さん。僕は書道の腕はまだただけど、これからも書いて、残していきます。だからどうか、それを持っていて下さい。また持ってきますから。僕は、鈴さんに残し続けますから。鈴さん

が何も残したくなくっても、僕の方が」

紙の上では、ずっと僕達は同じ世界にいた。せめて、その世界の上では。

「僕の方が、いつ死んでもいいように」

「忠清くん……」

僕は精一杯微笑んで、バッグを背負った。

「なんじゃ、帰るのか忠清くん？」

栄六さんが、名残惜しそうに僕を見た。

「はい。また書を書きためて、持ってきます。諦めたわけじゃないんで」

新しい曲が出れば、またそれを。

「そうか。全く、若者にしておくには惜しいなあ、君は」

「ありがとうございます」

よく分からない誉め言葉だったけど、悪い気はしなかった。

昔から、僕は年上にしか誉められない。

軽くなったバッグを担いで、僕はホームの門を出る。

無理矢理鈴さんの腕を引っ張って強引に連れ出すべきだった、という意見も当然あるだろうけれど、僕にはそれが正しいと思えないのだ。

力づくで押し切るような真似をしても、鈴さんが着いてきてくれる気が全くしない。そういう若い恋愛が出来れば苦労は無いのだけど、何しろ僕は老人系男子らしいから。

それに何十年も誰も引っ張り出せなかった鈴さんの想いを、そんな力業で変えられるわけが無い。

僕の覚悟は、あの書の中に置いてきた。あれで駄目なら、また書くだけだ。

命を懸けて、僕の方が、死に臨む。

上手な方法では無いかもしれないけど、そうしようと僕は決めた。

木漏れ日を浴びて田舎道を歩き、もう少しでバス停に辿り着く――そのとき。

「た、た、忠清くん！」

叫び声に、僕は振り返った。

ホームの方角から、鈴さんが走ってきた。ぜいぜいと呼吸を乱れさせて、半紙の束を大切そうに抱えながら、懸命に追いかけてくる。

「ま、待って。待ってえ、忠清くん」

「鈴さん、無茶しないで下さい！」

追いついた鈴さんは、銀色の髪を滝のような汗で濡らして地面にへたり込んでしまった。

僕もしゃがんで体を支えようとするが、鈴さんはよろめきながらも自分の足で何とか立った。

「……ま、まだ、私にも、教えられることがあるかなあ」

肩で息をしながら、必死に呻く鈴さん。

「まだ、忠清くんに書道を教えてもいいのかなあ、私」

顔を上げた鈴さんの瞳から、ぽろぽろと滴が落ちた。

陽光が透けて、銀色に輝いて見える。

それは死を見据えるための涙と言うより、すがるような。

「もっと一緒に生きていいのかなあ、忠清くん？」

あるいは、祈るような。

「いいに決まってるじゃないですか」

それが神様の気紛れだとしても。

「本当に……？ 私、もうすぐいなくなっちゃうかもしれないよ。いや、絶対に、絶対にいなくなるよ」

「――知ってます」

そんなことは、知っていて忘れていただけのことだ。僕だけではなく、鈴さんだけでもなく全員が。

この世界の誰もが、こんなことが起きなければ、忘れていたことだ。

あるいは、そんな覚悟をもう一度人に考えさせるために、僕達の世界はこのように変貌してしまっただけかもしれない。

世代を変えることで、世界を見直すために。

「お願いだから、その時ぐらいは悲しませて下さい。思い出させて下さい」

「……それで、本当にいいのかい？」

「それぐらいの権利は下さい」

「……うん。分かった」

憧憬にも似た目で、鈴さんが頷く。

「あげるよ、権利。だから——それまで離れないでいてくれる？」

「僕は生まれたときから、ずっと鈴さんと一緒にいたんですよ。今から離れろって言う方が、難しいです」

息を整えて落ち着いた鈴さんに、僕は手を伸ばす。

涙と汗でくしゃくしゃの鈴さんは、小さな手を僕の手絡ませた。

「一緒に生きましょう、鈴さん」

強く握り返す。その温もりには、もう微塵も違和感が無かった。

「——はい、忠清くん」

鈴さんがにっこり笑う。

その唇に、僕はそっと唇を重ねる。ふわりと暖かい。

瞬間——またしても、僕の意識に緞帳が下りた。

僕は、別の世界の海に沈んでいた。

あの光が落ちてきた日と同じような、けれども別の海。

あのときは水面に浮かんでいくパノラマを見たけど、今度は何故かパノラマが水底に沈んでいき、僕自身はぐんぐんと浮上していた。

古風な袴に身を包んだ、黒髪の幼い鈴さんが、小学校の教室で授業を受けている。

ほんわかした雰囲気のある鈴さんは、自分から人に話しかけることが出来なくて、なかなか周囲にうち解けることが出来ない。

ただ一人、眼鏡をかけた明け透けな女の子だけが、鈴さんと仲良くしてくれた。彼女は川島米子と名乗った。

その子と鈴さんは無二の親友となって、長い間互いを支えとして生きていくことになる。

鈴さんは、書道教室に打ち込んでいた。

勉強は苦手だけど、書道なら人一倍努力も集中も出来るから。その内、同じ書道教室の男の子と仲良くなって、一緒に帰るようになった。

互いの家にも遊びに行ったりして、一緒に家の軒先でスイカを食べた。

けれども男の子とは、ひぐらしがうるさい夏の日には転校してしまっていて以来、会うことも無かった。

それが鈴さんの初恋だった。

時が過ぎ、終戦を経て、鈴さんは高等部に進学した。

そこで鈴さんは、一人の男子生徒に話しかけられる。

教室の隅で書道に関する本を一心不乱に読んでいた鈴さんは、最初は自分が話しかけられていることに気づいていなかった。

仕方無いので、彼は「また後で」と手紙を残していった。

翌日、鈴さんはその男子生徒にもう一度話しかけられた。

鈴さんは相手の顔を全く覚えていなかったので戸惑ったけれど、彼はまるで昔馴染みのように軽佻浮薄な態度で、鈴さんと親しくなろうとした。

はっきり言って、鈴さんは彼に良い印象を持てなかった。それでも彼は時間が空く度に鈴さんの元へやってきた。気の弱い鈴さんは断ることも出来ない。

ある日、運動神経が悪い鈴さんは、体育の授業で転倒してかすり傷を負ってしまった。

それを遠くから見ていた男子生徒は、一心不乱に鈴さんの元へ走ってきて鈴さんをおぶり、保健室へと駆け込んだ。



大した怪我では無い、と言われて自分のことのように安心する彼を見て、鈴さんは初めて彼に心を許してみる気になった。

会う度に親しく話すようになった鈴さんと男子生徒の仲は、亀の歩みの如く時間をかけて進展していった。鈴さんの方が引っ込み思案だったせいで会話が弾むわけでは無かったけど、それでも彼は笑いながら一緒にいた。

軽い性格の割に勤勉で、成績は良かった彼は、学者の道を志していた。

鈴さんは、彼の夢の話を聞くと、笹の葉が揺れる午前中の和室で書道をしているときのように、心が落ちつく自分に気づいていた。

卒業が近づいたある日、彼は鈴さんに告白してきた。

恋愛をすることに実感が湧かなかった鈴さんは三日三晩眠れずに悩んだけれど、勇気を出して彼の気持ちを受け入れることにした。

そうして、二人は恋人同士になった。

初めてのデートで二人は、電車に乗って花火を見に行った。

河原で初めて手を繋ぎ、茜色の空の下で打ち上げ花火を見上げる。あまりに恥ずかしくて、鈴さんは彼の顔を見ることが出来なかった。

色とりどりの花火だけを延々と見続けていると、大きな彼の手が、鈴さんの小さい頭を慈しむように撫でてくれた。

その帰りに二人は、小さなそば屋で一緒にざるそばを食べた。

食の細い鈴さんがそばを残そうとすると、彼が勝手に平らげようとする。自分の食べ残しを男性に食べられるのがたまらなく恥ずかしくて、鈴さんは機嫌を損ねた。

それが初めての我が侘だった。

時が過ぎて鈴さんは成長して、一人の女性になっていた。

彼は大学に入り、鈴さんは書道の勉強を続けた。

交際が続いてしばらくしたある日、鈴さんの母親が交通事故で急死した。その数年前に父親も病死していたので、兄弟姉妹のいない鈴さんは一人ぼっちになった。

突然のことに茫然自失し、一人お通夜に泣きさざめく鈴さんの手を、ずっと彼は握ってくれていた。自分がずっと一緒だから大丈夫だ、と力強く言ってくれた。

その日、鈴さんは彼の妻になりたいと思った。

彼の気持ちも同じだった。

大学を卒業して菌類学者になった彼と書道教室で働き始めた鈴さんは、周りに祝福されながら

籍を入れた。

それぞれの道を突き進みながら、二人は幸福を噛みしめていた。

二人はいつも一緒に買い物に出かけた。

夫は自分が欲しい本を我慢してでも、鈴さんに高級な服を買ってくれようとした。

鈴さんは欲しい服を我慢して安物ばかり選んで、夫が欲しい本を買わせようとした。

互いが譲り合いすぎて、いつも手が届きそうな物よりちょっとだけいい物を買えた。

料理が苦手だった鈴さんは、塩を効かせすぎたり砂糖を入れすぎたりして、いつも夫を苦笑いさせた。夫は美味しくないものを食べたときにだけ「美味しい」と告げる、天の邪鬼な人だった。

悔しがった鈴さんが書道教室の先生をする傍ら、毎日料理の修業をして一番得意になったのがオムライスだった。

天の邪鬼な夫が、初めて本音で「美味しい」と言ったとき、鈴さんは勝ったと思った。

勿論喧嘩することだってあった。

ちょっとした行き違いから、鈴さんの頬を夫が引っぱたいたこともあった。

そんなとき、鈴さんは夫の大切な資料や論文を風呂敷に詰め込んで、家出をした。

大体は同じ町に住んでいる友人の家に隠れて一夜を過ごそうとするのだけど、夫は必ず、仕事を放り出して汗まみれになって探しにきた。

意地を張って謝らず、けれど心底安心してホッとする夫の姿を見て、ようやく鈴さんは許す。けれど仕事を休ませてしまったことが申し訳なくて、次の日は美味しいご飯を作る。

それでいつも喧嘩は終わりだった。

いつ子どもが出来るだろう。

鈴さんはそれが、夫婦生活の中で一番の楽しみだった。

けれども悲劇はいつも、不意な通り物のようにやってくる。

ある日、当時の医学では完治が難しい重病に、夫が冒されてしまった。

鈴さんが知ったとき、すでに夫の余命は残り少なかった。

病床の夫は、まだ若い鈴さんに新しい人と新しい人生を生きるように言ったが、日に日に弱っていく夫の前で、そんなことはとてもじゃないけど考えられなかった。

鈴さんにとって彼と過ごした日々は、どんな物にも帰られない、これ以上ない幸福な日々だった。子どもは出来なかったけど、それでも毎日が華やかな彩りに満ちていた。

数ヶ月後、予想されたより早く穏やかな顔で逝った夫の傍らで、鈴さんは一晩中泣き通した。もうその手を握りしめてくれる、あの人はいない。

鈴さんから彩りは失われてしまった。

銀色どころか灰色の日々がやってきた。

それから幾年の月日が流れて。

さらに年を取り、鈴さんは一人の人生を生き続けた。

いっそ命を絶とうと思う日もあったけど、友人達と一緒に、鈴さんは日々を生き続けた。

鈴さんにとっての一番の救いは、書道教室での繋がりだった。

書道を習いに来る生徒達は、鈴さんにとってみな我が子のように愛しかった。

鈴さんが一生をかけて学んだものを、子ども達が楽しみながら身につけて、やがて大人になってくれることが何より嬉しかった。

そして一一何百人目かに、鈴さんは僕と出会った。

僕は鈴さんに懐き、鈴さんといつも共に歩いた。

一緒に、歩き続けていた。

過ぎ去った光景を見送りながら、海面へと僕は浮かんでいった。

「忠清くん……？」

鈴さんの声で、僕の意識は現実に戻ってきた。

薄桃色の唇をそっと僕から離しながら頬に紅葉を散らす、真っ赤な鈴さんの顔が間近にあった

。

僕が意識を失ってから数秒程度しか、時間は流れていなかったようだ。

今見てきたパノラマが夢だったのか、幻覚だったのか。僕には判別がつかないが、鈴さんの過ごしてきた何十年もの月日は、ただの並べられた写真では無いということは理解出来る。

僕が生きてきたたった十数年の月日と経験なんて、鈴さんが背負ってきた人生に拮抗するには薄っぺらすぎる、ということも甚だしく分かっている。

だけど今僕の手は、目の前の鈴さんが強く握ってくれている。

僕は鈴さんの背中を――鈴さんの人生を強く抱きしめる。

鈴さんも抱きしめ返してくれる。包み込むようにではなく、互いを支え合うために。

この温かさ。

矢張り。鈴さんは、ずっと鈴さんだ。

僕も鈴さんも、海楼から見下ろされたパノラマなんかじゃない。

それからのことを少しだけ語っておこう。

朋香は僕の告白を知って、「鈴さんは正式に私のライバルになった」と堂々と吹聴していた。鈴さんは鈴さんで、「張り合いがあるねえ」と笑っている。

モテ期が到来したのかと最初は思っていたけど、あの二人は僕がいない所でよく買い物に行ったり遊びに行ったりしている。

どちらかという、僕は女の友情のダシにされてる気がしないでもない。別にいいけど。

えつさんは夫と孫の桐春を見守りながら、毎日多くの若者を叩きのめしている。

最近はお孫さんの弟子も増えてきたそうで、えつさんも教えていて楽しそうだ。そのおかげか、ボケの症状も緩和しているとか。

桐春が継がなければ女性専門の道場になりかねないが、矢神流道場は変わらず盛況である。

米子さんは、小中学生を対象にした私塾を開校した。

教え方が若い先生に比べて厳しいらしいけど、勉強の後に米子さんが出してくれる手作りのお菓子が、子ども達には好評だ。

孫の優弥は「お婆ちゃんを取られる」と大泣きしているそうで、米子さんは毎日苦笑いしている。

菜恵さんは、今も祈祷師兼占い師を続けている。

たまに鈴さんと一緒に遊びに行くけど、相変わらず旦那さんを見せてくれない。

一度だけ「ナエちゃん、寂しいよ」と家の奥からすすり泣きが聞こえて、菜恵さんは顔を真っ赤にして「あのクソじい」と発憤していた。怪しげな人には違いないが、不意に見せる素顔が実に和む。

桐春は、調子よく新たな恋を探している。

話によると、純さんのひ孫（ずっと東京にいたそうだ）と最近初めて会うことが出来て、その子につきまとわれて困っているらしい。

「純さんによく似ているんだ」と満更でも無さそうな桐春だが、まだ相手は小学生だそうである。

『楼女』とは別の意味で難しい恋愛に発展した場合、僕は止めるべきなのだろうか。最近の悩み所だ。

『ぼたらか』は、孫のアヤメさんをドラムスに加えた後、精力的に新曲を発表している。

ファンはどんどん増えているらしく、この前ついに新曲の販売数とダウンロード数が週間チャ

一ト一位を獲得した。話題性に音楽性が着いてきた、ということなのだろう。

「バンドとしてはまだまだこれからです」と、メンバーは口を揃えていた。

本当にビッグになって欲しい。

そして僕は、今でも楽しく鈴さんに書道を教わっている。

頻度が以前より増えてしまって、週一どころか週七になりそうな勢いだ。入り浸っていると言ってもいい。

母さんに複雑そうな表情をされたり桐春に応援されたりで、まあ面倒なこともあるけれどそれなりに楽しい交際を継続している。

鈴さんは今でも仏壇を寂しそうに眺めることが多いし、心中は複雑だけれど。

さらさらと竹の葉の擦れる音を聴きながら――きっと慣れていくのだろう。

僕も、鈴さんも。

「私の葬式が終わったら、もう一度、自分の幸せについて考えるんだよ」

鈴さんはたまに、陽気に笑いながらそう呟く。

「まあ、そのときが来ればね」

僕はいつもそんな感じで、虚勢を張る。

別れが来るのは決まっているし、分かっている。

それを想うからこそ大切に出来る日々がある。

気候は変わっても週末は来る。

最初から、重要なのはそれだけのはずだ。

例え後で身を引き裂かれるような想いになろうとも、それで問題は無い。

例えこの世界が地獄そのものであろうとも、何も問題は無い。

それから十年以上、僕と鈴さんは恋をした。